

浮雲

二葉亭四迷



浮雲はしがき

薔薇ばらの花は頭かしらに咲て活人は絵となる世の中独り文章の而已み
は黴かびの生えた陳奮翰ちんぶんかんの四角張りたるに頬返ほおがえしを附けかね又
は舌足らずの物言ものいを学びて口に涎よだれを流すは拙つたなしこれはどう
でも言文一途いっとうの事だと思立ては矢も楯たてもなく文明の風改良
の熱一度に寄せ来るどさくさ紛れお先真闇三宝荒神さまと
春のや先生を頼み奉り欠硯たてまつ かけすずり おぼろに朧の月の雫しずくを受けて墨摺流すりながす
空のきおい夕立の雨の一しきりさらさらさつと書流せばア
ラ無情始末うたてにゆかぬ浮雲めが艶やさしき月の面影を思い懸がけなく
閉籠とじこめて黒白あやめも分かぬ烏夜玉うばたまのやみらみつちやな小説が出来
しぞやと我ながら肝を潰つぶしてこの書の巻端に序するものは

明治^{ひのとい}丁亥初夏

二葉亭四迷

浮雲第一篇序

古代の未だ曾て称揚せざる耳馴れぬ文句を笑うべきものと
 思い又は大体を評し得ずして枝葉の瑕疵のみをあげつらうは
 批評家の学識の浅薄なるとその雅想なきを示すものなりと誰
 人にやありけん古人がいにぬ今や我国の文壇を見るに雅運日
 に月に進みたればにや評論家ここかしこに現われたれど多く
 は感情の奴隸にして我好む所を褒め我嫌うところを貶すその
 評判の塩梅たる上戸の酒を称し下戸の牡丹餅をもてはやすに
 異ならず淡味家はアライを可とし濃味家は口取を佳とす共に
 真味を知る者にあらず争でか料理通の言なりといふべき就中
 小説の如きは元来その種類さまざまありて辛酸甘苦いろいろ

なるを五味を愛憎する心をもて頭アタマくだしに評し去るは豈あにに心
 なきの極ならずや我友二葉亭の大人うしこのたび思い寄る所あり
 て浮雲という小説を綴つづりはじめて数ならぬ主人にも一臂いつびをか
 すべしとの頼みありき頼まれ甲斐がいのあるべくもあらねど一言
 二言の忠告など思いつくままに申し述べてかくて後大人の縦
 横なる筆力もて全く綴られしを一閱するにその文章の巧たくみなる
 勿論主人などの及ぶところにあらず小説文壇に新しき光彩を
 添けだなんものは蓋しこの冊子にあるべけれど感じて甚はなはだ僭越せんえつの
 振舞にはあれど只所ただ々片言隻句せつくの穩かならぬふしを刪正さんせいして
 竟ついに公にすることとなりぬ合作の名はあれどもその実四迷大
 人の筆に成りぬ文章の巧なる所趣向の面白き所は総すべて四迷大
 人の骨折なり主人の負うところはひとり僭越とがの咎とがのみ読人乞こ
 うその心してみそなわせ序ついでながら彼の八犬伝水滸伝すいこでんの如き規

摸の目ざましきを喜べる目をもてこの小冊子を評したまう事
のなからんには主人は兎も角も二葉亭の大人否小説の靈が喜
ぶべしと云爾

第二十年夏

春の屋主人

第一編

第一回 アアラ怪しの人の挙動ふるまい

千早ちはや振ふる神無月かみなづきももはや跡二日ふつかの余波なごりとなつた二十八日の午後三時頃かんだみつに、神田見附の内より、塗渡とわたる蟻あり、散ちる蜘蛛くもの子とうようよぞよぞよ沸出わきいでて来るのは、孰いずれも頤おとがを氣にし給たまう方々。しかし熟々つらつら見て篤とくと点檢てんけんすると、これにも種々種類さまざまのあるもので、まず髭ひげから書立てれば、口髭ほおひげ、頬髭あごひげ、頤あごの鬚ひげ、暴やけに興お起おした拿破崙ナポレオン髭ひげに、狎チンの口めいた比斯馬ビスマルク克ひげ髭、そのほか矮鷄ちやぼ髭ひげ、貉むじな髭ひげ、ありやなしやの幻の髭と、濃うすくも淡うすくもいろいろに生は分える。髭ひげに續ついて差ちがいのあるのは服飾みなり。白木屋仕込みしろぎやの黒物くろいものづくめには

フランス
 仏蘭西皮の靴くつの配偶めおとはありうち、これを召す方かた様の鼻毛は延び
 て蜻蛉とんぼをも釣つるべしという。これより降くだつては、背皺せじわよると枕詞まくらことば
 の付く「スコツチ」の背広にゴリゴリするほどの牛の毛皮靴、そ
 こで踵かかとにお飾たやを絶たさぬところから泥どろに尾ひを曳かめめのこズボン、いず
 れも釣つるしんぼうの苦患くげんを今に脱なせぬ貌かお付つき。デモ持主は得意なも
 ので、髭もくずあり服あり我なまた奚もとをか覓もめんと済うした顔色がんしよくで、火を
 くれた木頭もくずと反身そつくりッてお帰り遊あそばす、イヤお羨うらやましいことだ。そ
 の後あとより続ついて出てお出でなさるは孰いずれも胡麻塩頭ごましお、弓と曲まげ
 ても張はの弱い腰こしに無残むざんや空弁当からを振垂ぶらさげてヨタヨタものでお帰
 りなさる。さては老朽らうきうしてもさすがはまだ職たに堪たえるものか、
 しかし日本服でも勤められるお手軽なお身の上、さりとてまた
 お氣きの毒どくな。

途上人影ひとけの稀まれに成つた頃、同じ見附の内より両人ふたりの少年わかものが

話しながら出て参つた。一人は年齢ねんばい二十二三の男、顔色は蒼味あおみ七分に土氣三分、どうも宜よろしくないが、秀た眉ひいでまゆに儼然ぎつとした眼付で、ズーと押徹おしとおつた鼻筋、唯惜ただおしいかな口元が些ちと尋常でないばかり。しかし締しまりはよさそうゆえ、絵草紙屋の前に立つても、パツクリ開あくなどという氣遣きづかいは有るまいが、とにかく顎とがが尖つて頬骨あらわが露れ、非道ひどく癪やつれている故せいか顔の造作がとげとげしていて、愛嬌あいぎようげ氣けといつたら微塵みじんもなし。醜みにくくはないが何処どこともなくケンがある。背せいはスラリとしているばかりで左而さのみ已高いという程でもないが、瘦肉やせじしゆえ、半鐘はんしゆなんとやらという人間の悪い渾名あだなに縁えんが有りそうで、年数物ねんすぶつながら摺た畳皺みじわの存ぞんじた霜降しもふり「スコツチ」の服を身に纏まとツて、組紐くみひもを盤帶はちまきにした帽檐つばひろ広ひろな黒羅紗ラシヤの帽子ぼうしを戴いたいてい、今一人は、前の男より二ツ三ツ兄あにらしく、中肉中背で色白の丸顔、口元の尋常な所から眼付のパツチリとした所は

仲々の好男子ながら、顔立がひねてこせこせしているの、何となく品格のない男。黒羅紗の半「フロックコート」に同じ色の「チヨツキ」、洋袴は何か乙な縞羅紗で、リュウとした衣裳附、縁の巻上った釜底形の黒の帽子を眉深に冠り、左の手を隠袋へ差入れ、右の手で細々とした杖を玩物にしながら、高い男に向い、

「しかしネー、若し果して課長が我輩を信用しているなら、蓋し已むを得ざるに出でたんだ。何故と言ッて見給え、局員四十有余名と言やア大層のようだけれども、皆腰の曲ツた老爺に非ざれば氣の利かない奴ばかりだろう。その内で、こう言やア可笑しい様だけれども、若手でサ、原書も些たア嚙つていてサ、そうして事務を取らせて捗の往く者と言つたら、マア我輩二三三人だ。だから若し果して信用しているのなら、已を得ないのサ」

「けれども山口を見給え、事務を取らせたらあの男程搦の往く者はあるまいけれども、やつぱり免を喰つたじゃアないか」

「彼奴あいつはいかん、彼奴は馬鹿だからいかん」

「何故」

「何故と言つて、彼奴は馬鹿だ、課長に向つて此間こないだのような事を言う所を見りやア、弥馬鹿いよいよだ」

「あれは全体課長が悪いサ、自分が不条理な事を言付けながら、何にもあんなに頭ごなしにいうこともない」

「それは課長の方が或は不条理かも知れぬが、しかし苟いやしくも長官たる者に向つて抵抗を試みるなぞというなア、馬鹿の骨頂だ。まづ考えて見給え、山口は何んだ、属吏じゃアないか。属吏ならば、仮令たとい課長の言付を条理と思つたにしろ思わぬにしろ、ハイ言つてその通り処弁しよべんして往きやア、職分は尽きてるじや

アないか。然るに彼奴の^{しか}ように、苟も課長たる者に向つてあんな差図がましい事を……」

「イヤあれは指図じやアない、注意サ」

「フム乙^{おつ}う山口を弁護するネ、やつぱり同病相憐^{あいあわ}れむのか、アハアハアハ」

高い男は中背の男の顔を尻^{しりめ}眼にかけて口を鉗^{つぐ}んでしまつたのはなしで談話がすこし中絶^{とぎ}れる。錦町へ曲り込んで二ツ目の横町の角まで参つた時、中背の男は不図^{ふと}立止つて、

「ダガ君の免を喰^くたのは、弔すべくまた賀すべしだぜ」

「何故」

「何故と言つて、君、これからは朝から晩まで情婦^{いろ}の側^{そば}にへばり付いている事が出来らアネ。アハアハアハ」

「フフフン、馬鹿を言給うな」

ト高い男は顔に似に気なく微笑を含み、さて失敬の挨拶あいさつも手輕
 るく、別れて独り小川町おがわまちの方へ参る。顔の微笑が一かわ一かわ
 消え往くにつれ、足取も次第々々に緩ゆるかになつて、終ついには虫の這は
 う様になり、悄然しよんぼりと頭をうな垂れて二三町程も参まゐつた頃、不図ふと
 立止りて四辺あたりを回顧みまわし、駭然がいぜんとして二足三足立戻もどつて、トある
 横町へ曲り込んで、角から三軒目の格子戸こうしど作りの二階家へ這入はい
 る。一所いっしょに這入はいつて見よう。

高い男は玄関を通り抜けて縁側へ立出たちいで、傍かたわらの坐舖ざしきの障子
 がスラリ開あいて、年頃十八九の婦人の首、チョンボリとした摘つまみツ
 鼻ばなと、日の丸の紋を染抜いたムックリとした頬とで、その持主
 の身分が知れるという奴が、ヌツト出る。

「お帰かへなさいまし」

トいつて、何故か口舐くちなめずりをする。

「叔母さんは」

「先程お嬢さまと何処らへか」

「そう」

ト言捨てて高い男は縁側を伝つて参り、突当りの段梯子を登つて二階へ上る。ここは六畳の小坐舗、一間の床に三尺の押入れ付、三方は壁で唯南ばかりが障子になっている。床に掛けた軸は隅々も既に虫喰んで、床花瓶に投入れた二本三本の蝦夷菊は、うら枯れて枯葉がち。坐舗の一隅を顧みると古びた机が一脚据え付けてあつて、筆、ペン、楊枝などを挿挿しにした筆立一個に、齒磨の函と肩を比べた赤間の硯が一面載せてある。机の側に押立たは二本立の書函、これには小形の爛缶が載せてある。机の下に差入れたは縁の欠けた火入、これには摺附木の死体が横ッている。その外坐舗一杯に敷詰めた毛団、衣紋竹に釣るし

た袷衣あわせ、柱の釘くぎに懸けた手拭てぬぐい、いずれを見ても皆年数物、その証拠てくには手擦すれていて古色蒼然そうぜんたり。だが自ら秩然とりかたづいと取旁付とりかたづいている。

高い男は徐しずかに和服に着替え、脱棄だつしてた服を畳みかけて見て、舌鼓したづづみを撃ちながらそのまま押入へへし込んでしまう。ところへトパクサと上よこはばッて来たは例の日の丸の紋を染抜いた首の持主、横幅よこはばの広い筋骨たぐまの逞たくましい、ズングリ、ムツクリとした生理学上の美人で、持ッて来た郵便を高い男の前に差置いて、

「アノー先刻さつきこの郵便が」

「ア、そう、何処から来たんだ」

ト郵便を手を取って見て、

「ウー、国からか」

「アノネ貴君あなた、今日のお嬢さまのお服飾な飾りは、ほんとにお目に懸

けたいようでしたヨ。まずネ、お下着が格子縞きはちじようの黄八丈で、お上着はパツとした宜引縞いひしまの糸織で、お髪は何時いづものイボジリ捲きでしたがネ、お搔頭かんざしは此間出雲屋からお取んなすったこんなと故意わざ々々手で形を拵こしらえて見せ、

「薔薇ばらの花搔頭はなかんざしでネ、それはそれはお美しゅう御座いましたヨ……私もあんな帶留が一ツ欲しいけれども……」

ト些すこし塞ふさいで、

「お嬢さまはお化粧なんぞはしないと仰おつしやるけれども、今日
はなんでも内々で薄化粧なすつたに違いありませんヨ。だつて
なんぼ色がお白しろッてあんなに……私わたくしも家うちにいる時分はこれでも
ヘタクタ施つけたもんでしたガネ、此家こちらへ上ッてからお正月ごしんぞばかりに
して不断は施けないの、施けてもいいけれども御新造ごしんぞさま
の悪口いが厭いやですワ、だッて何時いつかもお客様きやくさまのいらッしやる前で、

『鍋のお白粉しろいを施なけたところは全然炭団まへ霜が降ふったよう御座い

ます』ッて……余りあんまじゃア有りませんか、ネー貴君、なんぼ私

が不器量だッて余りじゃアありませんか」

ト敵手あいてが傍そばにでもいるように、真黒になつてまくしかける。

高い男は先程より、手紙を把とッては読かけ読かけてはまた下へ

措おきなどして、さも迷惑ていな体。この時も唯「フム」と鼻を鳴らし

た而已のみで更に取合あわぬゆえ、生理学上の美人はさなくとも罅えみわ壊

れりような両頬ようきようをいとど膨脹ふくらして、ツンとして二階を降りる。

その後姿を目送みおくッて高い男はホット顔、また手早く手紙を取上

げて読下す。その文言もんごんに

一筆示ひとふでし※、さても時こうがら日増しにお寒そうらう相成り候え

ども御無事にお勤め被成候や、それのみあんどくらし※、²母事
 もこの頃はめつきり年をとり、髪はの毛も大方は白髪しらがになるに
 つき心まで愚痴に相成候と見え、今年の晩くれには御地おんちへ参られ
 るとは知りつつも、何とのう待遠にて、毎日ひにち指のみ折
 暮らし※、³どうぞどうぞ一日も早うお引取下されたく念じ※、⁴
 さる二十四日は父上の……

と読みさして覚えずも手紙を取落し、腕を組んでホット溜息ためいき。

第二回 風変りな恋の初峯入はつみねいり 上

2 「参らせ候」のくずし字、13-9

3 「参らせ候」のくずし字、13-11

4 「参らせ候」のくずし字、13-12

高い男と仮に名乗らせた男は、本名を内海文三と言ッて静岡
県の者で、父親は旧幕府に仕えて俸禄を食だ者で有ツたが、幕
府倒れて王政古に復り時津風に靡かぬ民草もない明治の御世に
成ッてからは、旧里静岡に蟄居して暫らくは偷食の民となり、為
すこともなく昨日と送り今日と暮らす内、坐して食えば山も空
しの諺に漏れず、次第々々に貯蓄の手薄になるところから足搔
き出したが、さて木から落ちた猿猴の身というものは意久地の
無い者で、腕は真陰流に固ッていても鋤鍬は使えず、口は左様
然らばと重く成ッていて見れば急にはヘイの音も出されず、と
いつて天秤を肩へ当るも家名の汚れ外聞が見ツとも宜くないと
いうので、足を搦木に駄廻ッて辛くして静岡藩の史生に住込み、
ヤレ嬉しやと言ッたところが腰弁当の境界、なかなか浮み上る
程には参らぬが、デモ感心には多も無い資本を吝まずして一子

文三に學問を仕込む。まず朝勃然起る、弁当を背負しよわせて學校へ出だして遣やる、歸かへつて来る、直ちに傍近の私塾へ通わせると言うのだから、あけしい間がない。とても余所外よそほかの小供では続かないが、其處そこは文三、性質が内端うちばだけに學問には向くと見えて、余りしぶりもせずして出て参る。尤も途もつとに蜻蛉とんぼを追う友を見てフト氣まぐれて遊び暮らし、悄然しよんぼりとして裏口から立戻かへつて来る事も無いではないが、それは邂逅たまたまの事で、ママ大方は勉強する。その内に學問の味も出て来る、サア面白くなるから、昨日きのうまでは督責とくせきされなければ取出さなかつた書物をも今日は我ひもとから繙ひもとくようになり、随したがつて學業も進歩するので、人も賞讃ほめそやせば両親も喜ばしく、子の生長そだちにその身の老るを忘れて春を送り秋を迎える内、文三の十四という春、待まちに待た卒業も首尾よく済すだったのでヤレ嬉しやという間もなく、父親は不図感染した風邪ふうじゃから余病を引出

し、年比としごろの心労も手伝てドット床に就つく。菓餌やくじ、呪まじない、加持祈祷かじきとうと人の善いと言う程の事を為尽しつくして見たが、さて験げんも見えず、次第々々に頼み少なに成て、遂ついに文三の事を言い死じににはかなく成てしまう。生残た妻子の愁傷は実に比喩たとえを取るに言葉もなくばかり、「嗟矣ああいくら幾程歎なみだいても仕方がない」トいう口の下からツイ袖そでに置くは泪の露、漸ようやくの事で空しき骸からを菩提所へ送りて荼毘だび一片の烟と立上らせてしまう。さて掙人かせぎにんが没してから家計は一方ならぬ困難、菓礼やくれいと葬式そうしきの雑用ぞうようとに多もない貯叢たくわえをゲッソリ遣い減らして、今は残り少なになる。デモ母親は男勝りの氣丈者、貧苦にめげない煮焚にたきの業の片手間に一枚三厘の襯衣シャツを縫くけて、身を粉こにして掙かせ了せぐに追付く貧乏もないか、どうかこうか湯なり粥かゆなりを啜すすつて、公債の利の細い烟けぶりを立てている。文三は父親ぞんじの存生中ようちゆうより、家計の困難に心附かぬでは無いが、何と言

てもまだ幼少の事、何時いつまでもそれで居られるような心地がされて、親思いの心から、今に坊がああしてこうしてと、年齢としには増せた事を言い出しては両親に袂たもとを絞しぼらせた事は有あても、又また何処どこともなく他愛たわいのない所も有て、浪なみに漂うう浮艸うきぐさの、うかうかとして月日を重ねたが、父の死後便たよりのない母親の辛苦心労を見るに付け聞くに付け、小供心にも心細くもまた悲しく、始めて浮世の塩が身に浸しみて、夢の覚たような心地。これからは給事なりともして、母親の手足たそくにはならずとも責めて我口だけはおもう由よしをも母に告げて相談をしていると、捨る神あれば助たすくる神ありで、文三だけは東京に居る叔父の許もとへ引取られる事になり、泣なきの泪なみだで静岡を発足ほつそくして叔父を便たよつて出京したは明治十一年、文三が十五に成た春の事とか。

叔父は園田孫兵衛そのだまごべえと言いて、文三の亡父の為めには実弟に当

る男、慈悲深く、憐あわれッぽく、しかも律義りちぎ真当まことの氣質ゆえ人の望うけも宜よろいが、惜おしいかな些ちと氣が弱すぎる。維新後は両刀を矢立やたてに替えて、朝夕算盤そろばんを弾はじいては見たが、慣れぬ事とて初の内は損毛そんもうばかり、今日に明日あすにと喰込くいこんで、果は借金ふちの淵はに陥まり、どうしようこうしようと足掻あがき蹴もいでいる内、不図ふとした事から浮あみ上あて当今では些とは資本も出来、地面をも買あい小あ金をも貸付あけて、家を東京に持ちながら、その身は浜のさる茶店さてんの支配人しをしている事なれば、左而さのみ已富貴ふつきと言うでもないが、まず融通ゆとりのある活計くわし。留守を守る女房まごのお政は、お摩さすりからずるずるの後配のちぞい、歴れつきとした士族の娘と自分ではいうが……チト考え物。しかしとにかく如才ひとりのない、世辞のよい、地代から貸金の催促まで家事一切独ひとで切きつて廻る程あつて、万事に抜目のない婦人。疵瑕きずと言いつては唯大酒飲ただみで、浮氣で、しかも針を持つ事がキツイ嫌きら

いというばかり。さしたる事もないが、人事はよく言いたがら
 ぬが世の習い、「あの婦人おんなは裾張蛇すそづばりじやの変生へんしょうだろう」ト近辺の者は
 影人形を使うとか言う。夫婦の間に二人の子がある。姉をお勢せい
 と言ッて、その頃はまだ十二の蕾つぼみ、弟を勇いとと言ッて、これもまた
 袖で鼻汁はなふ拭く湾泊盛わんぱくざかり（これは当今は某校に入舎していて宅に
 は居らぬので）、トいう家内ゆえ、叔母一人の機きに入ればイザコ
 ザは無いが、さて文三には人の機嫌きげん氣き棲づまを取るなどという事は
 出来ぬ。唯心ばかりは主しゆうとも親とも思ッて善く事つかえるが、氣が
 利きかぬと言ッては睨ねめつ付けられる事何時も何時も、その度ごとに
 親の難有ありがたさが身に染しみ骨こたに耐えて、袖に露を置くことは有りな
 がら、常に自ら叱しかッてジツト辛抱、使歩つかいある行きをする暇いとまには近辺
 の私塾へ通学して、暫しばらく悲しい月日を送ッている。ト或る時、
 某学校で生徒の召募があると塾での評判取り取り、聞けば給費

だという。何も試しだと文三が試験を受けて見たところ、幸いにして及第する、入舎する、ソレ給費が貰える。昨日までは叔父の家とは言いながら食客の悲しさには、追使われたうえ気兼苦勞而已のみをしていたのが、今日は外ほかに掣肘ひかれする所もなく、心一杯に勉強の出来る身の上となつたから、や喜んだの喜ばないのと、それはそれは雀躍こおどりまでして喜んだが、しかし書生と言ッてもこれひとくがいもまた一苦界もと。固より余所外のおぼッチやま方とは違い、親から仕送りなどという洒落しやれはないから、無駄遣いむだづかとしては一銭もならず、また為しようとも思わずして、唯一心ただに、便たよりのない一人の母親の心を安めねばならぬ、世話になつた叔父へも報恩おんがえしをせねばならぬ、と思う心より、寸陰を惜んでの刻苦勉強に学業の進みも著るしく、何時の試験にも一番と言ッて二番とは下らぬ程ゆえ、得難い書生と教員も感心する。サアそうなるはたと傍やかが喧

ましい。放蕩ほうとうと懶惰らんだとを經緯たてぬきの糸にして織上おりあがつたおぼツちやま方が、不負魂まけじだましの妬み嫉ねたそねみからおむずかり遊ばすけれども、文三はそれ等の事には頓着とんじやくせず、独りネビツチヨ除のけ物と成ツて朝夕勉強げんさん三昧に歳月を消磨する内、遂に多年螢雪けいせつの功が現われて一片の卒業証書を懷いだき、再び叔父の家を東道あるじとするように成ツたからまず一安心と、それより手を替え品を替え種々さまざまにして仕官の口を探すが、さて探すとなると無いもので、心ならずも小半年ばかり燻くすぶツている。その間始終叔母にいぶされる辛らさ苦しさ、初は叔母も自分ながらけふそうな貌かおをして、やわやわ吹付けていたからまず宜よかツたが、次第にいぶし方に念が入ツて来て、果は生松葉なまつばに蕃椒とうがらしをくべるように成ツたから、そのけふいことこの上なし。文三も暫らくは鼻をも潰つぶしていたれ、竟ついには余りのけぶさに堪え兼て噎返むせかえる胸を押鎮おしずめかねた事也有ツたが、イ

ヤイヤこれも自分が不^ふ甲斐^{がい}ないからだ、思い返してジツト辛抱。そういうところゆえ、その後或人の周旋で某省の准判任^{じゅんぱんにん}御用係となつた時は天へも昇る心地がされて、ホツと一息吐^つきは吐いたが、始て出勤した時は異^{おつ}な感じがした。まず取調物を受取つて我坐になおり、さて落着て居廻りを視^み廻^{まわ}すと、仔細^{しさい}らしく頸^{くび}を傾^{かたぶ}けて書物^{かきもの}をするもの、蚤取眼^{のみとりまなこ}になつて校合^{きやうごう}をするもの、筆^{くわ}を啣^{いそがわ}えて忙し気に帳簿を繰るものと種々さまざま有る中に、ちようど文三の真向うに八字の浪を額に寄せ、忙^{いそがわ}しく眼をしばたたきながら間断^{たゆみ}もなく算盤を弾^{はじ}いていた年配五十前後の老人が、不図手を止めて珠へ指ざしをしながら、「エー六五七十の二……でもなしとエー六五」ト天下の安危この一挙に在りと言つた様な、さも心配そうな顔を振揚げて、その癖口をアンゴリ開いて、眼鏡^{めがね}越しにジツト文三の顔を見守^みめ、「ウー八十の二か」

ト一越調子高な声を振立ててまた一心不乱に弾き出す。余りの可笑しさに堪えかねて、文三は覚えずも微笑したが、考えて見れば笑う我と笑われる人と余り懸隔のない身の上。アア曾て身の油に根気の心を浸し、眠い眼を睡ずして得た学力を、こんなはかない馬鹿氣た事に使うのかと、思えば悲しく情なく、我になくホツト太息を吐いて、暫らくは唯茫然としてつまらぬ者でいたが、イヤイヤこれではならぬと心を取直して、その日より事務に取懸る。当座四五日は例の老人の顔を見る毎に嘆息而已していたが、それも向う境界に移る習いとかで、日を経る随に苦にもならなく成る。この月より国許の老母へは月々仕送をすれば母親も悦び、叔父へは月賦で借金済しをすれば叔母も機嫌を直す。その年の暮に一等進んで本官になり、昨年の暑中には久々にて帰省するなど、いろいろ喜ばしき事が重なれば、眉の

皺しわも自ら伸び、どうやら寿命も長くなつたように思われる。ここにチト艶なまめいた一条のお嘯はなしがあるが、これを記す前に、チヨツピリ孫兵衛の長女お勢の小伝を伺いましょう。

お勢おいたちの生立の有様、生来しょうらいこぼんのう子煩惱の孫兵衛を父に持ち、他人には薄情でも我子には眼の無いお政を母に持ツた事ゆえ、幼少の折より挿頭かざしの花、衣ぎぬの裏の玉と撫なで愛いまれ、何でもかでも言成いいなり次第にオイソレと仕付けられたのが癖と成ツて、首尾よくやんちや娘に成果なりおこせた。紐解ひもとの賀すんの済すんだ頃より、父親の望みで小学校へ通い、母親の好みで清元きよもとの稽古けいこ、生得うまれえて才澆さいはいの一徳には生覚なまおぼえながら飲込みも早く、学問、遊芸、両ながら出来のよいように思われるから、母親は眼も口も一ツにして大驢おおろび、尋ねぬ人にまで風聴ふうちようする娘自慢の手前味噌みそ、切しきりに涎よだれを垂たらしていた。その頃新あらたに隣家へ引移ひツて参まゐった官員は家内四人活計ぐわしで、細君

もあれば娘もある。隣ずからの寒暄かんけんの挨拶が喰付きで、親々が
 心安く成るにつれ娘同志も親しくなり、毎日のように訪といつ訪とわれ
 つした。隣家の娘というはお勢よりは二ツ三ツ年層としかさで、優しく
 温藉しとやかで、父親が儒者のなれの果だけ有ッて、小供ながらも学問
 が好すこそ物の上手で出来る。いけ年を仕つかまつてもとかく人真似まねは輟や
 められぬもの、況ましてや小供という中うちにもお勢は根生ねおいの軽躁者おいそれものな
 れば尚更なおさら、倏忽たちまちその娘に薰陶かぶれて、起居挙動たちいふるまいから物の言いざま
 までそれに似せ、急に三味線しゃみせんを擲却ほうりだして、唐机とうぎくえの上に孔雀くじやくの羽
 を押立いとる。お政は学問などという正坐かしこまツた事は虫が好かぬが、
 愛いとし娘の為したいと思ッて為する事と、そのままに打棄うちすてて置く内、
 お勢が小学校を卒業した頃、隣家の娘は芝辺のさる私塾へ入塾
 することに成なった。サアそう成るとお勢は矢も楯たても堪たまらず、急
 に入塾が仕したくなる。何でもかでもと親を責せがむ、寝言にまで

言ッて責がむ。トいつてまだ年端^{としは}も往かぬに、殊^{こと}にはなまよみの甲斐なき婦人^{おんな}の身でいながら、入塾などとは以^{もつて}の外、トサ一旦は親の威光で叱り付けては見たが、例の絶食に腹を空^{すか}せ、「入塾が出来ない位なら生ている甲斐がない」ト溜息^{ためいき}噛^かみまぜの愁訴^{しゆ}、萎^{しお}れ返ッて見せるに両親も我を折り、それ程までに思うならばと、万事を隣家の娘に托^{たく}して、覚束^{おぼつか}なくも入塾させたは今より二年前^{ぜん}の事で。

お勢の入塾した塾の塾頭をしてゐる婦人は、新聞の受売からグット思い上りをした女丈夫^{じょじょうぶ}、しかも氣を使ッて一飯の恩は酬^{むく}いぬがちでも、睚眦^{がいさい}の怨は必ず報ずるといふ蚰蜒魂^{げじげじたましい}で、氣に入らぬ者と見れば何かにつけて真綿に針のチクチク責をするが性分。親の前でこそ蛤貝^{はまぐり}と反身^{がいきそつくりかえ}れ、他人の前では蜷貝^{しじみがい}と縮まるお勢の事ゆえ、責^{さいな}まれるのが辛らさにこの女丈夫に取入ッて卑屈

を働らく。固より根がお茶ツぴいゆえ、その風には染り易いか、
たちまち忽の中に見違えるほど容子ようすが変り、何時しか隣家の娘とは疎々うとうと

しくなツた。その後英学を初めてからは、悪足掻わるあがきもまた一段で、

襦袢じゅばんがシャツになれば唐人髻とうじんわけも束髪に化け、ハンケチで咽喉のどを

締め、鬱陶うつとうしいを耐こらえて眼鏡を掛け、独ひとりよがりの人笑わせ、天晴あつぱれ

一個のキャツキヤとなり済ました。然るに去年の暮、例の女丈

夫は教師に雇われたとかで退塾してしまい、その手に属したお

茶ツぴい連も一人去り二人去して残少さうすくになるにつけ、お勢も

何となく我宿恋しく成ツたなれど、まさかそうとも言かい難ねた

か、漢学は荒方出来たと拵こしらえて、退塾して宿所へ帰ツたは今

年の春の暮、桜の花の散る頃の事だ。

既に記した如く、文三の出京した頃はお勢はまだ十二の蕾、幅

の狭せばい帯を締めて姉様あねさまを荷厄介やっかいにしていたなれど、こましやく

れた心から、「あの人はお前の御亭主さんに貰もらったのだヨ」ト坐
 興に言いった言葉の露まことを実くんと汲くだか、初はつの内うちははにかんでばかり
 いたが、小供なこの馴なむは早いもので、間もなく菓子ひとつ一ひとつを二ふたツに割わッ
 て喰くべる程むづ睦むつみ合あったも今は一昔。文三が某校へ入舎してから
 は相逢あいあう事ことすら稀まれなれば、況まじて一ひとつに居ゐた事は半日もなし。唯今
 年の冬期休暇にお勢が帰宅した時の而已のみ、十日ばかりも朝夕顔を
 見合あわしていたなれど、小供の時とは違い、年頃が年頃だけに
 文三もよろずに遠慮勝もてなでよそよそしく待遇もてなして、更に打解うちけて
 物など言いった事なし。その癖お勢が帰塾した当坐ひかず両三日は、百
 年の相識ふに別またれた如ごとく何なにとなく心淋さびしかったが……それも日数
 を経ふる随ままに忘わすれてしままったのに、今また思おもひ懸かけなく一ツ家に
 起臥おきふしして、折節なれなれは狎な々なしく物など言いかけられて見れば、嬉うれし
 くもないが一月げつが復またた来きたようなで、何なんにとなく賑にぎやかな心地がし

た。人一人殖えた事ゆえ、これはさもあるべき事ながら、唯怪しむ可きはお勢と席を同おなじゆうした時の文三の感情で、何時も可笑しく気が改まり、円めていた脊せを引伸して頸を据え、異おつう済して変に片付る。魂が裳もぬけ拔れば一心に主とする所なく、居廻りに在る程のもの悉く薄烟ことごとくすげぶりに包れて虚有縹緲きようひようびよううちの中に漂い、有るかと思えばあり、無いかと思おもえはない中に、唯一物あるものばかりは見ないでも見えるが、この感情は未まだ何とも名なづけ難い。夏の初より頼まれてお勢に英語を教授するように成つてから、文三も些すこしく打解け出して、折節は日本婦人の有様、束髪束髪の利害、さては男女交際の得失などを論ずるように成ると、不思議や今まで文三を男臭いとも思わず太平楽を並べ大風呂敷ひろを拡げていたお勢が、文三の前では何時からともなく口数を聞かなく成つて、何処いぢつともなく落着て、優によししく女性らしく成つたように見えた。或一日、

お勢の何時になく眼鏡を外して頸巾くびまきを取っているを怪んで文三が尋ねれば、「それでも貴君あなたが、健康な者には却かえつて害になると仰おつしやつたものヲ」トいう。文三は覚えずも莞然にっこり、「それは至極好いい事ことだ」ト言ッてまた莞然。

お勢の落着たに引替え、文三は何かそわそわし出して、出勤して事務を執りながらもお勢の事を思い続けに思い、退省の時刻を待詫まちわびる。帰宅したとてもお勢の顔を見ればよし、さも無ければ落脱がっかり力抜けがする。「彼女あれに何したのじゃアないのかしらぬ」ト或時我を疑うたぐッて、覚えずも顔を赧あからめた。

お勢の帰宅した初より、自分には気が付かぬでも文三の胸には虫わいが生た。なれどもその頃はまだ小さく場取ばらず、胸に在あつても邪魔に成らぬ而已のみか、そのムズムズと蠢動うごめく時は世界中が一所ひとところに集る如く、又この世から極楽浄土へ往生する如く、又春の

日に瓊葩綉葉の間、和氣香風の中に、臥榻を据えてその上に臥そべり、次第に遠り往く虻の声を聞きながら、眠るでもなく眠らぬでもなく、唯ウトウトとしているが如く、何ともかとも言様なく愉快ツたが、虫奴は何時の間にか太く逞しく成ツて、「何したのじゃアないか」ト疑ツた頃には、既に「添たいの蛇」という蛇に成ツて這廻ツていた……寧ろ難面くされたならば、食すべき「たのみ」の餌がないから、蛇奴も餓死に死んでしまひもしようが、愁に卯の花くだし五月雨のふるでもなくふらぬでもなく、生殺しにされるだけに蛇奴も苦しさに堪え難ねてか、のたうち廻ツて腸を嚙断る……初の快さに引替えて、文三も今は苦しくなツて来たから、窃かに叔母の顔色を伺ツて見れば、氣の所為か粹を通して見て見ぬ風をしているらしい。「若しそうなればもう叔母の許を受けたも同前……チョツ寧そ打附けに……」

ト思ツた事は屢々有ツたが、「イヤイヤ滅多な事を言出して取着かれぬ返答をされては」ト思ひ直してジツト意馬の絆を引緊め、藻に住む虫の我から苦んでいた……これからが肝腎要、回を改めて伺いましょう。

第三回 余程風変な恋の初峯入 下

今年の仲の夏、或一夜、文三が散歩より帰ツて見れば、叔母のお政は夕暮より所用あッて出たままだ帰宅せず、下女のお鍋も入湯にでも参ツたものか、これも留守、唯お勢の子舎に而已光明が射している。文三初は何心なく二階の梯子段を二段三段登ツたが、不図立止まり、何か切りに考えながら、一段降りてまた立止まり、また考えてまた降りる……俄かに氣を取直して、

將に再び二階へ登らんとする時、忽ちお勢の子舎の中に声がし

て、

「誰方」

トいう。

「わたくし
私」

ト返答をして文三は肩を縮める。

「オヤ誰方かと思ツたら文さん……淋しくツてならないから些
とお嘸しにいらッしやいな」

「エ多謝う、だかもう些と後にしましう」

「何か御用が有るの」

「イヤ何も用はないが……」

「それじゃア宜じゃア有りませんか、ネーいらッしやいヨ」

文三は些し躊躇て梯子段を降果てお勢の子舎の入口まで参り

は参ッたが、中へとは立入らず、唯鵠立たかづんでいる。

「お這入はいんなさいな」

「エ、エー……」

ト言ッたまま文三は尚お鵠立たかづんでモジモジしている、何か這入りたくもあり這入りたくもなしといった様な容子ようす。

「何故貴君なぜあなた、今夜に限ッてそう遠慮なさるの」

「デモ貴嬢あなたお一人ツきりじゃア……なんだか……」

「オヤマア貴君にも似合わない……アノ何時いつか、気が弱くツちやア主義の実行は到底覚束ないと仰おつしやツたのは何人どなただツけ」

ト榛しんの首を斜ななめに傾かしげて嫣然片頬えんぜんかたほに含んだお勢の微笑に釣つられて、文三は部屋へ這入り込み坐に着きながら、

「そう言われちやア一言もないが、しかし……」

「些とお遣いなさいまし」

トお勢は団扇^{うちわ}を取出^{とりだ}して文三に勧め、

「しかしどうしましたと」

「エ、ナニサ影口がどうも五月蠅^{うるさく}ッて」

「それはネ、どうせ些^ちとは何とか言いますのサ。また何とか言ッたッて宜^{よろ}じゃア有りませんか、若^もしお相互^{たがい}に潔白なら。どうせ貴君、二千年来の習慣を破るんですものヲ、多少の艱苦^{かんく}は免^{のが}れッこは有りませんワ」

「トハ思ッているようなものの、まさか影口が耳に入ると厭^{いや}なものサ」

「それはそうですヨネー。この間もネ貴君、鍋が生意氣に可笑^{おか}しな事を言ッて私にからかうのですよ。それからネ私が余^{あま}り五月蠅^{うるさく}なッたから、到底解るまいとはおもいましたけれども試^{こころみ}に男女交際論を説て見たのですヨ。そうしたらネ、アノなんですッ

て、私の言葉には漢語が雑まざるから全然何を言ッたのだから解りませんで……真個ほんとに教育のないという者は仕様のないもんですネー」

「アハハハ其奴そいつは大笑いだ……しかし可笑しく思ッているのは鍋ばかりじゃア有りますまい、必きつと母親おつかさんも……」

「母ですか、母はどうせ下等の人物ですから始終可笑しな事を言ッちゃアからかいますのサ。それでもネ、そのたんびに私が辱はずかしめ辱しめ為しい為ししたら、あれでも些ちとは耻はじたと見えてネ、この頃じゃアそんなに言わなくなりましたよ」

「へーからかう、どんな事を仰しやッて」

「アノーなんですッて、そんなに親しくする位なら寧ろ貴君と……（すこしもじもじして言かねて）結婚してしまえッて……」

ト聞くと等しく文三は駭然ぎよつとしてお勢の顔を目守みつめる。されど

此方は平氣の躰ていで

「ですがネ、教育のない者ばかりを責める訳にもいきませんヨネー。私の朋友ほうゆうなんぞは、教育の有ると言う程有りやアしませんがネ、それでもマア普通の教育は享うけているんですよ、それでいて貴君、西洋主義の解るものは、二十五人の内に僅たつた四人しかないの。その四人よつたりもネ、塾にいるうちだけで、外ほかへ出てからはネ、口程にもなく両親に压制せられて、みんなお嫁に往いったりお婿むこを取ったりしてしまいましたの。だから今までこんな事を言ッてるものは私ばかりだとおもうと、何だか心細こころぼそくッて心細ッてなりません。でしたがネ、この頃は貴君という親友が出来たから、アノー大變氣丈夫になりましたわ」

文三はチョイと一礼して

「お世辞にもしろ嬉うれしい」

「アうお世辞じゃア有りませんよ、ほんとう眞実ですよ」

「眞実なら尚お嬉しいが、しかし私にやア貴嬢あなたと親友の交際は到底出来ない」

「オヤ何故ですエ、何故親友の交際が出来ませんエ」

「何故といえ、私には貴嬢が解からず、また貴嬢には私が解からないから、どうも親友の交際は……」

「そうですか、それでも私には貴君はよく解っている積りですよ。貴君の学識が有つて、品行が方正で、親に孝行で……」

「だから貴嬢には私が解らないというのです。貴嬢は私を親に孝行だと仰しやるけれども、孝行じゃア有りません。私には……親より……大切な者があります……」

ト吃どもりながら言つて文三は差俯さしうつむ向いてしまふ。お勢は不思議そうに文三の容子を眺ながめながら

「親より大切な者……親より……大切な……者……親より大切な者は私にも有りますワ」

文三はうな垂れた頸くびを振揚げて

「エ、貴嬢にも有りますと」

「ハア有りますワ」

「誰……誰だれが」

「人じゃアないの、アノ真理」

「真理」

ト文三は慄然ふるふると胴震どうぶるいをして唇くちびるを喰いしめたまま暫しばらく無言だんまり、
稍ややあッて俄にわかに喟然きぜんとして歎息して、

「アア、貴嬢は清浄なものだ潔白なものだ……親より大切なものは真理……アア潔白なものだ……しかし感情という者は実に妙なものだナ、人を愚ぐにしたり、人を泣かせたり笑わせたり、人

をあえだり揉^もんだりして玩弄^{がんろう}する。玩弄されると薄々気が附きながらそれを制することが出来ない。アア自分ながら……」

ト些^{すこ}し考えて、稍^やありて熱氣^{やつき}となり、

「ダガ思い切れない……どう有ッても思い切れない……お勢さん、貴嬢は御自分が潔白だからこんな事を言ッてもお解りがないかも知れんが、私には真理よりか……真理よりか大切な者があります。去年の暮から全半歳^{まるはんとし}、その者の為^ために感情を支配せられて、寐^ねても寤^さめても忘らればこそ、死ぬより辛^{つら}いおもいをしていても、先では毫^{すこ}しも汲んでくれない。寧ろ強顔^{つれ}なくされたならば、また思い切りようも有ろうけれども……」

ト些し声をかすませて、

「なまじい力におもうの親友だのといわれて見れば私は……どうも……どう有ッても思い……」

「アラ月が……まるで竹の中から出るようですよ、ちよつと御覧なさいヨ」

庭の一隅に栽込んだ十竿ばかりの織竹の、葉を分けて出る月の
すずしさ。月夜見の神の力の測りなくて、断雲一片の翳だも
ない、蒼空一面にてりわたる清光素色、唯亭々皎々として雫く
も滴たるばかり。初は隣家の隔ての竹垣に遮られて庭を半より
はいはじ、這初め、中頃は縁側へ上ツて座舗へ這込み、稗蒔の水に流れて
は金激灑、簷馬の玻璃に透りては玉玲瓏、座賞の人に影を添え
て孤燈一穗の光を奪い、終に間の壁へ這上る。涼風一陣吹到る
毎に、ませ籬によろばい懸る夕顔の影法師が婆娑として舞い出
し、さてわ百合の葉末にすぎる露の珠が、忽ち螢と成ツて飛迷
う。艸花立樹の風に揉まれる音の颯々とするにつれて、しばし
は人の心も騒ぎ立つとも、須臾にして風が吹罷めば、また四辺

蕭然^{ひっそ}となつて、軒^{したぐさ}の下艸^{すだ}に集く虫の音^ねのみ独り高く聞える。眼に見る景色はあわれに面白い。とはいえ心に物ある兩人^{ふたり}の者の眼には止まらず、唯お勢が口ばかりで

「アア佳^{いい}こと」

トいつて何故^{なにゆえ}ともなく莞然^{にっこり}と笑い、仰向^{みと}いて月に観惚^{ふり}れる風をする。その半面^{よこがお}を文三^{めす}が窃^{ぬす}むが如く眺め遣^やれば、眼鼻口の美しさは常に異^{かわ}つたこともないが、月の光を受けて些^ちし蒼味^おを帯^おんだ瓜実^{うりざね}顔^{がお}にほつれ掛^かつたいたずら髪、二筋三筋扇頭^{せんとう}の微風^{そよ}に戦^{そよ}いで頬^ほの辺^{あたり}を往来するところは、慄然^{ぞつ}とするほど凄味^{すげみ}が有る。暫らく文三^{ぶんさん}がシケジケと眺^ねめているト、やがて凄味のある半面^{よこがお}が次第^{しだい}々々に此方^{こちら}へ捻^{ねじ}れて……パツチリとした涼しい眼がジロリと動き出して……見とれていた眼とピツタリ出逢^{であ}う。螺^{なutilus}の壺^{つぼ}々^{つぼぐち}口に莞然^{にっこ}と含^こんだ微笑^{みえう}を、細根大根に白魚^{しらうお}を五本並べたような手

が持っていた団扇で隠蔽かくして、耻はずかしそうなしこなし。文三の眼は俄に光り出す。

「お勢さん」

ただ ふるいぐえ
但し震声で。

「ハイ」

但し小声で。

「お勢さん、貴嬢あなたもあんまりだ、余りあんま……残酷だ、私がこれ……

これ程までに……」

トいいさして文三は顔に手を宛あてて黙こころッてしまふ。意とどを注め

て能よく見れば、壁に写うつつた影法師が、慄然ふるふるとばかり震ふるえている。

今一言ひとこと……今一言の言葉の関を、蹶こえれば先は妹背山いもせやま、蘆垣あしがきの

間ま近ひかき人を恋こい初はじめてより、昼は終日ひねもす夜は終夜よもすがら、唯その人の面影おもかげ

而のみ已め常に眼前めさきにちらついて、砧きぬたに映る軒の月の、払はらッてもまた

去りかねていながら、人の心を測りかねて、末摘花の色にも出さず、岩堰水の音にも立てず、独りクヨクヨ物をおもう、胸のうやもや、もだくだを、払うも払わぬも今一言の言葉の綾……今一言……僅一言……その一言をまだ言わぬ……折柄ガラガラと表の格子戸の開く音がする……吃驚して文三はお勢と顔を見合わせる、蹶然と起上る、転げるように部屋を駆出る。但しその晩はこれきりの事で別段にお話しなし。

翌朝に至りて兩人の者は始めて顔を合わせる。文三はお勢よりは氣まりを悪がッて口数をきかず、この夏の事務の鞅掌さ、暑中休暇も取れぬので匆々に出勤する。十二時頃に帰宅する。下坐舗で昼食を済して二階の居間へ戻り、「アア熱かつた」ト風を納れている所へ梯子バタバタでお勢が上ッて参り、二ツ三ツ英語の不審を質問する。質問してしまえばもはや用の無い筈だ

が、何かモジモジして交野かたのの鶉うずらを極めてゐる。やがて差俯向いたままで鉛筆を玩弄おもちゃにしながら

「アノー昨夕ゆうべは貴君どうなすつたの」

返答なし。

「何だか私が残酷だッて大變憤おこッていらしつたが、何が残酷ですの」

ト笑顔えがおを擡もたげて文三の顔を窺のぞくと、文三は狼狽あわてて彼方あちらを向いてしまひ

「大抵察していながらそんな事を」

「アラそれでも私にや何だか解りませんものヲ」

「解らなければ解らないでよう御座んす」

「オヤ可笑しな」

それから後は文三と差向いになる毎に、お勢は例の事を種に

して乙^{おつ}うからんだ水向け文句、やいのやいのと責め立てて、終^{つい}に
 は「仰^{おほ}しやらぬとくすぐりますヨ」とまで迫^せッたが、石地藏と生
 れ付たしようがには、情談のどさくさ紛^まれにチョツクリチョイ
 といつて除^のける事の出来ない文三、然^{しか}らばという口付からまず
 重くろしく折目正しく居すまッて、しかつべらしく思いのたけ
 を言い出だそうとすれば、お勢はツイと彼方^{あちら}を向いて「アラ鳶^{とんび}
 が飛でますヨ」と知らぬ顔の半兵衛模^も擬^ぎ、さればといつて手を
 引けば、また意^いあり気な色目遣^{しやう}い、トこうじらされて文三は些^ち
 とウロが来たが、ともかくも触らば散ろうという下心^{おのずか}の自ら素
 振りに現^{あら}われるに「ハハア」と気が附て見れば嬉^{ありがた}しく難^{かたじ}有^{へそ}く辱
 けなく、罪^{むくい}も報^{むくい}も忘れ果てて命もトントいらぬ顔付。臍^{へそ}の下を
 住家として魂が何時の間にか有頂天外へ宿替をすれば、静かに
 は坐ッてもいられず、ウロウロ座舗を徘徊^{まじつ}いて、舌を吐たり肩

を縮めたり思い出し笑いをしたり、又は変ぼうらいな手附きを
 為たりなど、よろずに瘋癲じみるまで喜びは喜んだが、しかし
 お勢の前ではいつも四角四面に喰いしばつて猥褻がましい挙動
 はしない。尤も曾てじゃらくらが高じてどやぐやと成つた時、
 今まで嬉しそうに笑つていた文三が俄かに両眼を閉じて静まり
 返えり何と言つても口をきかぬので、お勢が笑らいながら「そ
 んなに真面目にお成なさるところ成るからいい」とくすぐりに
 懸つたその手頭を払らい除けて文三が熱氣となり、「アア我々の
 感情はまだ習慣の奴隷だ。お勢さん下へ降りて下さい」といつ
 た為めにお勢に憤られたこともあつたが……しかしお勢も日を
 経るままに草臥れたか、余りじゃらくらしなくなつて、高笑
 らいを罷めて静かになつて、この頃では折々物思ひをするよう
 には成つたが、文三に向つてはともすればぞんざいな言葉遣い

をするとところを見れば、泣寐入りに寐入ったのでもない光景^{ようす}。

アア偶々^{たまたま}咲懸^{つばみ}ツた恋の蕾^{つばみ}も、事情というおもわぬ^{いて}沍^かにかじけ

て、可笑しく葛藤^{もつ}れた縁^{えにし}の糸のすじりもじつた間柄、海へも附

かず河へも附かぬ中ぶらりん、月下翁^{むすぶのかみ}の悪戯^{たわむれ}か、それにしても

余程風変りな恋の初峯入り。

文三の某省へ奉職したは昨日^{きのう}今日のように思う間に既に二年

近くになる。年頃節儉の功が現われてこの頃では些^{すこ}しは貯金^{たくわえ}も

出来た事ゆえ、老耄^{としよ}ツたお袋に何時までも一人住^{ひとりずみ}の不自由をさ

せて置くも不孝の沙汰^{さた}、今年の暮には東京^{こつち}へ迎えて一家を成し

て、そうして……と思う^{むね}旨^{しら}を半分報知せてやれば母親は大悦び^{おおよろこ}、

文三にはお勢という心宛^{こころあて}が出来たことは知らぬが仏のような慈

悲心から、「早く相応な者を宛^{あて}がつて初孫^{ういまいご}の顔を見たいとおも

うは親の私としてもこうなれど、其地^{そつち}へ往^{なす}ツて一軒の家を成よ

うになれば家の大黒柱とて無くて叶わぬは妻、到底貫う事なら
 親類某なにがしの次女お何なにどのは内端うちばで温順おとなしく器量も十人并なみで私には
 至極機きに入ッたが、この娘こを迎えて妻さいとしては」と写真まで添
 えての相談に、文三はハット当惑の眉まゆを顰ひそめて、物の序ついでに云々
 と叔母のお政に話せばこれもまた当惑の躰てい。初めお勢が退塾し
 て家に帰ッた頃「勇いさみという嗣子あととりがあッて見ればお勢は到底嫁に
 遣らなければならぬが、どうだ文三に配偶めあわせては」と孫兵衛に
 相談をかけられた事も有ッたが、その頃はお政も左様さようさネと生
 返事、何方どっち附かずに綾あやなして月日を送る内、お勢の甚はなはだ文三に
 親しむを見てお政も遂ついにその氣になり、当今では孫兵衛が「あ
 あ仲が好よいのは仕合わせなようなものの、両方とも若い者同志だ
 からそうでもない心得違いが有ッてはならぬから、お前が始終
 看張みはッていなくッてはなりませぬぜ」といつても、お政は「ナ

アニ大丈夫ですよ、また些ちつとやそツとの事なら有ツたツて好う
 御座んさアネ、到底どうせ早かれ晩おそかれ一所にしようと思ツてるとこ
 ですものヲ」ト、ズツト粹すいを通し顔でいるところゆえ、今文三
 の説話はなしを聴きいて当惑をしたもその筈の事で。「お袋の申通り家うちを有
 つようになれば到底とうてい妻を貰わずに置けますまいが、しかし氣心
 も解らぬ者を無暗むやみに貰うのは余りドツトしませぬから、この縁
 談はまず辞ことわツてやろうかと思ひます」ト常に異かわツた文三の決心
 を聞いてお政は漸ようやく眉を開いて切しきりに点頭うなずき、「そうともネそう
 ともネ、幾程いくら母親おつかさんの機に入もとッたからッて肝腎のお前さんの
 機に入らなきやア不熟の基だ。しかしよくお話しだッた。実は
 ネお前さんのお嫁の事に就ついちやア些ちイと良人うちでも考えてる事がある
 んだから、これから先き母親さんがどんな事を言ッておよ
 こしでも、チヨイと私に耳打してから返事を出すようにしてお

くんないヨ。いずれ良人^{うち}でお話し申すだろうが、些イと考
 てる事があるんだから……それはそうと母親さんの貰いたいと
 お言いのほどんなお子だか、チヨイとその写真をお見せナ」と
 いわれて文三はさもきまりの悪るそうに、「エ写真ですか、写真
 は……私の所には有りません、先刻^{さつき}アノ何が……お勢さんが何
 です……持つて往ッておしまいなすつた……」

トいう光景^{ありさま}で、母親も叔父夫婦の者も宛^{あて}とする所は思い思い
 ながら一様に今年の晩^くれるを待託^{まちわ}びている矢端^{やさぎ}、誰れの望みも
 彼れの望みも一ツにからげて背負ッて立つ文三が（話を第一回に
 戻して）今日思懸けなくも……諭旨免職^{むかしかたぎ}となつた。さても星煞^{まわりあわせ}
 というものは是非のないもの、トサ昔氣質^{むかしかたぎ}の人ならば言うところ
 でも有ろうか。

第四回　言うに言われぬ胸の中うち

さてその日も漸ようやく暮れるに間もない五時頃に成つても、叔母もお勢も更に帰宅する光景ようすも見えず、何時いつまで待つても果てしない事ゆえ、文三は独り夜食を済まして、二階の縁端えんぎに端居はししながら、身を丁字欄干ていじに寄せかけて暮行く空を眺ながめている。この時日は既に万家の棟むねに没しても、尚なお余残なごりの影を留とどめて、西の半天を薄紅梅そめに染そめた。顧みて東方とうほうの半天を眺むれば、淡々とあがつた水色ながめつめ、諦視よいぼしたら宵星の一つ二つは鑿ほじり出せそうな空そら合あい。かす幽かに聞える伝通院でんずういんの暮鐘ぼしようの音ねに誘われて、塙ねがらへ急ぐ夕鴉ゆうがらすの聲こゑが、彼処あちこち此処こゝに聞えて喧やかましい。既にして日はパツタリ暮れる、四辺あたりはほの暗くなる。仰向あおむいて瞻みる蒼空あおぞらには、余残なごりの色も何時いつしか消え失うせて、今は一面の青海原、星さえ所斑ところまだらに燦きらめき出いでて殆とん

と交睫まばたきをするような真似まねをしている。今しがたまで見えた隣家せんざいの前栽せんざいも、蒼然そうぜんたる夜色やせきに偷ぬすまれて、そよ吹く小夜嵐さよあらしに立樹たつきの所在ありかを知るほどの闇くらさ。デモ土蔵の白壁はさすがに白しろいだけに、見透みかせば見透みかされる……サツと軒端のきば近くに羽音がする、回首ふりかえッて観る……何も眼まなこに遮さへぎるものとはなく、唯ただもう薄闇うすぐらい而已のみ。

心ない身も秋の夕暮には哀あわれを知るが習い、況まして文三は糸目の切れた奴やつ風かぜの身の上、その時々ときどきの風次第おちつくさきで落着先は籬まがきの梅か物干さおの竿さおか、見極まめの附つきかぬところが浮世いきじにとは言いながら、父親が没ましてから全十年まる、生死いきじにの海のうやつらやの高波に揺ゆられ揺ゆられて辛かろうじて泳出した官海およぎいだもやはり波風の静まる間がないことゆえ、どうせ一度は捨小舟すておぶねの寄辺すておぶねない身に成ろうも知れぬと兼て覚悟そこをして見ても、其処そこが凡夫ぼんぶのかなしきで、危あやうきに慣なれて見れば苦にもならず宛あてに成らぬ事を宛あてにして、文三は今歳の暮

にはお袋を引取ツて、チト老楽おいらくをさせずばなるまい、国へ帰え
ると言ツてもまさかに素手でも往いかれまい、親類の所への土産
は何にしよう、「ムキ」にしようか品物にしようかと、胸で弾はじい
た算盤そろばんの桁けたは合いながらも、とかく合いかねるは人の身のつば
め、今まで見ていた廬生ろせいの夢も一炊すいの間に覚め果てて「アアま
た情ない身の上になツたかナア……」

俄にわかにパツと西の方かたが明るくなツた。見懸けた夢をそのままに、

文三が振返ツて視遣みやる向うは隣家の二階、戸を繰り忘れたもの
か、まだ障子のままで人影が射さしている……スルトその人影が
見る間にムクムクと膨れ出して、好加減よいかげんの怪物となる……パツ
と消失せてしまツた跡はまた常闇とこやみ。文三はホツと吐息つひを吐て、
顧みて我家わがいえの中庭を瞰みお下ろせば、所狭きまで植駢うえならべた艸花立樹くさばなたちぎ
なぞが、詫わびし氣に啼なく虫の音を包んで、黯黒くらやみの中からヌツと半

身を提出ぬきだして、硝子張ガラスばりの障子を漏れる火影ほかげを受けているところは、家内やうちを覗うかがう曲者かと怪まれる……ザワザワと庭の樹立こたちを揉もむ夜風の余りに顔を吹かれて、文三は慄然ふるふると身震をして起揚たちあがり、居間へ這入はいッて手探りで洋燈ランプを点とぼし、立膝たてひざの上に両手を重ねて、何をともなく目守みつめたまま暫しばらくは唯茫然……不図手近かに在まじッた菓罐やかんの白湯さゆを茶碗ちやわんに汲取くみとりて、一息にグツと飲乾し、肘ひじを枕まくらに横に倒れて、天井に円く映る洋燈ランプの火燈を目守めながら、莞爾にっこと片頬かたほに微笑えみを含んだが、開あいた口が結ばつて前歯が姿を隠すに連れ、何処いずくからともなくまた愁うれいの色が顔に顕あらわれて参まッた。

「それはそうとどうしようかしらん、到底言わずには置けん事ことだから、今夜にも帰かへッたら、断念おもいきッて言いッてしまおうかしらん。さぞ叔母が厭いやな面かおをする事ことたろうナア……眼に見えるようだ……しかしそんな事を苦にしていた分には埒らちが明かない、何

にもこれが金銭を借りようというではなし、毫すこしも耻はずかしい事はない、チョツ今夜言ッてしまおう……だが……お勢がいては言い難にくいナ。若しヒヨツト彼あれの前で厭味なんぞを言われちゃア困る。これは何んでも居ない時を見て言う事ことた。いない……時を……見……何故なぜ、何故言難い、苟いやしくも男児たる者が零落したのを耻ずるとは何んだ、そんな小胆な、糞くそッ今夜言ッてしまおう。それは勿論もちろん彼娘あれだッて口へ出してこそ言わないが何んでも来年の春を楽しみにしているらしいから、今唐突だしぬけに免職になつたと聞いたら定めて落胆するだろう。しかし落胆したからと言ッて心変りをするようなそんな浮薄おんなな婦人じゃアなし、かつ通常の婦女子と違ッて教育も有ることだから、大丈夫そんな氣遣いはない。それは決けしてないが、叔母だて……ハテナ叔母だて。叔母はああいう人だから、我おれが免職になつたと聞たら急にお勢をく

れるのが厭になつて、無理に彼娘あを他たへかたづけまいとも言われ
ない。そうなたからと言つて此方こつちは何も確かたい約束がして有
るんでないから、否いやそうは成りませんとも言われない……嗚呼ああ
つまらんつまらん、幾程いくちおもしろくてもつまらん。全躰ぜんたい何故我われ
を免職にしたんだろう、解らんナ、自惚うぬぼじゃアないが我われだつて
何も役に立たないという方でもなし、また残された者だつて何
も別段役に立つという方でもなし、して見ればやつぱり課長に
おベツからなかったからそれで免職にされたのかな……実に課
長は失敬な奴だ、課長も課長だが残された奴等もまた卑屈極ま
る。僅わずかの月給の為に腰を折つて、奴隷どれい同様な真似をするな
んぞつて実に卑屈極まる……しかし……待よ……しかし今まで
免官に成つて程なく復職した者がなくても無いから、ヒョツとし
て明日あしたにも召喚状が……イヤ……来ない、召喚状なんぞが来て

耐^{たま}るものか、よし来たからと言ッて今^{こん}度は此方^{こつち}から辞してしま
 う、誰が何と言おうト関^{かま}わ^なない、断然辞してしま^う。しかしそれ
 も短気かナ、やつぱり召喚状が来たら復職^めするかナ……馬鹿奴^め、
 それだから我^{われ}は馬鹿だ、そんな架空な事を宛にして心配すると
 は何んだ馬鹿奴。それよりかまず差当りエート何んだッけ……
 そうそう免職の事を叔母に咄^{はな}して……さぞ厭な顔をするこッた
 ろうナ……しかし咄さずにも置かれ^なないから思切ッて今夜にも
 叔母に咄して……ダガお勢のいる前では……チョッいる前でも
 関^{かま}わ^なん、叔母に咄して……ダガ若^あし彼娘^{あれ}のいる前で口汚^{はな}たなく
 でも言われたら……チョッ関わ^なん、お勢に咄して、イヤ……お
 勢じゃない叔母に咄して……さぞ……厭な顔……厭な顔を咄し
 て……口……口汚^{はな}なく咄……して……アア頭^{かしら}が乱れた……」
 ト、ブルブルと頭^{かしら}を左右へ打振る。

轟然ごうぜんと駆て来た車の音が、家の前でパツタリ止まる。ガラガラと格子戸こうしどが開くあ、ガヤガヤと人声がする。ソリヤコソと文三が、まず起直とむねッて突胸をついた。両手を杖つえに起たたとしてはまた坐り、坐らんとしてはまた起たつ。腰の蝶番ちようつがいは満足でも、胸の蝶番が「言ッてしまおうか」「言難いナ」と離れ離れに成ッているから、急には起揚たちあがられぬ……俄に蹶然むつくと起揚ッて梯子段はしごだんの下口おりぐちまで参ッたが、不図立止まり、些すこし躊躇ためらッていて、「チヨツ言ッてしまおう」と独言ひとりごとを言いながら、急足あしばやに二階を降りて奥坐舗おくざしきへ立入る。

奥坐舗の長手の火鉢ひばちの傍かたわらに年配四十恰好がつこうの年増としま、些やせぎすし瘦肉で色が浅黒はだいが、小股こまたの切上きりあがッた、垢拔あかぬけのした、何処どこともでんぼう肌はだの、萎すがれてもまだ見所のある花。櫛くし巻まきとかいうものに髪を取上げて、小弁慶こべんけいの糸織あわせの袷衣あわせと養老の浴衣ゆかたとを重ねた奴を素肌すかに

着て、黒^{くろ}繻^{じゆす}子と八段の腹合わせの帯をヒツカケに結び、微^{ほろ}醉^{えい}機^き嫌^{げん}の唧^{くわえ}楊^{よう}枝^じでいびつに坐ッていたのはお政で。文三の挨^{あい}拶^{さつ}するを見て、

「ハイ只^{ただいま}今、大層遅^{おそ}かッたらうネ」

「全体^{こんち}今日^{どちら}は何方へ」

「今日はネ、須^{すがち}賀^{よう}町から三筋町へ廻^{みすじ}わろうと思ッて家^{うち}を出たん

だアネ。そうするとネ、須^{すがち}賀^{よう}町へ往ッたらツイ近所に、あれはエート芸人……なんとか言ッたッけ、芸人……」

「親睦^{しんぼく}会」

「それぞれその親睦^{しん}会^{とみぎ}が有るから一所に往こうッてネお浜さんが勧^{かん}めきるんサ。私は新^{しん}富^{とみ}座^ざか二丁目ならともかくも、そんな珍^{ちん}木^{ぼく}会^{かい}とか親睦^{しん}会^{とみぎ}とかいう者^{もの}なんざア七^{しち}里^り々^り々^りけ^りばいだけれども、お勢^せ……ウーイプ……お勢^{せい}が往^いたいとい^いうも^もんだから仕^し様^{よう}事^{こと}

なしのお交際つきやいで往いって見たがネ、思おもつたよりはサ。私はまた親睦しんもく会かいというから大方演じゆつ会かいのような種たちのもんかしらとおもつたら、なアにやつぱり品しんの好よい寄席よせだネ。此度こんだ文さんも往いつて御覽ごらんな、木戸は五十銭だヨ」

「ハアそうですか、それでは孰いずれまた」

説話はなしが些ちし断絶とぎれる。文三は肚はらの裏うちに「おなじ言うのならお勢さだの居いない時ときだ、チヨツ今言いまつてしまおう」ト思おもい決さだめて今将いまに口くちを開ひらかんとする……折おしも縁側えんがわにパタパタと蹠音あしおとがして、スラリと背後うしろの障子しやうしが開あく、振反ふりかえつて見れば……お勢さだで。年は鬼もという十八の娘盛もり、瓜実うりざね顔がほで富士額ふじがき、生死いきしにを含む眼元めもとの塩しほにピンとはねた眉まゆで力味りきみを付け、壺つぼ々つぼぐち口の緊笑しめわらいにも愛嬌あいぎようをくくんで無暗むやみには滴こぼさぬほどのさび、背せいはスラリとして風に揺ゆめく女郎花おみなえしの、一時ひとときをくねる細腰こしもしんなりとしてなよやか、慾

にはもうすこし生際はえぎわと襟足えりあしとを善くして貰もらいたいが、何なにして
 も七難を隠くすという雪白の羽二重肌、浅黒い親には似ぬ鬼子おにつこ
 でない天人娘。艶つややかな黒髪を惜気もなくグツと引詰ひつつめての束
 髪、薔薇ばらの花挿頭はなかんざしを挿さしたばかりで臙脂べにも嘗なめねば鉛華おしろいも施つけ
 ず、衣服みなりとても糸織あわせの袷衣あわせに友禅と紫繻子の腹合せの帯か何か
 でさして取繕わざいもせぬが、故意わざとならぬ眺ながめはまた格別なもので、
 火をくれて枝を撓たわめた作花つくりばなの厭味いやみのある色の及ぶところでな
 い。衣透そとおり姫ひめに小町こまちの衣ころもを懸けたという文三みたての品題みたまは、それは惚ほ
 れた慾眼ひいきざたの鼻負沙汰ひいきざたかも知れないが、とにかくにも十人並優
 れて美くしい。坐舖すりあしへ這入りざまに文三と顔を見合あわして莞然にっこり、
 チョイと会釈すりあしをして摺足すりあしでズーと火鉢そばの側そばまで参り、温藉しとやかに坐
 に着く。

お勢と顔を見合あわせると文三は不思議にもガラリ氣が変かつて、

咽元^{のどもと}まで込み上げた免職の二字を鵜^う呑^のみにして何喰^くわぬ顔色^{がんしよく}、
 肚^{うち}の裏^{うら}で「もうすこし経^たッてから」

「母親^{おつか}さん、咽^{かわ}が涸^{かわ}いていけないから、お茶を一杯入れて下さ

いな」

「アイヨ」

トいつてお政^{ちやだんす}は茶筴^{のぞ}筒^{のぞ}を覗^{のぞ}き、

「オヤオヤ茶碗^{みんな}が皆汚^{みな}れてる……鍋^{なべ}」

ト呼^よばれて出て来た者を見れば例の日の丸の紋を染抜いた首
 の持主^{そらうそふ}で、空嘯^{さき}いた鼻^{はな}の端^{はな}へ突出^{とつ}された汚穢^{よごれもの}物を受取^{うけ}り、振栄^{ふりばえ}

のあるお尻^{いし}を振立^{ひき}てて却退^{ひきさか}る。やがて洗^ひッて持^もッて来る、茶を

入れる、サアそれから今日聞^きいて来た歌曲^{うた}の樽^わで、母子^{おやこふたつ}二^{ふた}の

口^{くち}が結^{むす}ばる暇^{ひま}なし。免職^{めんしき}の事を吹聴^{ふいちよう}したくも言出^いす潮^{しほ}がないの

で、文三^{ぶんぞう}は余儀^{あやま}なく聴^ききたくもない咄^{はなし}を聞^きて空^{むな}しく時刻^{じこく}を移^{うつ}す

内、説話^{はなし}は漸^{きよ}くに清元長唄の優劣論に移る。

「母親さんは自分が清元が出来るもんだからそんな事をお言いだけれども、長唄の方が好^いサ」

「長唄も岡安^{おかやす}ならまんざらでもないけれども、松永は唯つこむばかりで面白くもなんとも有りやアしない。それよりか清元の事サ、どうも意気^いでいいワ。『四谷^{よつや}で始めて逢^おうた時、すいたらしいと思うたが、因果な縁の糸車』」

ト中音で口癖の清元を唄^{うた}ッてケロリとして

「いいワ」

「その通り品格がないから嫌^{きら}い」

「また始^じまった、ヘン跳馬^{じゃやうま}じゃアあるまいし、万古に品々^{しんしん}も五月蠅^{うるさ}い」

「だッて人間は品格が第一ですワ」

「ヘンそんなにお人柄しとがらなら、煮込みのおでんなんぞを喰たべたいといわないがいい」

「オヤ何時私がそんな事を言いました」

「ハイ一昨日おとついの晚いしました」

「嘘うそばつかし」

トハ言ツたが大おおきにへこんだので大笑いとなる。不図お政は文三の方を振向いて

「アノ今日出懸けに母親さんの所ところから郵便が着たツけが、お落掌うけとりか」

「ア真ほんにそうでしたツけ、さつぱり忘却わすれていました……エー母からもこの度は別段に手紙を差上げませんが宜よろしく申上げると申ことで」

「ハアそうですか、それは。それでも母親さんは何時いつもお異かわな

すつたことも無くツて」

「ハイ、お蔭かげさまと丈夫だそうで」

「それはマア何よりの事ことだ。さぞ今年の暮を楽しみにしておよこしなすつたろうネ」

「ハイ、指ばかり屈おつていると申てよこしましたが……」

「そうだろうてネ、可愛かわいい息子さんの側へ来るんだものヲ。それをネー何処どこかの人ひとみたように親を馬鹿にしてサ、一口ひとくちいう二口目には直じきに揚足を取るようだと義理にも可愛かわいいと言われないけれど、文さんは親思いだから母親さんの恋しいのもまた一倍サ」

トお勢しりめを尻目しかめにかけてからみ文句あてで宛あてる。お勢はまた始まつたという顔色かおつきをして彼方あちらを向てしまふ、文三は余儀なさそうにエへへ笑いをする。

「それからアノ一例の事ネ、あの事をまた何とか言ッてお遣しなすツたかい」

「ハイ、また言ッてよこしました」

「なんツてネ」

「ソノ一氣心が解らんから厭だというなら、エー今年の暮帰省した時に、逢ッてよく氣心を洞察^{みぬい}た上で極めたら好かろうといつて遣しましたが、しかし……」

「なに、母親さん」

「エ、ナニサ、アノ、ソラお前にもこの間話したアネ、文さんの……」

お勢は独り切り^{しき}に点頭^{うなず}く。

「へーそんな事を言ッておよこしなすツたかい、へーそうかい……それに附けても早く内で帰ッて来れば好^{いい}が……イエネ此間^{こないだ}もお

咄し申した通りお前さんのお嫁の事に付ちやア内でも些ちいと考える事も有るんだから……尤も私も聞て知てる事ことだから今咄してしまつてもいいけれども……」

ト些し考えて

「何時返事をお出しだ」

「返事はもう出しました」

「エ、モ―出したの、今日」

「ハイ」

「オヤマア文さんでもない、私になんとか一言咄しごとしてからお出しならしいのに」

「デスガ……」

「それはマアともかくも、何と言ッてお上げだ」

「エー今は仲々婚姻どころじゃアないから……」

「アラそんな事を言ッてお上げじゃア母親さんが尚^なお心配なさ
らアネ。それよりか……」

「イエまだお咄し申さぬから何ですが……」

「マアサ私の言事^{いうこと}をお聞きヨ。それよりかアノ叔父も何だか考
えがあるというからいづれ篤^{とつく}りと相談した上でとか、さもなきや
ア此地^{こつち}に心当りがあるから……」

「母親^{おつかア}さん、そんな事を仰^{おつ}しやるけれど、文さんは此地^{こつち}に何^{なん}か
心当りがお有^あなさるの」

「マアサ有ッても無くッても、そう言ッてお上げだと母親さんが
安心なさ^らアネ……イエネ、親の身に成ッて見なくツちやア解
らぬ事^{こと}だけれども、子供一人身を固めさせようというのはどん
なに苦勞なもんだろう。だからお勢^{あす}みたようなこんな親不孝な
者^{もん}でもそう何時^{いつ}までもお懷^ほ中で遊^{あそ}ばせても置^おけないと思うと私は

苦勞で苦勞でならないから、此間こないだも私あたしがネ、『お前おつつけもう押付お
 嫁に往かなくツちやアならないんだから、ソノーなんだとネー、
 何時までもそんなに小供の様な心持でいちやアなりませんと、
 それも母親さんのようにこんな氣樂な家へお嫁に往かれりやア
 ともかくもネー、若もしヒヨツと先に姑しゅうとめでもある所ところへ往いくんで御
 覽、なかなかこんなに我儘わがまま氣儘をしちやアいられないから、今
 の内に些ちつと覺悟をして置かなくツちやアなりませんヨ』と私が
 先へ寄ツて苦勞させるのが可憐かわいそうだから為をおもつて言ツて
 遣りやアネ文さん、マア聞ておくれ、こうだ。『ハイ私わたくしにやア私
 の了簡が有ります、ハイ、お嫁に往こうと往くまいと私の勝手
 で御座います』というんだヨ、それからネ私が『オヤそれじゃ
 アお前はお嫁に往かない氣かエ』と聞たらネ、『ハイ私は生き一本
 で通します』ツて……マア呆あきれかえるじやアないかネー文さん、

何処の国にお前、尼じゃアあるまいし、亭主^{ていし}持たずに一生暮すもんが有る者かネ」

これは万更^{まんざら}形のないお噺^{はなし}でもない。四五日^{げん}前何かの小言序にお政^{とが}が尖り声で「ほんとにサ戯談^{じやうたん}じゃアない、何歳^{いくつ}になるとお思いだ、十八じゃアないか。十八にも成ッてサ、好頃^{いひころ}嫁にでも往こうという身でいながら、なんぼなんだッて余^{あんま}り勘弁^{かんべん}がなさすぎらア。アアア早く嫁にでも遣^ありたい、嫁に往ッて小喧^{こやかま}しい姑でも持ッたら、些^{ちと}たア親の難^{ありがたみ}有味^{有味}が解るだろう」

ト言ッたのが原因^{もと}で些^{ちと}ばかりいじり合をした事が有ッたが、お政の言ッたのは全くその作替^{つくりかえ}で、

「トいうが畢竟^{つま}るところ、これが奥だからの事^{こと}サ。私共がこの位の時分にやア、チョイとお洒落^{しやらく}をしてサ、小色^{こいろ}の一ツも掙^{かせい}了^いだもんだけれども……」

「また猥褻わいせつ」

トお勢は顔を皺しかめる。

「オホオホオホほんとにサ、仲々小悪戯こいたずらをしたもんだけれども、この娘こはズー体たいばかり大きくツても一向しきなお懐ぼっぼだもんだから、それで何時まで経ッても世話ばかり焼けてなりやアしないんだヨ」

「だから母親さんは厭いとヨ、些ちいとばかりお酒に酔うと直じきに親子の差合さあいもなくそんな事をお言いだものヲ」

「へーへー恐れ煎豆いりまめはじけ豆ツ、あべこべに御意見か。ヘン、親の謗そしりはしりよりか些と自分の頭の蠅はえでも逐おうがいいや、面白くもない」

「エへへへへ」

「イエネこの通り親を馬鹿にしている、何を言ッてもとても私

共の言事いうことを用いるようなそんな素直なお嬢さまじやアないんだから、此度こんだ文さんヨーク腹に落ちるように言ッて聞かせておくんなさい、これでもお前さんの言事なら、些ちつたア聞くかも知れないから」

トお政は又もお勢を尻目に懸ける。折しも紙襖ふすま一ツ隔ててお鍋の声として、

「あんな帯留め……どめ……を……」

此方こなたの三人は吃驚びっくりして顔を見合わせ「オヤ鍋の寐言ねごとだヨ」と果ては大笑いになる。お政は仰向いて柱時計を眺ながめ、

「オヤもう十一時になるヨ、鍋の寐言を言うのも無理はない、サアサア寝ましよう寝ましよう、あんまり夜深しをするとまた翌日あしたの朝がづらい。それじゃア文さん、先刻さつきの事はいずれまた翌日あしたにも緩ゆつくりお咄おどしましょう」

「ハイ私も……私も是非お咄し申さなければならん事が有りますが、いずれまた明日……みょうにち……それではお休み」

あいさつト挨拶をして文三は座舗を立出で梯子段の下まで来ると、後より、うしろ

「文さん、貴君あなたの所ところに今日の新聞が有りますか」

「ハイ有ります」

「もうお読みなすったの」

「読みました」

「それじゃア拝借」

トお勢は文三の跡に従ついて二階へ上る。文三が机上に載せた新聞を取ッてお勢に渡すと、

「文さん」

「エ」

返答はせずしてお勢は唯笑ただツている。

「何です」

「何時いつか頂戴ちやうだいした写真を今夜だけお返し申ましようか」

「何故なぜ」

「それでもお淋さみしかろうとおもつて、オホオホ」

ト笑いながら逃ぐるが如く二階を駆下りる。そのお勢の後姿を見送ッて文三は吻ほっと溜息ためいきを吐いて、

「ますます言難いにくい」

一時間程を経て文三は漸ようやく寐支度をして褥とこへは這入はいツたが、

さて眠られぬ。眠られぬままに過去将来を思い回めぐらせば回らす

ほど、尚お氣が冴さえて眼も合あわず、これではならぬと氣を取直し

緊きびしく両眼を閉じて眠入ねいツた風ふうをして見ても自ら欺あざむくことも出

来ず、余儀なく寐返りを打ち溜息を吻くっきながら眠らずして夢を

見ている内に、一番鶏どりが唱うたい二番鶏が唱うたい、漸あけがたく曉あけがた近ちかくなる。
 「寧いっそ今夜こよいはこのままで」トおもう頃に漸ちがついく眼めがしよぼついて来
あたまて額くろひげが乱みだれだして、今まで眼前まへに隠かく見みていた母親ははの白髪しろがくび首まげに斑
 な黒髻くろひげが生はえて……課長くわちやうの首くびになる、そのまた恐こわらしい髻首まげが暫
 らくの間眼めまぐろしく水車みづぐるまの如ごとくに廻まわ転てている内に次第しだい々々々々に
 小こいさく成なつて……やがて相恰そうごうが変かつて……何時いつの間にか薔薇ばら
はなかんざしの花搔頭はなかんざしを挿さして……お勢せいの……首……に……な……

第五回 胸算違むなさんいから見けん一無法いちむほうは難題

枕頭まくらもとで喚覚よびさます下女うろたえの声こゑに見果みてぬ夢ゆめを驚おどろかされて、文三ぶんぞうが
 狼狽うろたえた顔かほを振揚ふりあげて向むかうを見れば、はや障子しやうしには朝日影あさひかげが斜しやめ
 に射さしている。「ヤレ寐過ねすぎしたか……」と思う間まもなく引続ひきついて

ムクムクと浮み上ツた「免職」の二字で狭い胸がまず塞がる……
 おんぼこ 芣苢を振掛けられた死蟄しにがいるの身で、躍上り、衣服を更めて、夜おどりあがの
 物を揚げあえず楊枝ようじを口へ頬張ほおばり故手拭ふるてぬぐいを前帯に挿はさんで、周章あわて
 て二階を降りる。その足音を聞きつけてか、奥の間で「文さん
 疾はやく為しないと遅くなるヨ」トいうお政の声に圭角かどはないが、文
 三の胸にはぎつくり応こたえて返答にも迷惑まごつく。そこで頬張はッてい
 た楊枝をこれ幸いと、我にも解らぬ出鱈目でたらめを句籠勝くごもりがちに言ッてま
 ず一寸遁いつすんのがれ、匆々そこそこに顔を洗ッて朝飯あさはんの膳ぜんに向ッたが、胸のみ塞
 がッて箸はしの歩みも止まりがち、三膳の飯を二膳で済まして、何時いつ
 もならグツと突出す膳もソツと片寄せるほどの心遣い、身体からだま
 で俄にわかに小さいくなつたように思われる。

文三が食事を済まして縁側を廻わり窃ひそかに奥の間を覗のぞいて
 見れば、お政ばかりでお勢の姿は見えぬ。お勢は近属ちかづろ早朝より

駿河台辺へ英語の稽古に参るようになったことゆえ、さては今日ももう出かけたのかと恐々座舗へ這入ッて来る。その文三の顔を見て今まで火鉢の琢磨をしていたお政が、俄かに光沢布巾の手を止めて不思議そうな顔をしたもその筈、この時の文三の顔色がツイ一通りの顔色でない。蒼ざめていて力なさそうで、悲しそうで恨めしそうで耻かしそうで、イヤハヤ何とも言樣がない。

「文さんどうかお為か、大變顔色がわりいヨ」

「イエどうも為ませぬが……」

「それじゃア疾くお為ヨ。ソレ御覽な、モウ八時にならアネ」

「エーまだお話し……申しませんでした……実は、ス、さくじつ……め……め……」

息気はつまる、冷汗は流れる、顔は赧くなる、如何にしても

言切れぬ。暫らく無言しばでいて、更らに出直おして、

「ム、めん職になりました」

ト一思いに言放ッて、ハツと差俯さしうつむ向いてしまう。聞くと等しくお政は手に持ッていた光沢布巾つやぶきんを宙に釣つるして、「オヤ」と一声叫せいんで身を反らしたまま一句も出いでばこそ、暫らくは唯茫然ただぼうぜんとして文三の貌かおを目守みめていたが、稍ややあッて忙いそわしく布巾を擲却ほり出して小膝こひざを進ませ、

「エ御免にお成りだとエ……オヤマどうしてマア」

「ど、ど、どうしてだか……私わたくしにも解りませんが……大方……ひ、人減ひとべらしで……」

「オーヤオーヤ仕様がなないネー、マア御免になつてサ。ほんとに仕様がなないネー」

ト落胆ようすした容子。須臾しばらくあッて、

「マアそれはそうと、これからはどうして往く積だエ」

「どうも仕様が有りませんから、母親にはもう些し国に居て貰つて、私はまた官員の口でも探そうかと思ひます」

「官員の口でツたツてチョククラチョイと有りやアよし、無からうもんならまた何時かのような憂い思ひをしなくツちやアならないやアネ……だから私が言わない事ちやアないんだ、些いと課長さんの所へも御機嫌伺いにお出でお出でと口の酸ばくなるほど言ツても強情張ツてお出ででなかつたもんだから、それでこんな事になつたんだヨ」

「まさかそういう訳でもありますまいが……」

「イイエ必とそうに違ひないヨ。デなくツて成程人減らしだツて罪も咎もない者をそう無暗に御免になさる筈がないやアネ……それとも何か御免になつても仕様がないうなわりの事をした

覚えがお有りか」

「イエ何にも悪い事をした覚えは有りませんが……」

「ソレ御覧なネ」

兩人とも暫らく無言。

「アノ本田さんは（この男の事は第六回にくわしく）^二 どうだツ
たエ」

「かの男はよう御座んした」

「オヤ善かつたかい、そうかい、運の善方^{いいかた}は何方^{どつち}へ廻ツても善^{いい}
んだネー。それというが全^{ぜん}駄^{たい}あの方は如才^{ぜんたい}がなくツて発明で、

ハキハキしてお出でなさるからだヨ。それに聞けば課長^{とこ}さんの
所^{とこ}へも常^{じょう}不^ふ断^{だん}御機嫌伺いにお出でなさるといふ事^{こと}だから、必^{きつ}と
それで此度^{こんど}も善かつたのに違いないヨ。だからお前さんも私の
言事^{いうこと}を聴いて、課長さんに取り入ツて置きやア今度もやつぱり

善かつたのかも知れないけれども、人の言事をお聴きでなかつたもんだからそれでこんな事になつちまつたんだ」

「それはそうかも知れませんが、しかし幾程免職になるのが恐
いと云つて、私にはそんな鄙劣ひれつな事は……」

「出来ないとお言ひのか……フン癪やせがまん我慢をお言ひでない、そんな了簡方だから課長さんにも睨ねめられたんだ。マアヨーク考えて御覧、本田さんのようなあんな方でさえ御免になつてはならないと思おもひなさるもんだから、手間暇かいで課長さんに取り入ろうとなさるんじやアないか、ましてお前さんなんざアそう言ッちやアなんだけれども、本田さんから見りやア……なんだから、尚更なおさらの事だ。それもネー、これがお前さん一人の事なら風見かざみの鳥からすみたように高くばツかり止まつて、食うや食わずにしようといま
いとそりやアもうどうなりと御勝手次第サ、けれどもお前さん

には母親さんおつかというものが有るじやアないかエ」

母親と聞いて文三の萎しおれ返るを見て、お政は好い責道具せめを視付みつけたという顔付、長羅宇ながらうの烟管きせるで席たたみを叩たたくをキツカケに、

「イエサ母親さんがお可愛かわいそうじやアないかエ、マア篤とつくり胸に

手を宛あてて考えて御覧。母親さんだッて父親さんには早くお別

れなさるし、今じや便りにするなアお前さんばかりだから、

どんなにか心細いか知れない。なにもああしてお国で一人暮し

の不自由な思いをしてお出でなさりたくもあるまいけれども、

それもこれみんなも皆お前さんの立身するばツかりを楽たのしみにして辛抱し

てお出でなさるんだヨ。そこを些すこしでも汲分くみわけてお出でなら、

仮令たとえどんな辛いと思う事が有ッても厭いやだと思ふ事があッても

我慢をしてサ、石に噛付かじりついても出世をしなくツちやアならないと

心懸なければならぬとこだ。それをお前さんのように、ヤ人

の機嫌を取るのは厭だの、やそんな鄙劣しれつな事は出来ないのとそんな我儘きまま氣随を言ッて母親さんまで路頭に迷わしちやア、今日こんにち冥利みよりがわりいじゃないか。それやアモウお前さんは自分の勝手で苦勞するんだから関かまうまいけれども、それじゃア母親さんがお可愛かきそうじゃアないかい」

ト層かさにかかッて極きめ付れど、文三は差俯向いたままで返答をしない。

「アアアア母親さんもあんなに今年の暮を楽しみにしてお出でなさるとこだから、今度こんだ御免にお成りだとお聞きなすつたらさぞマア落胆がつかりなさる事だろうが、年を寄とッて御苦勞なさるのを見ると真個ほんにお痛いたしいようだ」

「おふくろ実に母親には面目めんぼくが御座んせん」

「あたりまえ当然サ、二十三にも成ッて母親さん一人さえ樂たのしみに養すくす事が出

来ないんだものヲ。フフン面目が無くツてサ」

ト、ツンと済まして空嘯き、烟草たばこを環わに吹ふいている。そのお政よこがの半面を文三は畏こわらしい顔をして佖きつと睨ねめつけ、何事をか言わんとしたか……氣を取直して莞爾微笑にっこりした積つもりでも顔へ蹶あられたところは苦笑い、震声ふるいこえとも附つかず笑声とも附つかぬ声で、

「へへへへ面目は御座んせんが、しかし……出……出来た事なら……仕様が有りません」

「何だとエ」

トいいながら徐しずかに此方こなたを振向いたお政の顔を見れば、何時いもむししか額に芋蠟いもむしほどの青筋を張らせ、肝癰かんしやくの眚まなじりを釣上げて唇くちびるをヒン曲まげている。

「イエサ何とお言いだ。出来た事なら仕様が有りませんと……誰でれが出来こした事こたエ、誰でれが御免になるように仕向けたんだ

エ、皆自分の頑固^{かたいじ}から起^{おこ}つた事じやアないか。それも傍^{はた}で氣を
 附^つけぬ事か、さんざッばら人^{ひと}に世話^{せわ}を焼^やかして置^おて、今更御免
 になりながら面目^{めいもく}ないとも思^{おも}わないで、出来^{でき}た事なら仕^し様が有
 ませんとは何^{なん}の事^{こと}たエ。それはお前^{まへ}さんあんまりというもんだ、
 余^あり人^{ひと}を踏^ふ付けにすると云^いう者^{もの}だ。全^{ぜん}躰^{たい}マア人^{ひと}を何^{なん}だと思^{おも}ッて
 お出^いでだ、そりやアお前^{まへ}さんの事^{こと}たから鬼^{おに}老婆^{らばあ}とか糞^{くそ}老婆^{らばあ}とか
 言^いッて他人^{たにん}にしてお出^いでかも知^しれないが、私^{わたし}ア何^{なん}処^{どこ}までも叔母^{しそ}
 の積^{つみ}だヨ。ナアニこれが他人^{たにん}で見^みるが^がいい、お前^{まへ}さんが御免^{ごめん}に
 な^なつたッて成^ならなく^くつたッて此^こ方^ちにやア痛^{いた}くも痒^かくも何^{なん}とも無^な
 い事^{こと}たから、何^{なん}で世^よ話^わを焼^やくも^もんですか。けれども血^ちは繫^つな^なが^がず
 とも縁^{えん}あ^あッて叔母^{しそ}となり甥^{おい}となりして見^みれば、そうしたもんじや
 ア有^ありません。ま^ましてお前^{まへ}さんは十四^{じゅうし}の春^{はる}ポツと出^いの山^{やま}出^いしの
 時^{とき}から、長^{なが}の年^{とし}月^{つき}、この私^{わたし}が婦^{おんな}人^{ひと}の手^て一^{いち}ツで頭^{あたま}から足^{あし}の爪^{つま}頭^{さき}ま

での事を世話アしたから、私はお前さんを御迷惑かは知らない
 が血を分けた子息むすこ同様に思ッてます。ああやッてお勢や勇とい
 う子供が有ッても、些かげしも陰陽かげしななくしている事がお前さんにや
 ア解らないかエ。今までだッてもそうだ、何卒どうぞマア文さんも首
 尾よく立身して、早く母親おつかさんを此地こつちへお呼び申すようにして
 上げたいもんだと思わない事は唯の一日も有ません。そんな
 思ッてるとこだものヲ、お前さんが御免にお成りだと聞いちやア
 私あたしは愉快いいところもちはしないよ、愉快いいところもちはしないからアア困ッた事に成ッ
 たと思ッて、ヤレこれからはどうして往く積だ、ヤレお前さん
 の身になつたらさぞ母親さんに面目があるまいと、人事しとごとにしな
 いで歎なげいたり悔くやんだりして心配してるとこだから、全躰まことなら『叔
 母さんの了簡に就つかなくッて、こう御免になつて実に面目が有
 りません』とか何とか詫言わびことの一言でも言う筈のとこだけれど、

それも言わないでもよし聞たくもないが、人の言事を取上げなくツて御免になりながら、糞落着に落着払ツて、出来た事なら仕様が有りませんとは何の事たエ。マ何処を押せばそんな音が出ます……アアアアつまらない心配をした、此方ではどこまでも実の甥と思ツて心を附けたり世話を焼たりして信切を尽していても、先様じゃア屁とも思召さない」

「イヤ決してそう言う訳じゃア有りませんが、御存知の通り口不調法なので、心には存じながらツイ……」

「イイエそんな言訳は聞きません。なんでも私を他人にしてお出でに違いない、糞老婆と思ツてお出でに違いない……此方はそんな不実な心意気の人と知らないから、文さんも何時までもああやツて一人でもいられまいから、来年母親さんがお出でなすつたら篤り御相談申して、誰と言ツて宛もないけれども相応

なのが有ッたら一人授けたいもんだ、それにしても外人と違ッしとり
 て文さんがお嫁をお貰いの事だから黙ッてもいられない、何か
 しら祝ッて上げなくツちやアなるまいからッて、この頃じゃア、
 アノ博多はかたの帯をくけ直おさして、コノお召縮緬ちりめんの小袖こそでを仕立直
 おさして、あれをこうしてこれをこうしてと、毎日々々勘かんえて
 ばツかいたんだ。そうしたら案外で、御免になるもいだけれど
 も、面目ないとも思わないで、出来た事なら仕様が有りませぬ
 と済まアしてお出でなさる……アアアアもういうまいいうまい、
 幾程いくち言ッても他人にしてお出じやア無駄むだだ」

ト厭味文句を並べて始終肝癪おもしろの思入おもひいれ。暫らく有ッて、

「それもそうだが、全躰その位なら昨夕ゆうべの中に、実はこれこれ
 で御免になりましたと言位しといふ言ッたッてよさそうなもんだ。お
 話してないもんだから此方こちはそんな事とは夢にも知らず、お弁

当のお菜も毎日おんなじ物ばかりでもお倦きだろう、アアして勉強してお勤にお出の事だからその位な事は此方で気を付けて上げなくっちゃアならないと思つて、今日のお弁当のお菜は玉子焼にして上げようと思つても鍋には出来ず、余儀所ないから私が面倒な思いをして拵らえて附けましたアネ……アアアア偶に人が気を利かせればこんな事ツた……しかし飛んだ余計なお世話でしたヨネー、誰れも頼みもしないのに……鍋」

「ハイ」

「文さんのお弁当は打開けておしまい」

お鍋女郎は襖の彼方から横幅の広い顔を差出して、「へー」とモツケな顔付。

「アノネ、内の文さんは昨日御免にお成りだツサ」

「へーそれは」

「どうしても働のある人は、フフン違ッたもんだヨ」

なかば

ト半まで言切らぬ内、文三は血相を変てツと身を起し、ツカ

ざしき

ツカと座舗を立出でて我子舎へ戻り、机の前にブッ座ツて齒を

くいしば

くやしなみだ

嚙切ツての悔恨、ハラハラと膝へ濫した。暫らく有ツて文三は、

しば

はふり落ちる涙の雨をハンカチーフで拭止めた……がさて拭ッ

ぬぐいと

ても取れないのは沸返える胸のムシヤクシヤ、熟々と思廻らせ

つらつら

おもいめぐ

ば廻らすほど、悔しくも又口惜しくなる。免職と聞くより早く

くちお

ガラリと変る人の心のさもしさは、道理らしい愚痴の蓋で隠蔽

ふた

かく

そうとしても看透かされる。とはいえそれは忍ぼうと思えば忍

みす

びもなろうが、面あたりに意久地なしと言わぬばかりのからみ

まの

文句、人を見括ッた一言ばかりは、如何にしても腹に据えかね

みくび

いちごん

いか

す

る。何故意久地がないとて叔母がああ嘲り辱めたか、其処まで

なぜ

あざけはずかし

そこ

思い廻らす暇がない、唯もう腸が断れるばかりに悔しく口惜し

はらわたちぎ

く、恨めしく腹立たしい。文三は憤然として「ヨシ先がその気なら此方こつちもその気だ、畢竟ひつきようおぼ嬢と思えばこそ甥と思えばこそ、言たい放題を言わして置くのだ。ナニ縁を断きッてしまえば赤の他人、他人に遠慮も糸瓜へちまもいらぬ事だ……糞ッ、面宛つらあて半分に下宿をしてくれよう……」ト肚はらの裏で独言をいうと、不思議やお勢の姿が目前にちらつく。「ハテそうしては彼娘あれが……」ト文三は少しく萎しおれたが……不図又叔母の悪々しい者面を憶出して、又憤然やつきとなり、「糞ッ止めても止まらぬぞ」ト何時いつにない断念のよさ。こう腹を定きめて見ると、サアモウ一刻も居るのが厭になる、借住居かとおもえば子舎へやが気に喰わなくなる、我物でないかと思えば縁ふちの欠けた火入まで気色きしよくに障わる。時計を見れば早十一時、今から荷物を取旁とりかたづ付けて是非とも今日中には下宿を為よう、と思えば心までいそがれ、「糞ッ止めても止まらぬぞ」ト口癖の

ように言いながら、熱氣やつきとなつて其処らを取旁付けにかかり、
 何か探そうとして机の抽斗ひきだしを開け、中に納いれてあつた年頃五十
 の上をゆく白髪たる老婦の写真にフト眼を注とめて、我にもなく
 熟々と眺め入ながつた。これは老母の写真で。御存知の通り文三は
 生得の親おmoi、母親の写真を視て、我が辛苦を嘗なめ艱難かんなんを忍び
 ながら定めない浮世に存生ながらえていたる、自分一個ひとりの為ため而已のみで
 ない事を想出おもいいだし、我と我を叱しかりもし又励しもする事何時も何時
 も。今も今母親の写真を見て文三は日頃喰付けの感情をおこし
 覚えずも悄然しやうぜんと萎しれ返かへつたが、又悪にく々しい叔母の者面しやつつらを憶出し
 て又熱氣やつきとなり、拳こぶしを握り齒を喰切り、「糞くいしばツ止めて止まらぬぞ」
 ト独言ひとりごとを言いながら再び将まさに取旁付とりかたづけに懸からんとすると、二階の
 上り口で「お飯まんまで御座いますヨ」ト下女の呼ぶ声がする。故ことさら
 に二三度呼ばして返事にも勿躰もったいをつけ、しぶしぶ二階を降りて、

氣むずかしい苦り切った怖ろしい顔色をして奥坐舗おくざしきの障子を開けると……お勢おせがいるお勢が……今まで残念口惜しいと而已のみ一途に思詰めていた事ゆえ、お勢の事は思出したばかりで心にも止めず忘れるともなく忘れていたが、今突然可愛らしい眼と眼を看合わせ、しおらしい口元で嫣然にっこり笑われて見ると……淡雪あわゆきの日の眼に逢あッて解けるが如く、胸の鬱結むすぼれも解けてムシヤクシヤも消え消えになり、今までの我を怪しむばかり、心の変動、心底むなそこに沈んでいた嬉うれしみ有難みが思い懸けなくもニツコリ顔へ浮み出し懸かった……が、グツと飲込んでしまい、心では笑いながら顔ではフテテ膳に向った。さて食事も済む。二階へ立戻ひようしぬッて文三が再び取旁付に懸ろうとして見たが、何となく拍子抜けがして以前のような氣力が出ない。ソツと小声で「大丈夫」と言ッて見たがどうも氣が引ひ立たぬ。依よて更に出直して「大丈夫」ト

熱氣^{やつき}とした風^{ふう}をして見て、齒^はを喰切^{くいしば}ツて見て、「一旦思い定めた事^{こと}を變^{へん}がえるという事が有るものか……しらん、止めても止まらんぞ」

と言ッて出て往^ゆけば、彼娘^{あれ}を捨てなければならぬかと落胆^{もつたい}したおもむき。今更未練^{もつたい}が出てお勢^{せう}を捨^するなどという事は勿^{もつ}躰^{たい}な^なくて出来ず、と言ッて叔母^{わびごと}に詫言^{わびごと}を言うも無念^{むねん}、あれも厭^{いや}なりこれも厭^{いや}なりで思案^{しあん}の糸筋^{いとすぢ}が乱^{もつ}れ出し、肚^{うち}の裏^{うら}では上^{うへ}を下^{した}へとゴツタ返^{かへ}えすが、この時より既にどうやら人が止めずとも遂^{つい}には我^{われ}から止まりそうな心地^{こころ}がせられた。「マアともかくも」ト取^と旁付^{ぼうふ}に懸^かりは懸^かツたが、考^{かん}えながらするので思^{おも}の外暇^{がひ}取り、二時頃^{ふたとき}までかかつて漸^{ようや}く旁付^{ぼうふ}終^はりホツと一息吐^{いきはき}いてみると、ミシリミシリと梯子^{はしご}段^{だん}を登^ある人の蹠音^{あしおと}がする。蹠音^{あしおと}を聞^きたばかりで姿^{すがた}を見ずとも文三^{ぶんさん}にはそれと解^とツた者^{もの}か、先刻^{さきどき}飲^の込んだニツコ

りを改めて顔へ現わして其方そなたを振向く。上ッて来た者はお勢で、文三の顔を見てこれもまたニツコリして、さて坐舗を見廻わし、

「オヤ大変片付たこと」

「余りヒツ散らかつていたから」

ト我知らず言ッて文三は我を怪んだ。何故虚言そらごとを言ッたか自分にも解りかねる。お勢は座に着きながら、さして吃驚びっくりした様子もなく、

「アノ今母親さんがお嘸はなしだツたが、文さん免職におなりなすつたとネ」

「昨日免職になりました」
きのう

ト文三も今朝とはうつて反ッて、今は其処かわどころで無いと言ッたような顔付。

「実に面目は有りませんが、しかし幾程いくばく悔んでも出来た事は仕

様が無いと思ツて今朝母親さんに御風聴申したが……叱られま
した」

トいつて齒を嚙切ツて差俯向く。

「そうでしたとネー、だけれども……」

「二十三にも成ツて親一人樂に過す事の出来ない意久地なし、
と言わないばかりに仰しやツた」

「そうでしたとネー、だけれども……」

「成程私は意久地なしだ、意久地なしに違いないが、しかしな
んば叔母甥の間柄だと言ツて面と向ツて意久地なしだと言われ
ては、腹も立たないが余り……」

「だけれどもあれは母親さんの方が不条理ですワ。今もネ母親
さんが得意になつてお話しだったから、私が議論したのですよ。
議論したけれども母親さんには私の言事が解らないと見えてネ、
議論したけれども母親さんには私の言事が解らないと見えてネ、

唯^{ただ}腹^{はら}ばツかり立てているのだから、教育の無い者は仕様が
ないのネー」

ト極^きり文句。文三は垂^たれていた頭^{こうべ}をフツと振^ふ挙^あげて、

「エ、母親さんと議論^{ぎろん}を成^なすつた」

「ハア」

「僕の為^{ため}に」

「ハア、君の為^{ため}に弁^{べん}護^ごしたの」

「アア」

ト言^いッて文三は差^さ俯^ふ向^むいてしま^う。何^{なん}だか膝^{ひざ}の上^{うへ}へボツタリ

落^おちた物^{もの}が有^ある。

「どうかしたの、文さん」

トいわれて文三は漸^{しだ}く頭^{こうべ}を擡^{もた}げ、莞^{にっこり}爾^り笑^{わら}い、その癖^{まぶち}眶^{くわ}を湿^{うる}ま

せながら、

「どうもしないが……実に……実に嬉れしい……母親さんの仰しやる通り、二十三にも成ッてお袋一人さえ過しかねるそんな不甲斐ない私をかばつて母親さんと議論をなすつたと、実に……」

「条理を説ても解らない癖に腹ばかり立てているから仕様がないの」

ト少し得意の躰。

「アアそれ程までに私を……思ッて下さるとは知らずして、貴嬢に向ッて匿立てをしたのが今更耻かしい、アア耻かしい。モウこうなれば打散けてお話してしまおう、実はこれから下宿をしようかと思ッていました」

「下宿を」

「サ為ようかと思ッていたんだが、しかしもう出来ない。他人同様の私をかばつて実の母親さんと議論をなすつた、その貴嬢

の御信切を聞ちや、しろと仰しやツてももう出来ない……がそうすると、母親さんにお詫わびを申さなければならぬが……」

「うっちゃ打遣ツてお置きなさいヨ。あんな教育の無い者が何と言ツたツて好う御座んさアネ」

「イヤそうでない、それでは済まない、是非お詫を申そう。がしかしお勢さん、お志は嬉しいが、もう母親さんと議論をすることは罷やめて下さい、私のために貴嬢を不孝の子にしては済まないから」

「お勢」

ト下坐舗の方でお政の呼ぶ声がする。

「アラ母親さんが呼んでお出でなさる」

「ナア二用も何にも有るんじゃアないの」

「お勢」

「マア返事を為さいヨ」

「お勢お勢」

「ハアイ……チョツ五月蠅こと」

「起揚る。
たちあが

「今話した事は皆母親さんにはコレですよ」

ト文三が手頭を振ッて見せる。
てくび お勢は唯點頭た而已で言葉は

なく、二階を降りて奥坐舗へ参ッた。

先程より疳癰の皆を釣り上げて手ぐすね引て待ッていた母親
かんしゃくまなじり

のお政は、お勢の顔を見るより早く、込み上げて来る小言を一

時にさらけ出しての大怒鳴。
おおがなり

「お……お……お勢、あれ程呼ぶのがお前には聞えなかつたか

エ、聾者じゃアあるまいし、人が呼んだら好加減に返事をする
つんぽ

がいい……全躰マア何の用が有ッて二階へお出でだ、エ、何の

用が有ッてだエ」

ト逆上^{のぼせ}あがッて極^きめ付けても、此方^{こなた}は一向平氣なもので、

「何^なにも用は有りやアしないけれども……」

「用がないのに何故お出でだ。先刻^{さつき}あれほど、もうこれからは

今までのようにへタクタ二階へ往ッてはならないと言ッたのが

お前にはまだ解らないかエ。さかりの附た犬じやアあるまいし、

間^まがな透^{すき}がな文三の傍^{そば}へばッかし往きたがるよ」

「今までは二階へ往ッても善くッてこれからは悪いなんぞッて、

そんな不条理な」

「チョッ解らないネー、今までの文三と文三が違います。お前

にやア免職になった事が解らないかエ」

「オヤ免職に成ッてどうしたの、文さんが人を見ると咬^{かみつ}付きで

もする様になったの、へーそう」

「な、な、な、なんだと、何とお言いだ……コレお勢、それはお前あんまりと言うもんだ、余り親をば、ば、ば、馬鹿にすると言うもんだ」

「ば、ば、ば、馬鹿にはしません。へー私は条理のある所を主張するので御座います」

ト唇を反らしていうを聞くや否や、お政は忽ち顔色を変えて手に持つていた長羅宇の烟管を席へ放り付け、

「エーくやしい」

ト齒を喰切ツて口惜しがる。その顔を横眼でジロリと見たばかりで、お勢はすまアし切ツて座舗を立出でてしまつた。

しかしながらこれを親子喧嘩げんかと思うと女丈夫の本意に負く。

どうしてどうして親子喧嘩……そんな不道德な者でない。これはこれ辱かたじけなくも難有ありがたくも日本文明の一原素ともなるべき新主義

と時代後れおくの旧主義と衝突をすると、よくお眼を止めて御覧あらましよう。

その夜文三は断念おもいきッて叔母に詫言をもうしたが、ヤ挺てこずったの挺こずらないのと言ってそれはそれは……まずお政が今朝言ッた厭味に輪を懸け枝を添えて百万陀羅并べ立てた上句あげく、お勢の親をそまつ鹿末にするのまでを文三の罪にして難題を言懸ける。されども文三が死だ気になつて諸事お容ゆるるされてで持切きッているに、お政もスコだれの拍子抜けという光景きみで厭味ねじめの音締おとをするように成なったから、まず好しと思う間もなく、不図又文三の言葉尻じりから燃出して以前にも立優たちまさる火勢、黒烟焰くろけぶりえんえん々と顔に漲みなぎるところを見てはとても鎮火しそうも無かつたのも、文三が済すませぬの水を斟くみ尽つくして澆そそぎかけたので次第々々に下火になつて、プスプスいふり燠あになつて、遂に不精々々に鎮火しめる。文三は吻ほっと一息、寸善

尺魔せきまの世の習い、またもや御意の変らぬ内にと、挨拶あいさつも匆々そこそこに起おッて坐敷ひとりごとを立出で二三歩すると、後うしろの方かたでお政がさも聞えよがしの独語、

「アアアア今度こんだこそは厄介やっかい払いかと思おもッたらまた背負しよい込みか」

第六回 どちら着つかずのちくらが沖

秋の日影も稍傾ややかたがいて庭の梧桐ごとうの影法師が背丈を伸ばす三時

頃、お政は独り徒然つくねんと長手の火鉢ひばちに凭もたれ懸ななめッて、斜ななめに坐りなが

ら、火箸ひばしを執とつて灰へ書く、楽書いたずらがきも倭文字やまともし、牛の角文字といきいろいろ

に、心に物を思えばか、怏々おうおうたる顔の色、動やともすれば太息といきを吐はい

ている折しも、表の格子戸こうしどをガラリト開けて、案内もせず這入はいッ

て来て、隔へだての障子の彼方あなからヌット顔を差出して、

「今日は」
こんち

ト挨拶をした男を見れば、何処かで見たような顔と思うも道

理、文三の免職になつた当日、打連れて神田見附の裏より出て

来た、ソレ中背の男と言つたその男で。今日は退省後と見えて

不断着の秩父縞の袷衣の上へ南部の羽織をはおり、チト疲労れ

た博多の帯に袂時計の紐を捲付けて、手に土耳其形の帽子を携

えている。

「オヤ何人かと思つたらお珍らしいこと、此間はさつぱりお見

限りですネ。マアお這入なさいナ、それとも老婆ばかりじゃア

お厭かネ、オホホホホホ」

「イヤ結構……結構も可笑しい、アハハハハハ。トキニ何は、

内海は居ますか」

「ハア居ますヨ」

「それじゃちよいと逢て来てからそれからこの間の復讐だ、覚悟をしてお置きなさい」

「返討じやアないかね」

「違いない」

ト何か判らぬ事を言ッて、中背の男は二階へ上ッてしまッた。帰ッて来ぬ間にチョッピリこの男の小伝をと言う可きところなれども、何者の子でどんな教育を享けどんな境界を渡ッて来た事か、過去ッた事は山媛の霞に籠ッておぼろおぼろ、トント判らぬ事而已。風聞に拠れば総角の頃に早く怙恃を喪い、寄辺渚の棚なし小舟では無く宿無小僧となり、彼処の親戚此処の知己と流れ渡ッている内、曾て侍奉公までした事が有るといいイヤ無いという、紛々たる人の噂は滅多に宛になら坂や兎手柏の上露よりももろいものと旁付て置いて、さて正味の確實なところを

掻摘かいつまんで誌しるせば、産うまれは東京とうけいで、水道の水臭い士族かたわれの一人だと履歴書を見た者の嘸はなし、こればかりは偽うそでない。本田昇のぼると言いつて、文三より二年前ぜんに某省の等外を拜命このかたした以来、吹小歇ふきおやみのない仕合しあわせの風にグツトのした出来星判任できぼし、当時は六等属の独身ひとりみではまず楽な身の上。

昇は所謂いわゆる才子で、頗すこぶる智慧才覚ちまが有あつてまた能よく智慧才覚を鼻に懸ける。弁舌は縦横無尽、大道に出る豆蔵まめぞうの墨を摩さして雄を争うも可なりという程では有るが、豎板たていたの水の流を堰せきかねて折節は覚えず法螺ほらを吹く事もある。また小奇用こぎようで、何一ツ知らぬという事の無い代り、これ一ツ卓絶すぐれて出来るという芸もない、怠あきるが性分あきで倦あきるが病だといえはそれもその筈はずか。

昇はまた頗あいきようる愛嬌あいきように富あいきようでいて、極きわめて世辞がよい。殊ことに初対面の人にはチャホヤもまた一段で、婦人にもあれ老人にもあれ、そ

れ相應に調子を合せて曾てそらすという事なし。唯不思議な事
には、親しくなるに随い次第に愛想が無くなり、鼻の頭で待遇
て折に触れては氣に障る事を言うか、さなくば厭におひやら
す。それを憤りて喰て懸れば、手に合う者はその場で捻返し、手
に合わぬ者は一時笑ツて済まして後、必ず讐を酬ゆる……尾籠
ながら、犬の糞で横面を打曲げる。

とはいうものの昇は才子で、能く課長殿に事える。この課長
殿というお方は、曾て西欧の水を飲まれた事のあるだけに「殿様
風」という事がキツイお嫌いと見えて、常に口を極めて御同僚
方の尊大の風を御誹謗遊ばすが、御自分は評判の氣むずかし屋
で、御意に叶わぬとなると瑣細の事にまで眼を剥出して御立腹
遊ばす、言わば自由主義の压制家という御方だから、哀れや属官
の人々は御機嫌の取様に迷いてウロウロする中に、独り昇は迷

かぬ。まず課長殿の身態みぶた声音こゐはおろか、咳せき払いの様子ようすから噓うその仕方まで真似まねたものだ。やそのまた真似まねの巧たくみな事というものは、あたかもその人が其処そこに居て云う為いするが如くでそつくりそのまゝ、唯相違ただちがひと言ッては、課長殿は誰の前でもアハハハとお笑わらい遊あそぶすが、昇は人に依よッてエへ笑わらいをする而已のみ。また課長殿に物など言懸ことけられた時は、まず忙いそわしく席しきを離はなれ、仔細しさいらしく小首こくびを傾かたけて謹つつしんで承うけり、承うけり終はッてさて莞爾にっこり微笑うやうやして恭うやうやしく御返答ごへんた申上まうる。要するに昇は長官を敬うやまつると言ッても遠とほざけるには至いたらず、狎なれるといつても洩けすには至いたらず、諸事万事御意ごいの随意まにまに々々曾さて抵抗ていこうした事なく、しかのみならず……此処ここが肝かん賢けん要よう……他の課長の遺行ゐぎやうを数かずて暗くに盛徳せいとくを称揚しょうやうする事も折節せつせふはあるので、課長殿は「見所けんじょのある奴やつじゃ」ト御意遊ごいあそばして御ご負ひあるに遊あそぶすが、同僚どうりょうの者は善よく言いわぬ。昇の考こうでは皆法界ほうかい恪いりんき氣きで

善く言わぬのだという。

ともかくも昇は才子で、毎日怠らず出勤する。事務に懸けては頗る活潑で、他人の一日分沢山の事を半日で済まして平気孫左衛門、難渋そうな顔色もせぬが、大方は見せかけの勉強態、小使給事などを叱散らして済まして置く。退省て下宿へ帰る、衣服を着更る、直ぐ何処へか遊びに出懸けて、落着て在宿していた事は稀だという。日曜日には、御機嫌伺いと号して課長殿の私邸へ伺候し、囲碁のお相手をもすれば御私用をも達す。先頃もお手飼に狎が欲しいと夫人の御意、聞よりも早飲込み、日ならずして何処で貰つて来た事か、狎の子一疋を携えて御覧に供える。件の狎を御覧じて課長殿が「此奴妙な貌をしているじゃアないか、ウー」ト御意遊ばすと、昇も「左様で御座います、チト妙な貌をしております」ト申上げ、夫人が傍から「それでも狎

はこんなに貌のしやくんだ方が好いのだと申ます」ト仰おつしやると、昇おくさまも「成程夫人の仰おおせの通り狎なはこんなに貌のしやくんだ方が好いのだと申ます」ト申上げて、御愛嬌にチョイト狎なの頭を撫なでて見たとか。しかし永い間には取外とりはずしも有ると見えて、曾て何かの事で些すこしばかり課長殿の御機嫌を損ねた時は、昇はその当坐いちりょうにち一両日の間、胸が閉塞つかえて食事が進まなかつたとかいうが、程なく夫人のお癩しやくから揉もみやわらげて、殿さまの御肝癖も療治し、果は自分の胸の痞つかえも押さげたという、なかなか小腕せうわんのきく男で。下宿が眼と鼻の間の所せ為いか、昇は屢々しばしば文三の所へ遊びに来る。お勢が帰宅してからは、一段足繁くなつて、三日にあげず遊びに来る。初とは違い、近頃は文三に対しては氣に障のわる事み而已のみを言散らすか、さもなければ同僚の非を数えて「乃公おれは」との自負自讃、「人間地道じみちに事をするようじや役に立たぬ」などと

勝手な熱を吐散たまたすが、それは邂逅たまたまの事で、大方は下坐敷でお政を相手に無駄むだ口を叩たたき、或る時は花合せとかいうものを手ろう中に弄いして、如何いかな真似まねをした上句あげく、寿司すしなどを取寄せて奢散おごりちらす。勿論もちろんお政には殊ことの外氣に入こってチャホヤされる、氣に入り過ぎはしないかと岡焼をする者も有るが、まさか四十面づらをさげて……お勢には……シツあしおと躰音あしおとがする、昇ではないか……当あッた。

「トキニ内海はどうも飛だ事で、実に氣の毒な、今も往いて慰めて来たが塞切ふさいぎツている」

「放擲うっちゃつてお置きなさいヨ。身から出た錆さびだもの、些ちつとは塞さいぐも好いのサ」

「そう言えばそんなような者だが、しかし何しろ氣の毒だ。こういう事になろうと疾はやくから知ていたらまたどうにか仕様も有たろうけれども、何しても……」

「何とか言ッてましたろうネ」

「何を」

「私の事をサ」

「イヤ何とも」

「フム貴君あなたも頼もしくないネ、あんな者を朋友ともだちにして同類ぐるにお

成なるなさる」

「同類ぐるにも何にも成りやアしないが、真実ほんとうに」

「そう」

ト談話はなしの内に茶を入れ、地袋の菓子取出して昇すすに侑すめ、ま

たお鍋もつを以てお勢を召よばせる。何時いつもならば文三にもと言うと

ころを今日は八分ふしたゆえ、お鍋が不審に思い、「お二階へは」

ト尋ねると、「ナニ茶がカツ食くらいたきやア……言いわないでも宜いいヨ」

ト答えた。これを名なづけて Woman's revenge ウーマンズ レヴェンジ (婦人の復讐ふくしゅう) とい

う。

「どうしたんです、鬨いじりり合いでもしたのかネ」

「鬨いじり合いなら宜がいじめられたの、文三にいじめられたの……」

「それはまたどうした理由わけで」

「マア本田さん、聞ておくんなさい、こうなんですヨ」

ト昨日文三きのうにいじめられた事を、おまけにおまけを附着つてべ

チャクチャと饒舌しゃべり出しては止度なく、滔々蕩々とうとうとうとうとして勢い百川ひやくせん

の一時に決した如くで、言損じがなければ委たみもなく、多年の

揣摩さうま一時の宏弁こうべん、自然に備わる抑揚頓挫とんざ、或あるは開き或あるは闔とじて

縦横自在に言廻まわわせば、鷺さぎも鳥からすに成らずには置かぬ。哀あわれむべし

文三は竟ついに世にも怖おそろしい悪棍わるものと成り切った所へ、お勢は手に

一部の女学雑誌を把持もち、立たちながら読み読み坐舖ざしきへ這入て来て、

チヨイト昇に一礼したのみで嫣然にっこりともせず、饒舌しゃべりながら母親が

汲くみで出す茶碗ちやわんを憚はばかりとも言わずに受取りて、一口飲で下へ差措さしお

たまま、済すまアし切きッて再復またふたび読みさした雑誌を取り上げて眺なが

め詰めた、昇と同席の時は何時でもこうで。

「トいう訳でツイそれなり覺けりにしてしまいましたかね、マア本

田さん、貴君あなたは何方どつちが理屈だと思なさる」

「それは勿論内海が悪い」

「そのまた悪い文三わりの肩を持ッてサ、私あたしに喰ッて懸ッた者があ

ると思召おぼしめせ」

「アラ喰ッて懸りはしませんワ」

「喰ッて懸らなくッてサ……私はもうもう腹が立て腹が立て堪たま

らなかつたけれども、何してもこの通り氣が弱いシ、それに先

には文三という荒神こうじん様が附つてるからとても叶かなう事ことぢやア無いと

おもつて、虫を殺ろして噤黙だまつてましたかね……」

「アアあんな虚言うそばかり言ッて」

「虚言うそじゃないワ真実ほんとだワ……マなんぼなんだッて呆あきれ返るじや有りませんか。ネー貴君、何処どこの国にか他人の肩を持ッてサ、シシババの世話をしてくれた現在の親に喰ッて懸もんるという者が有るもんですかネ。ネー本田さん、そうじやア有りませんか。ギャット産れてからこれまでにするにア仇あだや疎おろそかな事ことじやア有りません。子を持てば七十五度泣たくというけれども、この娘この事ことではこれまで何百度泣たか知れやアしない。そんなにして養育そだてて貰もらッても露程も有難いと思ッてないそうで、この頃じや一口いう二口目にや速すぐ悪たれ口だ。マなんたら因果でこんな邪見な子を持ッたかと思うとシミジミ悲しくなりますワ」

「人が黙ッていれば好氣いいきになつてあんな事を言ッて、余あんなまりだから宜いいワ。私は三歳の小児じやないから親の恩位は知ていますワ。

知っていますけれども条理……」

「アアモウ解ッた解ッた、何にも宣うナ。よろしいヨ、解ッた

ヨ」

ト昇は憤然^{やつぎ}と成ッて饒舌り懸けたお勢の火の手を手頸^{てくび}で煽^{あお}り消して、さてお政に向い、

「しかし叔母さん、此奴^{こいつ}は一番失策^{しくじ}ツたネ、平生の粹^{すい}にも似合
われないなされ方、チトお恨みだ。マア考えて御覧^{ごらん}じろ、内海と
いじり合いが有ッて見ればネ、ソレ……という訳が有るからお
勢さんも黙ッては見ていられないやアネ、アハハハハ」

ト相手のない高笑い。お勢は額^{ひたえ}で昇を睨^{にら}めたまま何とも言わ
ぬ、お政も苦笑いをした而已^{のみ}でこれも默然^{だんまり}、些^ちと席がしらけた
趣^きき。

「それは戯談^{じやうだん}だがネ、全体叔母さん余り慾が深過るヨ、お勢さ

んの様なこんな上出来な娘を持ちながら……」

「なにが上出来なものですか……」

「イヤ上出来サ。上出来でないと思うなら、まず世間の娘子を御覧なさい。お勢さん位の年恰好でこんなに縹致がよくッて見ると、学問や何かは其方退けで是非色狂いとか何とか碌な真似はしたがらぬものだけれども、お勢さんはさすがは叔母さんの仕込みだけ有ッて、縹致は好くッても品行は方正で、曾て浮氣らしい真似をした事はなく、唯一心に勉強してお出でなさるか漢学は勿論出来るシ、英学も……今何を稽古してお出でなさる」

「『ナショナル』の『フォース』に列国史に……」

「フウ、『ナショナル』の『フォース』、『ナショナル』の『フォース』と言えば、なかなか難^{むづか}しい書物だ、男子でも読^{よめ}ない者は幾程^{いくばく}

も有る。それを芳紀としも若くツてかつ婦人の身でいながら稽古してお出でなさる、感心な者だ。だからこの近辺じゃアこう言やア失敬のようだけれども、鳶とびが鷹たかとはあの事だと言ッて評判していますぜ。ソレ御覧、色狂いして親の顔に泥どろを塗ぬッても仕様がないうところを、お勢さんが出来が宜いばかりに叔母さんまで人に羨うらやまれる。ネ、何も足腰さす按るばかりが孝行じゃアない、親を人に善く言わせるのも孝行サ。だから全体なら叔母さんは喜んでいなくツちゃアならぬところを、それをまだ不足に思ッてとやこういうのは慾サ、慾が深過ぎるのサ」

「ナニ些ちとばかりなら人様しとさまに悪く言われても宜いいからもう些すこし優しくしてくれると宜いいんだけれども、邪慳じゃけんで親を親臭いとも思ッていないから悪にくくツて成りやアしません」

ト眼を細くして娘の方を顧視みかえる。こういう眺め方にらも有るもの

と見える。

「喜び叙ついでにもう一ツ喜んで下さい。我輩今日一等進みました」

「エ」

トお政は此方こなたを振向き、吃驚びつくりした様子で暫しばらく昇の顔を目守みつめて、

「御結構が有ツたの……へエエ……それはマア何してもお芽出度めでとう御座いました」

ト鄭重ていちょうに一礼して、さて改めて頭こうべを振揚げ、

「へー御結構が有ツたの……」

お勢もまた昇が「御結構が有ツた」と聞くと等しく吃驚した顔色かおつきをして些すこし顔を赧あからめた。咄々怪事とつとつもあるもので。

「一等お上あがなすツたと言うと、月給は」

「僅たった五円違いサ」

「オヤ五円違いだッて結構ですワ。こうッ今までが三十円だッたから五円殖えて……」

「何ですネー母親さん、他人の収入を……」

「マアサ五円殖えて三十五円、結構ですワ、結構でなくッてサ。あなた

貴君どうして今時高利貸したッて月三十五円取ろうと言うなア

容易な事こつちやア有りませんヨ……三十五円……どうしても働ら

き者は違もんッたもんだネー。だからこの娘ことも常じょうふだん不斷そう言ッて

ます事サ、アノー本田さんは何だと、内の文三なんや何かとは違ッ

てまだ若くッてお出いでなさるけれども、利口で氣働きらきが有ッ

て、如才はなしが無つやけくッて……」

「談話はなしも艶消つやけしにして貰もらいたいネ」

「艶じやア無い、真個ほんとにサ。如才はなしが無つやけくッてお世辞せしがよくッて

男振おとびも好けれども、唯物喰ものぐいの悪いわりのが可惜あつたらたま瑜きずに疵きずだッて、オ

ホホホホ」

「アハハハハ、貧乏人の質で上げ下げが怖ろしい」

「それはそうと、孰れ御結構振舞いが有りましたようネ。新富か

ネ、但しは市村かネ」

「何処へなりとも、但し負ぶで」

「オヤそれは難有くも何ともないこと」

トまた口を揃えて高笑い。

「それは戯談だがネ、芝居はマア芝居として、どうです、明後日
団子坂へ菊見という奴は」

「菊見、さようさネ、菊見にも依りけりサ。犬川じゃア、マア

願い下げだネ」

「其処にはまた異なる寸法も有ろうサ」

「笹の雪じゃアないかネ」

「まさか」

「真個ほんとに往きましようか」

「お出でなさいお出でなさい」

「お勢、お前もお出ででないか」

「菊見に」

「アア」

お勢は生得であるの出遊で好き、下地は好きなり御意ぎよいはよし、菊見もよおしすじょう

の催もよおしすじょう頗る妙だが、オイソレというも不見識と思ツたか、手

弱く辞退して直ちに同意してしまふ。十分ばかりを経て昇が立

歸ツた跡で、お政は独言ひとりごとのように、

「真個ほんとに本田さんは感心なもんだナ、未だま年齢としも若いのに三十五

円月給取るように成んなすつた。それから思うと内の文三なん

ざア盆暗ぼんくらの意久地なしだツちやアない、二十三にも成ツて親を

養^{すこ}すどこか自分の居^い所立^ど所にさえ迷^ま惑^ごてるんだ。なんぼ何だッ
て愛^{あい}想^そが尽^つきらア」

「だけれども本田さんは学問は出来ないようだワ」

「フム学問々々とお言いだけれども、立身出世すればこそ学問
だ。居^い所立^ど所に迷^ま惑^ごくようじゃア、些^ちとばかり書^ほ物が読^よめたッ
てねっから難^あ有味^{りが}がない」

「それは不運だから仕様がないワ」

トいう娘の顔をお政は熟^し々^け目^め守^もめて、

「お勢^{ほん}、真^ま個^ごにお前は文三と何にも約束した覚えはないかえ。

エ、有るなら有ると言っておしまい、隠^{かく}立^{した}をすると却^{かえ}てお前の為
にならないヨ」

「またあんな事を言ッて……昨^{きの}日^うあれ程そんな覚えは無いと言ッ
たのが母^お親^かさんには未^もだ解^からないの、エ、まだ解^からないの」

「チヨツ、また始まった。覚えが無いなら無いで好やアネ、何にもそんなに熱くならなくったって」

「だッて人をお疑りだものヲ」

暫らく談話が断絶れる、母親も娘も何か思案顔。

「母親さん、明後日は何を衣て行こうネ」

「何なりとも」

「エート、下着は何時ものアレにしてト、それから上着は何衣にし

ようかしら、やッぱり何時もの黄八丈にして置こうかしら……」

「もう一ツのお召縮緬の方にお為ヨ、彼方がお前にやア似合う

ヨ」

「デモあれは品が悪いものヲ」

「品が悪いってツたッて」

「アアこんな時にア洋服が有ると好のだけれどもナ……」

「働き者を亭主ていしに持つて、洋服などなんと拵こせえて貰うのサ」
トいう母親の顔をお勢はジツト目守めめて不審顔。

第二編

第七回 団子坂の観菊 上

日曜日は近頃が無い天下晴れ、風も穏かで塵も起たず、曆を繰
て見れば、旧曆で菊月初旬きくづきはじめという十一月二日の事ゆえ、物観遊山
には持て来いもつと云う日和ひより。

園田一家いっけの者は朝から観菊行きくみゆきの支度したくとりどり。晴衣はれぎの亘長ゆきたけを

氣にしてお勢のじれこみがお政の肝癪かんしゃくと成て、廻りの髪結の

来ようの遅いのがお鍋の落度となり、究竟はては万古の茶瓶きゆうすが生れ

も付かぬ欠口いぐちになるやら、架棚たなの挿鉢すりばちが独手ひとりでに駈出すやら、ヤツ

サモツサ捏返こねかえしている所へ生憎あやにくな来客、しかも名打なうての長尻ながつちりで、

アノ只今ただいまから団子坂へ参ろうと存じて、という言葉にまで力瘤ちからこぶを入れて見ても、まや薬ほども利きかず、平気で済まして便々とお神輿みこしを据すえていられる。そのじれッたさ、もどかしさ。それでも宜よくしたもので、案じるより産むが易く、客もその内に帰れば髪結も来る、ソコデ、ソレ支度も調い、十一時頃には家内も漸ようやく静まッて、折節には高笑がするようになった。

文三は拓落失路たくらくしつろの人、仲々もつ以て観菊などという空そらは無ない。それに昇のぼりは花で言え、今を春辺はるべと咲誇る桜の身、此方こつちは日蔭ひかげの枯尾花こわいばな、到頭どうせ楯突たてつく事が出来ぬ位なら打たせられに行くでも無いと、境界きようがいに随つれて僻ひがみを起し、一昨日おとつい昇のぼりに誘引さそわれた時既にキッパリ辞ことッて行かぬと決心したからは、人が騒さわごうが騒さわぐまいが隣家となりの疝氣せんきで関繫かけかまのない噺はなし、ズツト澄すしていられそうなのさて居ゐられぬ。嬉うれしそうに人のそわつくを見るに付け聞きくに付け、

またしても昨日きのうの我が憶出おもいだされて、五月雨さみだれ頃の空と湿める、嘆息もする、面白くも無い。

や面白からぬ。文三には昨日お勢が「貴君あなたもお出いでなさるか」ト尋ねた時、行かぬと答えたら、「へーそうですか」ト平気で澄まして落着払ッていたのが面白からぬ。文三の心持では、成ろう事なら、行けと勧めて貰もらいたかつた。それでも尚なお強情を張ッて行かなければ、「貴君と御一所でなきやア私も罷よしましう」とか何とか言て貰もらいたかつた……

「シカシこりやア嫉妬しつとじゃアない……」

と不図何か憶出おもいだして我と我に分疏いいわけを言て見たが、まだ何処どこかくすぐられるようで……不安心で。

行くも厭いやなり留とどまるも厭いとなりで、気がムシヤクシヤとして肝癢かんよくが起る。誰と云て取留めた相手は無いが腹が立つ。何か火急

の要事が有るようであつた無きようで、無きようであつた有るよう
で、立てもいられず坐すわてもいられず、どうしてもこうしても落
着かれない。

落着かれぬままに文三がチト読書でもしたら紛れようかと、
書函ほんぼこの書物を手当放題に取出して読みかけて見たが、いッかな
争いな紛れる事でない。小むずかしい面相かおづきをして書物と疾視競にらめくらし
たところはまづ宜よかつたが、開卷第一章の一行目を反覆読過して見て
も、更にその意義を解げし得ない。その癖下坐舗したざしきでのお勢の笑声は
意地悪くも善く聞えて、一回聞けば則ち耳の洞の主人と成なりつて、
暫しばらくは立去らぬ。舌鼓したづみを打ちながら文三が腹立しように書物
を擲却ほうりだして、腹立しように机に靠着もたれつて、腹立しように頬杖ほおづえを
つき、腹立しように何処ともなく凝視みつめて……フトまた起直よみがえつ
て、蘇生よみがえつたような顔色をして、

「モシ罷めになッたら……」

ト取外とりはずして言いかけて倏忽たちまちハツと心附き、周章あわてて口を鉗つぐんで、

吃驚びっくりして、狼狽ろうばいして、遂ついに憤然やつぎとなッて、「畜生」と言いざま

拳こぶしを振挙おどげて我と我を威おどして見たが、悪戯いたずらな虫奴めは心の底でま

だ……やはり……

シカシ生憎あいにく故障も無かつたと見えて昇は一時頃こそでに参くろッた。今

日は故意わざと日本服で、茶の糸織こそでの一ツ小袖くろなこに黒七子の羽織、帯

も何か乙なもので、相変りらず立りゆうとした服飾こしらえ。梯子段はしごだんを踏轟ふみとどろかし

て上ッて来て、挨拶あいさつをもせずいきなりに突如おおあぐらまず大胡坐。我鼻を視るの

かと怪しまれる程の下眼を遣ッて文三の顔を視ながら、

「どうした、土左どざ的宜がんしよくしくという顔色だぜだぜ」

「些すこし頭痛がするから」

「そうか、尼御台あまみだいに油を取られたのでもなかつたか、アハハハ

ハ」

チヨイと云う事からしてまず氣に障わる。文三も佛然とはしたが、其^{そこ}処は内氣だけに何とも言わなかつた。

「どうだ、どうしても往^いかんか」

「まずよそう」

「剛情だな……ゴジヨウだからお出^{いで}なさいよじや無いか、アハハハ。ト独りで笑うほかまず仕様が無い、何を云ツても先様にやお通じなしだ、アハハハ」

戯言^{ぎげん}とも附かず罵詈^{ばり}とも附かぬ曖昧^{あいまい}なお饒舌^{しゃべり}に暫らく時刻を

移していると、忽ち^{たちま}梯子段の下にお勢の声がして、

「本田さん」

「何です」

「アノ車が参りましたから、よろしくば」

「出懸けましょう」

「それではお早く」

「チヨイとお勢さん」

「ハイ」

「貴嬢あなたと合乗あいのりなら行ても宜いいというのがお一方出来たが承知です

かネ」

返答は無く、唯ただバタバタと駆出す足音がした。

「アハハハ、何にも言わずに逃出すなぞは未だまだしおらしいネ」

ト言つたのが文三への挨拶で、昇はそのまま起上たちあがッて二階を

降りて往つた。跡を目送りみおくながら文三が、さもさも苦々しそう

に口の中うちで、

「馬鹿奴め……」

ト言つたその声が未だ中有ちゅううに徘徊さまよッている内に、フト今年の

春向島へ觀桜に往つた時のお勢の姿を憶出し、どういふ心計か
 蹶然と起上り、キヨロキヨロと四辺を環視して火入に眼を注
 たが、おもひ直おして旧の座になおり、また苦々しそうに、

「馬鹿奴」

これは自ら叱責つたので。

午後はチト風が出たがますます上天氣、殊には日曜と云うので
 団子坂近傍は花觀る人が道去り敢えぬばかり。イヤ出たぞ出た
 ぞ、束髪も出た島田も出た、銀杏返しも出た丸鬘も出た、蝶々
 鬘も出たおケシも出た。○○《なになに》会幹事、実は古猫の怪
 という、鍋島騷動を生で見るような「マダム」某も出た。芥子の
 実ほどの眇少しい智慧を両足に打込んで、飛だり跳たりを夢に
 まで見る「ミス」某も出た。お乳母も出たお嬰婢も出た。ぞろ
 りとした半元服、一夫数妻論の未だ行われる証拠に上りそうな

婦人も出た。イヤ出たぞ出たぞ、坊主も出た散髪も出た、五分刈も出たチョン髷も出た。天帝の愛子、運命の寵臣、人の中の人、男の中の男と世の人の尊重の的、健羨の府となる昔所謂お役人様、今の所謂官員さま、後の世になれば社会の公僕とか何とか名告るべき方々も出た。商賈も出た負販の徒も出た。人の横面を打曲げるが主義で、身を忘れ家を忘れて拘留の辱に逢いそうな毛臍暴出しの政治家も出た。猫も出た杓子も出た。人様々の顔の相好、おもいおもいの結髪風姿、聞覩に聚まる衣香襟影は紛然雑然として千態万状、ナツカなか以て一々枚挙するに遑あらずで、それにこの辺は道幅が狭隘ので尚お一段と雑沓する。そのまた中を合乗で乗切る心無し奴も有難の君が代に、その日活計の土地の者が摺附木の函を張りながら、往來の花観る人のみ眺めて遂に真の花を観ずにしまいかと、おもえば実に浮世

はいろいろさまざま。

さてまた団子坂の景況は、例の招牌かんぼんから釣込む植木屋は家々の招きの旗幟はたを翩翻へんぽんと金風あきかぜに飄ひるがえし、木戸々々で客を呼ぶ声はかれこれからみ合みだれあつて乱合みだれあつて、入我我入にゆうががにゆうでメツチャラコ、唯逆上のぼせあがつた木戸番の口だらけにした面かおが見える而已のみで、何時いつ見ても変へつた事もなし。中へ這入はいッて見てもやはりその通りで。

一体全体菊というものは、一本ひともとの淋さびしきにもあれ千本八千本の賑にぎわしきにもあれ、自然のままに生茂おいしげッてこそ見所の有ろう者を、それをこの辺の菊のようにこう無残むざむざ々々と作られては、興あそも明日あすも覚めるてや。百草の花のとじめと律義りちぎにも衆芳しゅほうに後おくれて折角咲いた黄菊白菊を、何でも御座れに寄集よじめて小兒騙欺こどもだましの木偶でくべべべの衣裳いそう、洗張せんぢやうりに糊のりが過へぎてか何処どこへ触ふッてもゴソゴソとしてギゴチ無なさそうな風姿ふうなりも、小言こごいッて観る者は千人に一人

か二人、十人が十人まず花より団子と思詰めた顔色、去りとはまた苦々しい。ト何処かの隠居が、菊細工を觀ながら愚痴を滴したと思食せ。おぼしめ（看官）何だ、つまらない。

閑話不題。ふうだい

轟然と飛ぶが如くに駆来ツた二台の腕車がピツタリと停止る。げうぜん
車を下りる男女三人の者はお馴染染の昇とお勢母子の者で。くるま
おやこ

昇の服装は前文にある通り。みなり

お政は鼠微塵の糸織の一ツ小袖に黒の唐襦子の丸帶、襦袢の半襟も黒縮緬に金糸でパラリと縫の入ツた奴か何かで、まず氣の利いた服飾。はんえり
ねずみじん
ちりめん
い
こしらえ
とうじゆす
じゆばん

お勢は黄八丈の一ツ小袖に藍鼠金入襦珍の丸帶、勿論下にはお定りの緋縮緬の等身襦袢、此奴も金糸で縫の入ツた水浅黄縮緬の半襟をかけた奴で、帶上はアレハ時色縮緬、統括めて云え。さだま
ひぢりめん
ついたけ
こいつ
い
ときいろ
ひつくる
みずあさぎ
もちろん

ばまず上品なこしらえ。

シカシ人足ひとあしの留まるは衣裳附いしやうづけよりは寧ろむしその態度で、髪も例いつも

の束髪ながら何とか結びとかいう手のこんだ束ね方で、大形の

薔薇ばら

はなかんざし

を挿さし、

本化粧は自然そむに背くとか云ッて薄化粧の

清楚せいそ

な作り、風格ぼうしん丰神共に優美で。

「色だ、ナニ夫婦サ」と法界ほうかいりんぎ愀氣の岡焼連が目引袖引取々に評

判するを漏聞ごとく毎に、昇は得々として機嫌きげん顔、これ見よがしに

おやこ

母子の者を其処そこ茲処ここと植木屋を引廻かまわしながらも片時と黙して

はいない。人の傍聞かたえぎきするにも関かまわず例の無駄むだ口をのべつに並べ

立てた。

お勢も今日は取分け氣の晴れた面相かおつきで、宛然さながら籠を出た小鳥の如

くに、言葉は勿論

歩風あるき身体からだのこなしにまで何処いともなく活々いきいきと

したところが有ッて冴さが見える。昇の無駄おを聞ては可笑かしがッ

て絶えず笑うが、それもそうで、強ち昇の言事が可笑しいからではなく、黙ッていても自然と可笑しいからそれで笑うようである。おのず

お政は菊細工には甚だ冷淡なもので、唯「綺麗だことネー」ト

云ツてツラリと見亘すのみ。みわたさして眼を注める様子もないが、

その代りお勢と同年配頃の娘に逢えば、叮嚀にその顔貌風姿を

研窮する。まず最初に容貌を視て、次に衣服を視て、帯を視て

爪端を視て、行過ぎてからズーと後姿を一瞥して、また帯を視

て髪を視て、その跡でチョイとお勢を横目で視て、そして澄ましてしまふ。妙な癖も有れば有るもので。

昇等三人の者は最後に坂下の植木屋へ立寄ツて、次第々々に見物して、とある小舎の前に立止ツた。其処に飾付て在ツた木像の顔が文三の欠伸をした面相に酷く肖ているとか昇の云ツたのが可笑しいといつて、お勢が嬌面に袖を加えて、勾欄におッ被

さッて笑い出したので、傍かたわらに鵠立たたずんでいた書生てい体の男が、俄にわかに此方こちらを振向ふむかいて愕然がくぜんとして眼鏡越めがねしにお勢みづを凝視みつめた。「みッともないよ」ト母親ははですら小言こごを言ッた位で。

漸しだくの事で笑いを留とどめて、お勢みづがまだ莞爾にこにこ々々と微笑わいごのこびり付つている貌かおを擡もたげて傍そばを視みると、昇はは居ゐない。「オヤ」ト云ッてキヨロキヨロと四辺あたりを環視みまわして、お勢みづは忽まち真面目まじめな貌かおをした。

と見れば後あとの小舎こやの前で、昇はが磬折けいせつという風ふうに腰こしを屈かがめて、其処たつずんに鵠立たたずんでいた洋装紳士せうさうしんしの背せなかに向ッて荐しきりに礼拝らいはいしていた。されども紳士しんしは一向心附ようしんかぬ容子ようすで、尚あちらお彼方あちらを向むかいて鵠立たたずんでいたが、再三再四からじぎ虚辞儀きよじぎをさしてから、漸しだくにムシヤクシヤと頬鬚ほおひげの生弘はえひろツた氣きむずかしい貌かおを此方こちらへ振向ふむかけて、昇はの貌かおを眺ながめ、莞然にっこりともせず帽子ぼうしも被かッたままで唯鷹揚おうように点頭てんとうすると、昇

は忽ち平身低頭、何事をか喃々くどくどと言いながら続けさまに二ツ三ツ礼拝した。

紳士の随伴つれと見える兩人ふたりの婦人は、一人は今様おはつとか称となえる突兀とつこつたる大丸髷、今一人は落雪ぼつとりとした妙齡の束髪頭、孰いずれも水際みずぎわの立つ玉揃ぞろい、面相かおつきといい風姿ふうつきといい、どうも姉妹きょうだいらしく見える。昇はまず丸髷の婦人に一礼して次に束髪きようだいの令嬢に及ぶと、令嬢は狼狽あわてて卒方そつぼうを向いて礼を返えして、サツト顔を赧あからめた。

暫らく立在たたずんでの談話はなし、間あわいが隔離かけはなれているに四辺あたりが騒さわがしいの

でその言事は能く解よらないが、なにしても昇は絶えず口角くちもとに微笑を含んで、折節に手真似をしながら何事をか喋々ちようちようと饒舌り立たてていた。その内に、何か可笑しな事でも言ッたと見えて、紳士は俄然大口がぜんを開あいて肩を揺ゆッてハッハッと笑い出し、丸髷の

夫人も口頭くちもとに皺しわを寄せて笑い出し、束髪しゅふの令嬢れいじやうもまた莞爾にっこり笑いかけて、急に袖で口を掩おおひ、額越ひたえごしに昇の貌を眺めて眼元で笑つた。身に余る面目に昇は得々として満面に笑いを含ませ、紳士の笑い罷やむを待ってまた何か饒舌にやうぜつり出した。お勢母子おやこの待っている事は全く忘れてゐるらしい。

お勢は紳士にも貴婦人にも眼を注とめぬ代り、束髪しゅふの令嬢れいじやうを穴の開く程目守みづめて一心不乱、傍目わきめを触らなかつた、呼吸いきをも吻くつかなかつた、母親が物を言懸けても返答もしなかつた。

その内に紳士の一行がドロドロと此方こちらを指して来る容子いそがを見て、お政は茫然ぼうぜんとしていたお勢の袖を匆いそがわしく曳揺ひきうごかして疾歩あしばやに外面おもてへ立出で、路傍みちばたに鵠たかづん在で待合まちあわせていると、暫らくして昇しりえも紳士の後に随しりえつて出て参り、木戸口の所でまた更に小腰ここしを屈かがめて皆それぞれに分袂わかれの挨拶あいさつ、叮嚀いんぎんに慇懃いんぎんに喋々しやしく陳のべ立

てて、さて別れて独り此方へ両三歩来て、フト何か憶出したよ
うな面相をしてキヨロキヨロと四辺を環視あたりみまわした。

「本田さん、此処だよ」

ト云うお政の声を聞付けて、昇は急足あしばやに傍へ歩寄そばあゆみより、

「や大おおきにお待遠う」

「今の方は」

「アレガ課長です」

ト云つてどうした理由わけか莞爾にこにこ々と笑い、

「今日来る筈はずじゃ無かつたんだが……」

「アノ丸髻いに結いった方は、あれは夫人おくさまですか」

「そうです」

「束髪の方は」

「アレですか、ありや……」

ト言かけて後を振返つて見て、

「妻君の妹です……内で見ただよりか余程別嬪よつぽどべっぴんに見える」

「別嬪も別嬪だけれども、好いお服飾こしらえですことネー」

「ナニ今日はあるなのお嬢様然とした風をしているけれども、家うちにいる時は疎末そまつな衣服なりで、侍婢こしもとがわりに使われているのです」

「学問は出来ますか」

ト突然お勢が尋ねたので、昇は愕然として、

「エ学問……出来るという噺はなしも聞かんが……それとも出来るかしらん。この間から課長の所に来ているのだから、我輩もまだ深くは情実ようすを知らないのです」

ト聞くとお勢は忽ち眼元に冷笑の氣を含ませて、振反つて、
今将まさに坂の半腹ちゆうとの植木屋へ這入ろうとする令嬢の後姿を目送みおくつて、
チヨイと我帶なを撫でてそしてズーと澄ましてしまつた。

坂下^{さかした}に待たせて置た車に乗ツて三人の者はこれより上野の方へと参ツた。

車に乗ツてからお政がお勢に向い、

「お勢、お前も今のお娘さん^このように、本化粧にして来りやア宜かツたのにネー」

「厭サ^{いや}、あんな本化粧は」

「オヤ何故^{なぜ}え」

「だツて厭味ツたらしいもの」

「ナニお前十代の内なら秋毫^{ちつと}も厭味なこたア有りやしないわネ。

アノ方が幾程^{いくら}宜か知れない、引立^{ひたち}が好くツて」

「フンそんなに宜きやア慈母^{おつか}さんお倣^しなさいな。人が厭だといふものを好々^{いよいよ}ツて、可笑しな慈母さんだよ」

「好と思ツたから唯好じや無いかと云ツたばかりだアネ、それ

をそんな事いうツて真個ほんとにこの娘は可笑しな娘だよ」

お勢はもはや弁難攻撃は不必要と認めたと見えて、何とも言わずに黙してしまつた。それからと云うものは、塞ぐふさのでもなく萎れるしおのでもなく、唯何となく沈んでしまつて、母親が再び談話はなしの墜緒ついでを紹つづうと試みても相手にもならず、どうも乙な塩梅あんばいであつたが、シカシ上野公園に來着いた頃にはまた口をきき出して、また旧もとのお勢に立戻もどつた。

上野公園の秋景色、彼方かなた此方こなたにむらむらと立駢ならぶ老松奇檜ろうしやうきかいは、

柯えだを交じえ葉を折重ねて鬱蒼うつそうとして翠みどりも深く、観る者の心まで

が蒼あおく染りそうなに引替え、桜杏桃李おうきやうとうりの雜木は、老木稚木おいきわかぎも押な

べて一様に枯葉勝な立姿、見るからがまずみすばらしい。遠近おちこち

の木間隠れこのまに立つ山茶花さざんかの一本は、枝一杯に花を持ッてはいれ

ど、瑣々けいけいとして友欲し氣に見える。楓もみじは既に紅葉したのも有り、

まだしないのも有る。鳥の音も時節に連れて哀れに聞える、淋しい……ソラ風が吹通る、一重桜は戦栗をして病葉を震い落し、芝生の上に散布いた落葉は魂の有る如くに立上りて、友葉を追つて舞い歩き、フトまた云合せたように一斉にパラパラと伏つてしまふ。満眸の秋色蕭条として却々春のきおいに似るべくも無いが、シカシさびた眺望で、また一種の趣味が有る。団子坂へ行く者皈る者が茲処で落合うので、処々に人影が見える、若い女の笑い動揺めく声も聞える。

お勢が散歩したいと云い出したので、三人の者は教育博物館の前で車を降りて、ブラブラ行きながら、石橋を渡りて動物園の前へ出で、車夫には「先へ往つて観音堂の下辺に待ッていろ」ト命じて其処から車に離れ、真直に行ッて、矗立千尺、空を摩でそうな杉の樹立の間を通抜けて、東照宮の側面へ出た。

折しも其処の裏門より Let us go on (行、い、く) ト「日本の」と

冠詞の付く英語を叫びながらピヨツコリ飛出した者が有る。と

見れば軍艦羅紗ランヤの洋服を着て、金鍍金の徽章きんめつき きしやうを附けた大黒帽子

を仰向けざまに被かぶつた、年の頃十四歳ばかりの、栗虫のように

肥ふとつた少年で、同遊つれと見える同じ服装でたちの少年を顧みて、

「ダガ何か食くいたくなつたなア」

「食たくなつた」

「食たくなつてもか……」

ト愚痴うッぽく言懸けて、フトお政と顔を視合わせ、

「ヤ……」

「オヤ勇いさみが……」

ト云う間もなく少年は駈出かけして来て、狼狽あわてて昇に三ツ四ツ

辞儀をして、サツと赤面して、

「母親さん」
おつか

「何を狼狽あわてて いるんだネー」
四

「家へ往うちつたら……鍋に聞いたたら、文さんばツかだッてツたから、僕ア……それだから……」

「お前、モウ試験は済んだのかえ」

「ア済んだ」

「どうだッたえ」

「そんな事よりか、些すこし用が有るから……母親さん……」

ト心有氣こころありげに母親の顔を凝視みつめた。

「用が有るなら茲ここ処でお言いな」

少年は横目で昇の顔をジロリと視て、

「チヨイと此方こつちへ来ておくれッてば」

「フンお前の用なら大抵知れたもんだ、また『小遣いが無い』だ

ろう」

「ナニそんな事ことぢやない」

ト云ツてまた昇の顔を横眼で視て、サツと赤面して、調子外れな高笑いをして、無理矢理に母親を引張ツて、彼方あちらの杉の樹の下もとへ連れて参ツた。

昇とお勢はブラブラと歩き出して、来るともなく往ゆくともなしに宮の背後うしろに出た。折柄おりから四時頃の事とて日影も大分傾いた塩梅、立駢たちならんだ樹立の影は古廟こびようの築牆ついでを斑まだらに染めて、不忍しのばずの池水は大魚うろこの鱗かなぞのように燦めく。ツイ眼下に、瓦葺かわらぶきの大家根おおやねの翼然よくぜんとして峙そばだツているのが視下される。アレハ大方馬見所ばけんじよの家根で、土手に隠れて形は見えないが車馬の声が轆々ろくろくとして聞える。

お勢は大榎おおえのきの根方ねがたの所で立止まり、翳さしていた蝙蝠傘こうもりがさをつぼ

めてズイと一通り四辺^{あたり}を見^み亘^{わた}し、嫣然^{えんぜん}一笑しながら昇の顔を窺^{のぞ}き込んで、唐突に、

「先刻^{さつき}の方は余程別嬪^{よっぽど}でしたネー」

「エ、先刻の方とは」

「ソラ、課長さんの令妹とか仰^{おつ}しやツた」

「ウー誰の事かと思ツたら……そうですね、随分別嬪ですネ」

「そして家で視たよりか美しくツてネ。それだもんだから……」

ネ……貴君^{あなた}もネ……」

ト眼元と口元に一杯笑いを溜^ためてジツと昇の貌を凝視^{みつ}めて、さてオホオホと吹溢^{ふぎこ}ぼした。

「アツ失策^{しま}ツた、不意を討たれた。やどうもおそろ感心、手は

二本きりかと思ツたらこれだもの、油断^{すき}も隙もなりやしない」

「それにあの嬢^{かた}も、オホオホ何だと見えて、お辞儀する度^{たんび}に顔

を真赤にして、オホホホホ

「トたたみかけて意地目つけるネ、よろしい、覚えてお出でなさい」

「だッて実際の事ですもの」

「シカシあの娘が幾程美しいと云ッたッても、何処かの人にやア……とても……」

「アラ、よう御座んすよ」

「だッて実際の事ですもの」

「オホホホ直ぐ復讐して」

「真に戯談は除けて……」

ト言懸ける折しも、官員風の男が十ばかりになる女の子の手を引いて来蒐ツて、兩人の容子を不思議そうにジロジロ視ながら行過ぎてしまッた。昇は再び言葉を続いで、

「戲談は除けて、幾程美しいと云ツたッてあんな娘にやア、先方さきもそうだろうけれども此方こっちも氣が無い」

「氣が無いから横目なんぞ遣いはなさらなかつたのネー」

「マアサお聞きなさい。あの娘ばかりには限らない、どんな美しいのを視たッても氣移りはしない。我輩には『アイドル』（本尊）が一人有るから」

「オヤそう、それはお芽出度う」

「ところが一向お芽出度く無い事サ、所謂鮑いわゆるあわびの片思いでネ。此方こっちはその『アイドル』の顔が視たいばかりで、氣まりの悪いのも堪こらえて毎日々々その家へ遊びに往けば、先方さきじゃ五月蠅うるさいと云ツたような顔をして口も碌々ろくろくきかない」

トあじな眼付をしてお勢の貌をジツと凝視みつめた。その意を曉さとツたか曉らないか、お勢は唯ニツコリして、

「厭な『アイドル』ですネ、オホホホ」

「シカシ考えて見れば此方が無理サ、先方には隠然亭主と云つたような者が有るのだから。それに……」

「モウ何時でしょう」

「それに想を懸けるは宜く無い宜く無いと思いながら、因果とまた思ひ断る事が出来ない。この頃じや夢にまで見る」

「オヤ厭だ……モウ些と彼地の方へ行て見ようじや有りませんか」

「漸くの思いで一所に物觀遊山に出るとまでは漕付は漕付だけれども、それもほんの一所に歩く而已で、慈母さんと云うものが始終傍に附ていて見れば思ふ様に談話もならず」

「慈母さんと云えば何を做ているんだらうネー」

ト背後を振返ツて觀た。

「偶^{たまたま}好機會が有ッて言出せば、その通りとぼけておしまいなさるし、考えて見ればつまらんナ」

ト愚痴ッぽくいッた。

「厭ですよ、そんな戯談を仰しやッちや」

ト云ッてお勢が莞爾^{にこにこ}々々と笑いながら此方^{こちら}を振向いて視て、些^{すこ}し真面目^{まじめ}な顔をした。昇^しは萎^{しお}れ返ッている。

「戯談と聞かれちや填^うまらない、こう言出すまでにはどの位苦しんだと思いなさる」

ト昇は歎息した。お勢は眼^め睛を地上に注いで、默然^{もくねん}として一語をも吐かなかつた。

「こう言出したと云ッて、何にも貴嬢^{あなた}に義理を欠^かして私^{わたし}の望^{ぞみ}を遂げようと云うのじゃア無いが、唯貴嬢の口から僅^{たつた}一言、『断念^{あきら}めろ』と云ッて戴^{いた}きたい。そうすりやア私もそれを力に断然思

い切ッて、今日ぎりでもう貴嬢にもお眼に懸るまい……ネーお勢さん」

お勢は尚お默然としていて返答をしない。

「お勢さん」

ト云いながら昇が項うなだ垂れていた首を振揚げてジッとお勢の顔を窺のぞき込めば、お勢は周章狼狽どぎまぎしてサッと顔を赧あからめ、漸く聞えるか聞えぬ程の小声で、

「虚言うそばかり」

ト云ッて全く差俯向さしうつむいてしまつた。

「アハハハハハ」

ト突如だしぬけに昇が轟然ごうぜんと一大笑を発したので、お勢は吃驚びっくりして顔を振揚げて視て、

「オヤ厭だ……アラ厭だ……憎らしい本田さんだネー、真面目

くさッて人を威^{おど}かして……」

ト云ッて悔しそうにでもなく恨めしそうにでもなく、謂^いわば
氣まりが悪るそうに莞爾^{にっこり}笑ッた。

「お巫山戯^{ふざけ}でない」

ト云う声^{こつぜんうしろ}が忽然背後に聞えたのでお勢が喫驚^{びっくり}して振返ッて視
ると、母親が帯の間へ紙入^{はさ}を挿みながら来る。

「大分談判^{だいぶん}が難^{むずかし}かつたと見えますネ」

「大きにお待ち遠うさま」

ト云ッてお勢の顔を見て、

「お前、どうしたんだえ、顔を真赤にして」

ト咎^{とが}められてお勢は尚お顔を赤くして、

「オヤそう、歩いたら暖^{あつた}かに成ッたもんだから……」

「マア本田さん聞ておくんなさい、真個^{ほんと}にあの児の錢遣^{ぜにづか}いの荒い

のにも困りますよ。此間こないだネ試験の始まる前に来て、一円前借して持つてツたんですよ。それを十日も経たない内にもう使用つかッちまつて、またくれろサ。宿所うちならこだわりを附けてやるんだけれども……」

「あんな事を云ツて虚言うそですよ、慈母おつかさんが小遣いを遣りたがるのよ、オホホホ」

ト無理に押出したような高笑をした。

「黙ッてお出で、お前の知ツた事ことぢやない……こだわりを附けて遣るんだけれども、途中だからと思ッてネ黙ッて五十銭出して遣ッたら、それんばかじや足らないから一円くれろと云うんですよ。そうそうは方図が無いと思ッてどうしても遣らなかつたらネ、不承々々に五十銭取ッてしまッてネ、それからまた今度は、明後日あさってお友達同志寄ッて飛鳥山あすかやまで饅飩会うどんかいとかを……」

「オホホホ」

この度は真に可笑したびそうにお勢が笑い出した。昇は荐りに点頭しき うなずいて、

「運動会」

「そのうんどうかいとか蕎麦そば買いとかをするからもう五十銭くれろツてネ、明日取りにお出でと云ツても何と云ツても聞かずに持つて往きましたがネ。それも宜いが、憎い事を云うじや有りませんか。私が『明日お出でか』ト聞いたらネ、『これさえ貰えばもう用は無い、また無くなつてから行く』ツて……」

「慈母さん、書生の運動会なら会費と云ツても高が十銭か二十銭位なもんですよ」

「エ、十銭か二十銭……オヤそれじゃ三十銭足駄を履かれたんだよ……」

ト云ツて昇の顔を凝視^{みつ}めた。とぼけた顔であつたと見えて、
昇もお勢も同時に

「オホホホ」

「アハハハ」

第八回 団子坂の観菊 下

お勢^{ぼし}母子^{ぼし}の者の出向いた後^{のち}、文三^{ぶんぞう}は漸^{ようや}く些^{すこ}し沈着^{おちつい}て、徒然^{つくねん}と
机^{ぼとり}の辺^{うずくま}に蹲踞^{うずくま}ツたまま腕^くを拱^{あご}み頤^{えり}を襟^{えり}に埋めて懊惱^{おうのう}たる物思
いに沈んだ。

どうも氣に懸る、お勢の事が氣に懸る。こんな区々たる事は
苦に病むだけが損だ損だと思ひながら、ツイどうも氣に懸つて
ならぬ。

凡そ相愛する二ツの心は、一体分身で孤立する者でもなく、
 又仕ようとて出来るものでもない。故に一方の心が歡ぶ時には
 他方の心も共に歡び、一方の心が悲しむ時には他方の心も共に
 悲しみ、一方の心が樂しむ時には他方の心も共に樂み、一方の
 心が苦しむ時には他方の心も共に苦しみ、嬉笑にも相感じ怒罵
 にも相感じ、愉快適悦、不平煩悶にも相感じ、氣が氣に通じ心
 が心を喚起し決して齟齬し扞格する者で無い、と今日が日まで
 文三は思つていたに、今文三の痛痒をお勢の感ぜぬはどうした
 ものだらう。

どうも氣が知れぬ、文三には平氣で澄ましているお勢の心意
 氣が呑込めぬ。

若し相愛していなければ、文三に親しんでから、お勢が言葉遣
 いを改め起居動作を変え、蓮葉を罷めて優に艶しく女性らしく

成る筈はずもなし、又今年の夏いつせき一夕の情話に、我へだてから隔の関を取除とりのけ、乙な眼遣めづかいをし鹿匆ぞんざいな言葉を遣つて、折節に物思いわれいをする理由もない。

若し相愛あいあいしていなければ、婚姻こんいんの相談が有つた時、お勢が戯談じようだんに托辞かこつけてそれとなく文三の肚はらを探る筈もなし、また叔母もんぢやくと悶着もんぢやくをした時、他人同前どうぜんの文三を庇護かばつて真実の母親と抗論する理由もない。

「イヤ妄想ぼうそうじゃ無い、おれを思つてゐるに違ちがひない……ガ……そのまた思つてゐるお勢が、そのまた死なば同穴と心に誓つた形の影が、そのまた共に感じ共に思慮し共に呼吸生息する身の片割が、従兄弟いとこなり親友なり未来の……夫ともなる文三の鬱々うつうつとして楽まぬのを余所よそに見て、行かぬと云つても勧めもせず、平氣で澄しらぬまして不知顔しかおでゐる而已のみか、文三と意氣そりが合あわねばこそ自家じぶん

も常居つねから嫌いだと云ッている昇如きらき者に伴われて、物觀遊山
に出懸けて行く……

「解らないナ、どうしても解らん」

解らぬままに文三が、想像弁別の両刀を執ッて、種々さまざまにして
この氣懸りなお勢の冷淡を解剖して見るに、何か物が有ッてそ
の中うちに籠こもつてゐるように思われる、イヤ籠こもつてゐるに相違ない。
が、何だか地体は更に解らぬ。依てさらに又勇氣を振起して唯
この一点に注意を集め、傍目わきめも触らさず一心不乱に茲処ここを先途せんど
と解剖して見るが、歌人の所謂いわゆる箒木はきぎで有りとは見えて、どうも解
らぬ。文三は徐々そろそろジレ出した。スルト悪戯いたずらな妄想奴ぼうそうめが野次馬にせものに
飛出して来て、アアでは無いかこうでは無いかと、真赤な贗物にせもの、
宛事あてことも無い邪推つかを掴ませる。贗物だ邪推だと必ずしも見透かし
てゐるでもなく、又必ずしも居ないでもなく、ウカウカと文三

が掴つかませられるままに掴つかんで、あえだり揉もんだり円めたり、また引延しゅつたいばしたりして骨を折て事實ものにしてしまい、今目前にその事が出来しゅつたいしたように足搔あがきつ踎もがきつ四苦八苦の苦楚くるしみを嘗なめ、然しかる後フト正眼せいがんを得てさて観かんずれば、何の事だ、皆夢だ邪推だ取越苦勞だ。腹立紛れに贗物を取とつて骨灰微塵こつばいみじんと打砕き、ホツと一息吐つき敢えずまた穿鑿せんざくに取懸り、また贗物を掴つかませられてまた事實ものにしてまた打砕き、打砕いてはまた掴つかみ、掴つかんではまた打砕くと、何時いつまで経たつても果はてしも附つかず、始終同じ所に而已のみ止とつていて、前へも進しりぞまず後へも退しりぞかぬ。そして退いて能よく視みれば、尚お何物だか冷淡うちの中に在もうろうつて朦朧として見透かされる。

文三ホツと精を尽かした。今はもう進んで穿鑿する氣力も竭つき勇氣も沮はげんだ。乃すなわち眼を閉じ頭顱かしらを抱そえて其処そこへ横に倒れたまま、五官を馬鹿にし七情の守まもりを解いて、是非も曲直も榮辱も窮

達も叔母もお勢も我の吾たるをも何もかも忘れてしまつて、一瞬間なりともこの苦惱この煩悶を解脱れようと力め、良暫らくの間というものは身動もせず息氣をも吐かず死人の如くに成つていたが、倏忽勃然と跳起きて、

「もしや本田に……」

ト言い懸けて敢て言い詰めず、宛然何か搜索でもするようになつて、愕然として四辺を環視した。

それにしてもこの疑念は何処から生じたもので有ろう。天より

降つたか地より沸いたか、抑もまた文三の癖みから出た蜃楼海市

か、忽然として生じて思わずして来り、恍々惚々としてその来所

を知るに由しなしいえど、何にもせよ、あれ程までに足掻き

つ蹴きつして穿鑿しても解らなかつた所謂冷淡中の一物を、今

訳もなく造作もなくツイチョット突留めたらしい心持がして、

文三覺えず身の毛が弥立よだった。

とは云うものの心持は未だ事實でない。事實から出た心持で無ければウカとは信を措おき難い。依て今までのお勢の挙動そぶりを憶出おもいだして熟思審察して見るに、さらにそんな気色けしきは見えない。成程お勢はまだ若い、血氣も未だ定らない、志操あるいも或は根強く有るまい。が、梅檀せんたんは二葉ふたばから馨こうばしく、蛇じゃは一寸にして人を吞む氣が有る。文三の眼より見る時はお勢は所謂女豪じよごうの萌芽めばえだ。見識も高尚こうしようで氣韻も高く、洒々落々として愛すべく尊たつとぶべき少女であつて見れば、仮令よし道德を飾物にする偽君子ぎくんし、磊落らいらくを粧よそおう似而非せ豪傑には、或は欺あざむかれもしよう迷いもしようが、昇如きあんな卑屈な輕薄な犬畜生にも劣つた奴に、怪我にも迷う筈はない。さればこそ常から文三には信切でも昇には冷淡で、文三をば推尊すしていても昇をば輕蔑けいべつしている。相愛は相敬の隣に棲すむ、輕

蔑しつゝ迷うというは、我輩人間の能く了解し得る事でない。

「シテ見れば大丈夫かしら……ガ……」

トまた引懸りが有る、まだ決徹さつぱりしない。文三周章あわててブルブルと首を振って見たが、それでも未だ散りそうにもしない。この「ガ」奴めが、藕糸ぐうし孔中蚊睫こうちゆうぶんしょうの間にも這入はいりそうなの、眇然びようぜんたる一小「ガ」奴めが、眼の中の星うちよりも邪魔になり、地平線に現われた砲車一片の雲よりも畏おそろしい。

然り畏ろしい。この「ガ」の先にはどんな不了簡ふりようけんが竊ひそまつてゐるかも知れぬと思えば、文三畏ろしい。物にならぬ内に一刻も早く散らしてしまいたい。シカシ散らしてしまいたいと思うほど尚お散り難かたる。しかも時刻の移るに随したがつて枝雲は出来る、砲車雲は拡ひろがる、今にも一大颶風ぐうふうが吹起りそうに見える。気が気で無い……

国許もとより郵便が参った。散らし葉には崛くつき竟きやうの物が参った。飢

えた蒼鷹くまだかが小鳥つかを抓つかむのはこんな塩梅あんばいで有ろうかと思う程に文

三が手紙ひつつかを引ひ拵づめんで、封目ふうめを押切おッて、故意わざと声高こゝろだかに読み出した

が、中頃なかつらに至いたッて……フト黙もくして考えて……また読よ出して……

また黙もくして……また考えて……遂ついに天を仰あがいで轟然ごうぜんと一大笑を

発はした。何を云うかと思えば、

「お勢おれを疑うたがうなんぞと云いッて我われも余程よつほどどうかしている、アハハ

ハハ。帰かへッて来たら全然すつかり咄はなして笑わらッてしまおう、お勢おれを疑うたがうな

んぞと云いッて、アハハハハハ」

この最後の大笑で砲車雲ほうしやうんは全く打払うち払いッたが、その代り手紙は

何なにを読よんだののだか皆無判かいむわらない。

ハッはと氣を取直きとおして文三まじめが真面目まじめに成なッて落着おちいて、さて

再び母の手紙ははを読よんで見ると、免職めんしやくを知らせた手紙てがみのその返辞へんじ

で、老耄としよつての悪い耳、愚痴を溢こぼしたり薄命を歎なげいたりしそんなもの、文ふみの面おもてを見ればそんなけびらいは露程もなく、何もかも因縁いんねんずくと断念あきらめた思切りのよい文言もんごん。シカシさすがに心細い
と見えて、返えす書がきに、跡で憶出して書加えたように薄墨で、
こう申せばそなたはお笑い被成候なされそうろうかは存じ不申候もうさずえども、手
紙の着きし当日より一日も早く旧もとのようにお成り被成候なされよう
に○○《どこそこ》のお祖師さまへ茶断ちやだちして願掛け致しおり候
まま、そなたもその積りにて油断なく御奉公口をお尋ね被成度なされたく
念じ※まいらせそち。

文三は手紙を下に措おいて、默然もくぜんとして腕を拱くんだ。

叔母あいそですら愛想を尽かすに、親なればこそ子なればこそ、ふ
がいないと云ツて愚痴をも溢さず茶断までして子を励ます、そ

の親心を汲分くみわけては難有ありがた涙に暮れそうなもの、トサ文三自分にも思ツたが、どうしたものか感涙も流れず、唯何なにとなくお勢の帰りが待遠しい。

「畜生、慈母おつかさんがこれ程までに思ツて下さるのに、お勢なんぞの事を……不孝極まる」

ト熱氣やつきとして自ら叱責しかツて、お勢の貌かおを視るまでは外出そとでなどを做したく無いが、故意わざと意地悪く、

「これから往つて頼んで来よう」

ト口に言つて、「お勢の帰つて来ない内に」ト内心で言足あししをして、憤々おんおんしながら晚餐ばんさんを喫して宿所たちいを立出で、疾足あしばやに番町ばんちょうへ参つて知己を尋ねた。

知己と云うは石田某なにがしと云つて某学校の英語の教師で、文三とは師弟の間繫あいだがら、曾かつて某省へ奉職したのも実はこの男の周旋で。

この男は曾て英国に留学した事が有るとかで英語は一通り出来る。当人の嘸はなしに抛よれば彼地あちらでは経済学を修めて随分上出来の方で有つたと云う事で、帰朝後も経済学で立派に押廻おしこわされるところでは有るが、少々仔細しさい有ッて当分の内（七八年来の当分の内で）、唯の英語の教師をしていると云う事で。

英国の学者社会に多人数たにんず知己が有る中に、かの有名の「ハルベルト・スペンセル」とも曾て半面の識が有るが、シカシもう七八年も以前の事ゆえ、今面会したら恐らくは互に面忘おもわすれをしているだろうと云う、これも当人の嘸はなしで。

ともかくもさすがは留学しただけ有りて、英国の事情、即ちすなわじようか上下議院こうそうの宏壯ロンドンふ、竜動ロンドンふ府市街の繁昌、車馬の華美、料理の猷立、衣服杖履じようり、日用諸雑品の名称等、凡て閭巷猥瑣すべりようかいさの事には能く通曉よつうぎようしていて、骨牌かるたを弄もてあそぶ事も出来、紅茶の好惡よしあしを飲別ける事も出

来、指頭で紙卷烟草シガレットを製する事も出来、片手で鼻汁はなを拭くふ事も出来るが、その代り日本の事情は皆無解らない。

日本の事情は皆無解らないが当人は一向苦にしない。啻ただ苦にしないのみならず、凡そ一切の事一切の物を「日本の」トさえ冠詞が附けば則ち鼻息すなわでフムと吹飛ばしてしまつて、そして平気で済ましてゐる。

まだ中年の癖に、この男はあだかも老人の如くに過去の追想の而已で生活している。人に逢あえば必ず先まず留学していた頃の手柄てがら嘶はなを咄し出す。尤もこれを封じてはさらに談話はなしの出来ない男で。

知己の者はこの男の事を種々さまざまに評判する。或は「懶惰らんだだ」ト云い、或は「鉄面皮てつめんぴだ」ト云い、或は「自惚うぬぼれだ」ト云い、或は「法螺吹ほらふきだ」と云う。この最後の説だけには新知故交統括ひっくるめて

総起立、薬種屋の丁稚^{でつち}が熱に浮かされたように「そうだ」トいう。

「シカシ、毒が無くツて宜^い」と誰だか評した者が有ツたが、これは極めて確評で、恐らくは毒が無いから懶惰で鉄面皮で自惚で法螺を吹くので、ト云ツたら或は「イヤ懶惰で鉄面皮で自惚で法螺を吹くから、それで毒が無いように見えるのだ」ト云う説も出ようが、ともかくも文三はそう信じているので。

尋ねて見ると幸い在宿^{すなわ}、乃ち面会して委細を咄して依頼する
と、「よろしい承知した」ト手輕な挨拶^{あいさつ}。文三は肚^{はら}の裏^{うち}で、「毒がないから安請合をするが、その代り身を入れて周旋はしてくれまい」と思ッて私^{ひそか}に嘆息した。

「これが英国だと君一人位どうでもなるんだが、日本だからいかん。我輩こう見えても英国にいた頃は随分知己が有つたもの

だ。まず『タイムス』新聞の社員で某サ、それから……」

ト記憶に存した知己の名を一々言い立てての嘸、屢々聞いて耳にタコが入ッている程では有るが、イエそのお嘸ならもう承りましたとも言兼ねて、文三も始めて聞くような面相かおつきをして耳を借している。そのジレッツタサもどかしさ、モジモジしながらトウトウ二時間ばかりというもの無間断のべつに受けさせられた。その受賃という訳でも有るまいが帰り際きわになつて、

「新聞の翻訳物が有るから周旋しよう。明後日午後あさつてに来給え、取寄せて置こう」

トいうから文三は喜びを述べた。

「フン新聞か……日本の新聞は英国の新聞から見りや全まるで小児こどもの新聞だ、見られたものじゃない……」

文三は狼狽あわてて告別わかれの挨拶を做直しなおして匆々そこそこに戸外へ立出で、

ホツと一息溜息ためいきを吐ついた。

早くお勢に逢あいたい、早くつまらぬ心配をした事を咄はなしてしまいたい、早く心の清い所を見せてやりたい、ト一心に思詰めながら文三がいそいそ帰宅して見るとお勢はいない。お鍋に聞けば、一旦いったん帰かへつてまた入湯に往いつたという。文三些すこし拍子ひょうし抜けがした。

居間へ戻かへつて燈火を点じ、臥ねて見たり起きて見たり、立て見たり坐まつて見たりして、今か今かと文三が一刻千秋の思いをして頸くびを延のばして待構まちえていると、頓やがて格子戸こうしどの開く音がして、縁側えんがわに優しい声がして、梯子はしご段を上る跣音あしおとがして、お勢が目前まへに現あわれた。と見れば常つやさえ艶やかな緑の黒髪は、水気すいきを含んで天鷲びろうど絨をも欺あそむくばかり、玉と透徹はだえる肌は塩引の色を帯びて、眼元めもとにはホンノリと紅こうを潮ちようした塩梅あんばい、何処いたやらが悪戯いたずららしく見

えるが、ニツコリとした口元の塩らしいところを見ては是非を論ずる^{いとま}違がない。文三は何もかも忘れてしまつて、だらしも無くニタニタと笑いながら、

「お暇^{かえん}なさい。どうでした団子坂は」

「非常に雑沓^{ざつとう}しましたよ、お天氣が宜^いのに日曜だつたもんだから」

ト言いながら膝^{ひざ}から先へベツタリ坐つて、お勢は両手で嬌面^{かお}を掩^{おお}い、

「アアせつない、厭^{いや}だと云うのに本田さんが無理にお酒を飲まして」

「母親^{おつか}さんは」

ト文三が尋ねた、お勢が何を言つたのだからトント解らないよ
うで。

「お湯から買物に回ッて……そしてネ自家じふんもモウ好加減に酔てる癖に、私が飲めないと云うとネ、助すけて遣やるッてガブガブそれこそ牛飲ぎゅういんしたもんだから、究竟しまいにはグデングデんに酔てしまッて」

ト聞いて文三は満面の笑を半引込なかばませた。

「それからネ、私共を家へ送込んでから、仕様が無いんですものヲ、巫山戯ふざけて巫山戯て。それに慈母おつかさんも悪いのよ、今夜だけは大眼に看着置くなんぞッて云うもんだから好氣いいきになつて尚お巫山戯て……オホホホ」

ト思出し笑をして、

「真個ほんとに失敬な人だよ」

文三は全く笑を引込ませてしまッて腹立しそうに、

「そりやさぞ面白かつたでしょう」

ト云ツて顔を顰めたが、お勢はさらに気が附かぬ様子。暫らく默然として何か考えていたが、頓てまた思出し笑をして、

「真個に失敬な人だよ」

つまらぬ心配をした事を全然咄して、快よく一笑に付して、心の清いところを見せて、お勢に……お勢に……感信させて、そして自家も安心しようという文三の胸算用は、ここに至ツてガラリ外れた。昇が酒を強いた、飲めぬと云ツたら助けた、何でも無い事。送り込んでから巫山戯た……道学先生に聞かせたら巫山戯させて置くのが悪いと云うかも知れぬが、シカシこれとても酒の上の事、一時の戯ならそう立腹する訳にもいかなかつたろう。要するにお勢の嘸に於て深く咎むべき節も無い。がシカシ文三には気に喰わぬ、お勢の言様が気に喰わぬ。「昇如き犬畜生にも劣ツた奴の事を、そう嬉しそうに『本田さん本田さ

ん』ト噂うわさをしなくても宜さそうなものだ」トおもえばまた不平に成ッて、また面白く無くなッて、またお勢の心意氣が吞のみこ込めなく成ッた。文三は差俯向さしうつむいたまま黙然もくねんとして考えている。

「何をそんなに塞ふさいでお出でなさるの」

「何も塞いじゃいません」

「そう、私はまたお留とめさん（大方老母が文三の嫁に欲しいと云ッた娘の名で）とかの事を懷出おもいだして、それで塞いでお出でなさるのかと思ッたら、オホホホ」

文三は愕然としてお勢の貌を暫らく凝視みつめて、ホッと溜息を吐いた。

「オホホホ溜息をして。やつぱり当ッたんでしよう、ネそうでしょう、オホホホ。当ッたもんだから黙ッてしまッて」

「そんな氣樂じや有りません。今日母の所から郵便が来たから

讀よんで見れば、私のこういう身に成なつたを心配して、この頃じや茶断して願掛けしているそうだし……」

「茶断して、慈母さんが、オホオホ。慈母さんもまだ旧弊だ事ネー」

文三はジロリとお勢しりめを尻眼しりめに懸けて、恨めしそうに、

「貴嬢あなたにや可笑おかしいか知らんが私わたくしにやさつぱり可笑しく無い。

薄命とは云いながら私の身が定きまらんばかりで、老耄としよツた母にまで心配掛けるかと思えば、随分……耐たまらない。それに慈母さん
も……」

「また何とか云いましたか」

「イヤ何とも仰おつしやりはしないが、アレ以来始終きま気不味まずい顔ばかりしていて打解うちけては下くだらんシ……それに……それに……」

「貴嬢あなたも」ト口頭くちさきまで出たが、どうも鉄面皮あつかましく嫉妬じんすけも言いか

ねて思い返してしまい、

「ともかくも一日も早く身を定めなければ成らぬと思ツて、今も石田の所へ往ツて頼んでは来ましたが、シカシこれとても宛にはならんシ、実に……弱りました。唯私一人苦しむのなら何でもないが、私の身が定らぬ為めに『方々』が我他彼此するの
で誠に困る」

ト萎れ返ツた。

「そうですネー」

ト今まで冴えに冴えていたお勢もトウトウ引込まれて、共に氣をめいらしてしまい、暫らくの間黙然としてつまらぬものでいたが、やがて小さな欠伸あくびをして、

「アア寐ねむく成ツた、ドレもう往ツて寐ましよう。お休みなさいまし」

ト会釈えしやくをして起上たちあがッてフト立止まり、

「アそうだッけ……文さん、貴君はアノ一課長さんの令妹おいもとしを御存知」

「知りません」

「そう、今日ネ、団子坂でお眼に懸とッたの。年齢は十六七でネ、随分別品べっぴんは……別品だッたけれども、束髪おしろいの癖にヘゲル程白粉おしろいを施つけて……薄化粧なら宜けれども、あんなに施つけちやア厭味はなしこッたらしくッてネ……オヤ好気なもんだ、また嘶はなしこ込んでいる積りだと見えるよ。お休みなさいまし」

ト再び会釈してお勢は二階を降りてしまッた。

縁側で唯今帰ッたばかりの母親に出逢であッた。

「お勢」

「エ」

「エじゃないよ、またお前二階へ上ツてたネ」

また始まつたと云ツたような面相かおつきをして、お勢は返答をもせずそのまゝ子舎へやへ這入はいッてしまツた。

さて子舎へ這入ッてからお勢は手疾てばやく寐衣ねまきに着替えて床へ這入り、暫らくの間臥ねながら今日の新聞を覽みていたが……フト新聞を取落した。寐入みひらツたのかと思えばそうでもなく、眼はパツチリ視開みひらいてゐる、その癖静まり返ッていて身動きをもしない。

やがて、

「何故なぜアア不活潑ふかつぱつだろう」

ト口へ出して考おもえて、フト両足を踏延りようそくばして莞然ふみの笑い、狼狽あわてて起揚おきあがッて枕頭まくらもとの洋燈ランプを吹消してしまひ、枕に就つくいて二三度なにかえ臥反ねかえりを打ツたかと思うと間も無くスヤスヤと寐入ねまツた。

第九回 すわらぬ肚はら

今日は十一月四日、打続いての快晴で空は余残なごりなく晴渡はらッてはいるが、憂愁うれいある身の心は曇る。文三は朝から一室ひとまに垂籠たれこめて、独り屈托くつたくの頭を疾やましていた。実は昨日朝飯きのうあさはんの時、文三が叔母むかつに對て、一昨日教師を番町に訪おとというて身の振方を依頼して来た趣るるを縷る々咄はなし出したが、叔母は木然ぼくぜんとして情寡すくなき者の如く、「へー」ト余所事よそごとに聞流きましていてさらに取合あわなかつた、それが未だいまに氣になつて氣になつてならないので。

一時頃いさみに勇が帰宅したとて遊びに参まゐつた。浮世の塩を踏まぬ身の氣散じさ、腕押、坐相撲すわりずもうの噺はなし、体操、音楽うたの噂うわさ、取締しととの議論ぎろん、賄方まかない征討いんたうの義拳ぎけんから、試験の模様、落第らくだいの分疏いわけに至るまで、凡そ偶然およに懷むねに浮うんだ事は、月足らずの水子思想みずこ、まだ完成ましまつ

ていなかろうがどうだろうがそんな事に頓着とんじゃくはない、訥弁とつべんながらやたら無性に陳ならべ立てて返答などは更に聞いていぬ。文三も最初こそ相手にも成ていたれ、遂ついにはホツと精を尽かしてしまい、勇には随意に空気を鼓動さして置いて、自分は自分で余所事よそごとを、と云たところがお勢の上や身の成行で、熟思黙想しながら、折々まはず間外まはずれな溜息ためいき噛交かみまぜの返答をしていると、フトお勢が階子段はしごだんの上のぼッて来て、中途から貌かお而已のみを差出して、

「勇」

「だから僕ぼかア議論して遣やッたんだ。ダツテ君、失敬じゃないか。

『ボート』の順番を『クラッス』（級）の順番で……」

「勇と云えば。お前の耳は木くらげかい」

「だから何だと云ッてるじゃ無いか」

「縫ほころびを縫てやるからシャツをお脱ぎとよ」

勇はシャツを脱ぎながら、

「『クラッス』の順番で定めると云うんだもの、『ボート』の順番を『クラッス』の順番で定めちゃア、僕ア何だと思ふな、僕ア失敬だと思ふな。だつて君、『ボート』は……」

「さッさとお脱ぎで無いかネー、人が待っているじや無いか」

「そんなに急がなくッたッて宜やアネ、失敬な」

「誰方が失敬だ……アアあんな事言ッたら尚お故意と愚頭々々しているよ。チョッ、ジレッタイネー、早々としないと姉さん知らないから宜い」

「そんな事云うなら Bridle path と云う字を知てるか、I was at our uncles ト云う事知てるか、I will keep your……」

「チヨイとお黙り……」

ト口早に制して、お勢が耳を聳てて何か聞済まして、忽ち満

面に笑わらいを含んでさも嬉うれしそうに、

「必きつと本田さんだよ」

ト言いながら狼狽あわてて梯子段はしごだんを駈下かけおりてしまった。

「オイオイ姉さん、シャツを持ってツとくれッてば……オイ……

ヤ失敬な、モウ往いっちまった。渠奴あいつ近頃生意氣になつていかん。

先刻さつきも僕ア喧嘩けんかして遣おんだ。婦人おんなの癖に園田勢子と云う名刺なふだ

を拵こしらえるツてツたから、お勢ツ子で沢山だツてツたら、非常

に憤おこツたツけ」

「アハハハハ」

ト今まで黙想もくそうしていた文三が突然無茶苦茶に高笑しだを做出した

が、勿論もちろん秋毫すこしも可笑おかしそうでは無かつた。シカシ少年の議論家

は称讃しょうさんされたのかと思ツたと見えて、

「お勢ツ子で沢山だ、婦人の癖にいかん、生意氣で」

ト云いながら得々として二階を降りて往た。跡で文三は暫らしばくの間また腕を拱くんで黙想していたが、フト何か憶出したようおもいだな面相をして、起上たちあッて羽織だけを着替えて、帽子を片手に二階を降りた。

奥の間の障子を開けて見ると、果して昇が遊あそびに来ていた。しかも傲然ごうぜんと火鉢ひばちの側かたわらに大胡坐おおあぐらをかいていた。その傍そばにお勢がベツタリ坐すッて、何かツベコベと端手はしたなく囀さえずッていた。少年の議論家は素肌すはだの上に上衣うわぎを羽織はッて、仔細しさいらしく首を傾かしげて、ふかし甘薯いもの皮を剥むいてい、お政は囂々ぎょうぎょうしく針箱を前に控えて、覚束おぼつかない手振りでシャツの綻ほころびを縫合ぬいわせていた。

文三の顔を視みると、昇が顔で電光いなびかりを光らせた、蓋けだし挨拶あいさつの積つもりで。お勢もまた後方うしろを振反みッて顧みは顧たが、「誰かと思ッたら」ト云わぬばかりの索然とした情味の無い面相かおつきをして、急にまた

彼方あちらを向いてしまつて、

「真個ほんとう」

ト云いながら、首を傾げてチヨイと昇の顔を凝視みつめた光景ようす。

「真個さ」

「虚言うそだと聴きませんよ」

アノ筋の解らない他人の談話はなしと云う者は、聞いて余り快くは

無いもので。

「チヨイと番町まで」ト文三が叔母えしやくに会釈えしやくをして起上たちあがろうとす

ると、昇が、

「オイ内海、些すこし嘸なが有る」

「些ちと急ぐから……」

「此方こつちも急ぐんだ」

文三はグツト視下ろす、昇は視上げる、眼と眼にらみあを疾視合あわし

た、何だか異おつな塩梅あんばいで。それでも文三は渋々ながら坐ざしき舗へ這入はいッて坐まに着いた。

「他の事でも無いんだが」

ト昇のぼがイヤに冷笑しながら咄はなし出した。スルトお政はフト針仕事の手を止とどめて不思議そうに昇のぼの貌かおを凝視みつめた。

「今日役所での評判に、この間免職に成た者の中うちで二三人復職する者が出来るだろうと云う事だ。そう云やア課長の談話に些し思当る事も有るから、或あるいは実説だろうかと思ふんだ。ところで我輩考えて見るに、君が免職になつたので叔母さんは勿論お勢さんも……」

ト云懸しりめけてお勢を尻眼しりめに懸けてニヤリと笑った。お勢はお勢で可笑おかしく下唇したくちびるを突出して、ムツと口を結んで、額ひたえで昇のぼを疾視にらみ付けた。イヤ疾視し付ける真似まねをした。

「お勢さんも非常に心配してお出いでなさるシ、かつ君だッてもナニモ遊あすんでいて食えんと云う身分でも有るまいシするから、若し復職が出来ればこの上も無いと云ツたようなもんだらう。ソコデ若し果してそうならば、宜よろしく人の定きまらぬ内に課長に吞の込みませて置く可べしだ。がシカシ君の事ことだから今更直付じかづけに往いき難にくいとも思うなら、我輩一臂びの力を仮しても宜しい、橋渡はしわたしをしても宜しいが、どうだお思食ぼしめしは」

「それは御信切……難有ありがたいが……」

ト言懸おのずかけて文三は黙してしまった。迷惑は匿かくしても匿し切れない、自おのずから顔色に現がんしよくている。モジ付く文三の光景ようすを視て昇は早くもそれと悟さとツたか、

「厭いやかね、ナニ厭いやなものを無理に頼んで周旋しようと云うんじや無いから、そりやどうとも君の随意サ、ダガシカシ……瘦やせ我慢

なら大抵にして置く方が宜かろうぜ」

文三は血相を変えた……

「そんな事仰おつしやるが無駄むだだよ」

トお政が横合から嘴くちばしを容いれた。

「内の文さんはグツと氣位が立上つてお出でだから、そんな卑劣しれつな事ア出来ないッサ」

「ハハアそうかネ、それは至極お立派な事ことた。ヤこれは飛とんだ失敬を申し上げました、アハハハ」

ト聞くと等しく文三は真青まつざおに成つて、慄然ふるふると震え出して、拳こぶしを握くつて齒を喰切くいしばつて、昇の半面をグツと疾視にらみ付けて、今にもむしやぶり付きそうな顔色をした……が、ハツと心を取直して、

「エへへへへ」

何となく席がしらけた。誰も口をきかない。勇がふかし甘薯いも

を頬張ほおばツて、右の頬を脹ふくらませながら、モツケな顔をして文三を凝視みつめた。お勢もまた不思議そうに文三を凝視みつめた。

「お勢が顔を視ている……このままでおめおめおめおめと退しりぞくは残念、

何か云ツて遣りたい、何かコウ品の好いい悪口雑言、一言ごんの下もとに

昇きしを氣死きしさせる程の事を云ツて、アノ鼻頭はなづらをヒツ擦こすツて、アノ

者面しやつらを赧あからめて……」トあせるばかりで凄すこみ文句は以上見附か

らず、そしてお勢を視れば、尚なお文三の顔を凝視みつめている……

文三は周章狼狽どぎまぎとした……

「モウそ……それツきりかネ」

ト覚えず取外して云つて、我ながら我音声の変びつくりツてゐるのに吃驚びっくりした。

「何が」

またやられた。蒼あおざめた顔をサツと赧あからめて文三が、

「用事は……」

「ナニ用事……ウー用事か、用事と云うから判らない……さよう、これッきりだ」

モウ席にも堪えかねる。黙礼するや否や文三が蹶然起上ッて坐舗を出て二三歩すると、後の方でドツと口を揃えて高笑いをする声がした。文三また慄然と震えてまた蒼ざめて、口惜しうに奥の間の方を睨詰めたまま、暫らくの間釘付けに逢ッたように立在でいたが、やがてまた氣を取直おして悄悄と出て参った。

が文三無念で残念で口惜しくて、堪え切れぬ憤怒の氣がカツとばかりに激昂したのをば無理無体に圧着けたために、発しこじれて内攻して胸中に磅礴鬱積する、胸板が張裂ける、腸が断絶れる。

無念々々、文三は耻辱ちじよくを取った。ツイ近属ちかづろと云って二三日前

までは、官等に些ちとばかりに高下は有るとも同じ一課の局員で、
優まさり劣ひりが無ければ押しも押されもしなかつた昇いぬじもの如き犬自物の
為めに耻辱を取った、然しかり耻辱を取った。シカシ何の遺恨が有つ
て、如何いかなる原因が有つて。

想おもうに文三、昇にこそ怨うらみはあれ、昇に怨みられる覚えは更に
ない。然るに昇は何の道理も無く何の理由も無く、あたかも人
を辱はずかしめる特権でも有もつているように、文三を土芥どかいの如くに蔑視みくた
て、犬猫の如くに待遇とりあつかつて、剩あまつさえ叔母やお勢の居る前で嘲笑ちやうしやう
した、侮辱した。

復職する者が有ると云う役所の評判も、課長の言葉に思当る
事が有ると云うも、昇の云う事なら宛あてにはならぬ。仮令よしそれ等
は実説にもしろ、人の痛いのなら百年も我慢すると云う昇が、

自家じふんの利益を賭物かけものにして他人の為めに周旋しようと云う、まずそれから吞込めぬ。

仮りに一步を譲ほうゆうツて、全く朋友の信実心からあの様な事を言出したとしたところで、それならそれで言様いいようが有る。それを昇は、官途を離れて零丁孤苦れいていこく、みすばらしい身に成なツたと云ツて文三を見括みくびツて、失敬にも無礼にも、復職が出来たらこの上が無なからうト云ツた。

それも宜しいが、課長は昇の為に課長なら、文三の為に、もまた課長だ。それを昇は、あだかも自家うぬひとり一個の課長のよう、に、課長々とひけらかして、頼みもせぬに「一臂ひとひの力を仮してやろう、橋渡しをしてやろう」と云ツた。

疑いも無く昇は、課長の信用、三文不通の信用、主人が奴僕ぬぼくに措く如き信用を得ていると云ツて、それを鼻に掛けてゐるに

相違ない。それも己一個で鼻に掛けて、己一個でひけらかして、己と己が愚を披露している分の事なら空家で棒を振ったばかり、当り触りが無ければ文三も黙ッてもいよう、立腹もすまいが、その三文信用を挟んで人に臨んで、人を輕蔑して、人を嘲弄して、人を侮辱するに至ッては文三腹に据えかねる。

面と向ッて図大柄に、「瘦我慢なら大抵にしろ」と昇は云ツた。瘦我慢々々々、誰が瘦我慢していると云ツた、また何を瘦我慢していると云ツた。

俗務をおツつくねて、課長の顔色を承けて、強て笑ツたり諛言を呈したり、四ン這に這廻わツたり、乞食にも劣る真似をして漸くの事で三十五円の慈恵金に有附いた……それが何処が榮譽になる。頼まれても文三にはそんな卑屈な真似は出来ぬ。それを昇は、お政如き愚痴無知の婦人に持長じられると云ツて、我程

働き者はないと自惚うぬぼれてしまい、しかも廉潔れんけつな心から文三が手を下げて頼まぬと云えば、嫉ねたみ妬そねみから負惜おくそくしみをすると臆測おくそくを逞たくましうして、人も有ろうにお勢の前で、

「瘦我慢なら大抵にしろ」

口惜しい、腹が立つ。余よの事はともかくも、お勢の目前で辱められたのが口惜しい。

「しかも辱められるままに辱められていて、手出てだしもしなかつた」

ト何処おつでか異おつな声が聞えた。

「手出がならなかつたのだ、手出がなくても為得しえなかつたのじゃない」

ト文三憤然やつきとして分疏いいわけを為出しだした。

「我おれだッて男児だ、虫も有る胆気も有る。昇なまなんぞは蚊蜻蛉かとんぼとも思ッていぬが、シカシあの時懣なまじ此方こつちから手出をしては益々

向うの思う坪に陥はまッて玩弄がんろうされるばかりだシ、かつ婦人の前でも有あッたから、為難しにくい我慢まんもして遣やッたんだ」

トは知らずしてお勢せいが、伶俐れいりに見えても未惚おぼ女の事ことなら、蟻ありとも螻けらとも糞中ふんちゆうの蛆うじとも云いようのない人非人、利たの為ためにならば人糞じんふんをさえ嘗なめかねぬ廉耻れんち知らず、昇のぼ如ごとき者の為ために文三が嘲笑あざわらされたり玩弄がんろうされたり侮辱おとしされたりしても手出てでをもせずおめおめおめおめとして退しりぞいたのを視みて、或あるいは不甲斐ふがいない意久地いこちが無ないと思おもいはしなかつたか……仮令よしお勢せいは何とも思おもわぬにしろ、文三はお勢せいの手前面目てまへめいない、耻はづかしい……

「ト云いうも昇のぼ、貴様きさまから起たッた事ことだぞ、ウヌどうするか見みやがれ」

ト憤然やつきとして文三が拳こぶしを握にぎッて齒くいしを喰切しばッて、ハツタとばかりに疾視にらみ付つけた。疾視にらみ付つけられた者は通りすがりの巡査しんさで、巡

查は立止ッて不思議そうに文三の背長せたけを眼分量に見積ッていたが、それでも何とも言わずにまた彼方あちらの方へと巡行して往ッた。

愕然がくぜんとして文三が、夢の覚めたような面相かおつきをしてキヨロキヨ

ロと四辺あたりを環視みまわして見れば、何時いつの間にか靖国神社やすくにの華表とりいざわ際

に鵠立たたずんでいる。考えて見ると、成程まないたばし俎橋を渡ッて九段坂を上ッ

た覚えが微かすかに残ッている。

乃ち社内へ進入すなわッて、左手の方の杪枯うらがれた桜の樹の植込みの

間へ這入ッて、両手を背後に合わせながら、顔を顰しかめて其処そこ此処

と徘徊うろつき出した。蓋しけだ、尋ねようと云う石田の宿所は後門うらもんを抜

ければツイ其処では有るが、何分にも胸に燃す修羅苦羅しゅらくらの火の

手さかんが盛なので、暫らく散歩して余熱ほとばりを冷ます積りで。

「シカシ考えて見ればお勢も恨みだ」

ト文三が徘徊うろつきながら愚痴を溢こぼし出した。

「現在自分の……我が、本田のような畜生に辱められるのを傍観していながら、悔しそうな顔もしなかつた……平気で人の顔を視ていた……」

「しかも立際に一所に成つて高笑いをした」ト無慈悲な記憶が
用捨なく言足いいたしをした。

「そうだ高笑いをした……シテ見れば弥々心変りがしているかしらん……」

ト思いながら文三が力無さそうに、とある桜の樹の下に据え付けてあつたペンキ塗りの腰掛へ腰を掛ける、と云うよりは寧ろ尻餅しりもちを搗ついた。暫らくの間は腕を拱くんで、頤あごを襟えりに埋めて、身動きをもせずしずまに静り返しずまツて黙想していたが、忽ちたちまフツと首を振揚げて、

「ヒョットしたらお勢に愛想あいそを尽かさして……そして自家じぶんの方に

靡^なびかそうと思ツて……それで故意^{わざ}と我^{われ}を……お勢のいる処で
我を……そういえばアノ言様^{いいさま}、アノ……お勢を視た眼付き……
コ、コ、コリヤこのままには措^つけん……」

ト云ツて文三は血相を変えて突起^{つったちあが}上ツた。

がどうしたもので有ろう。

何かコウ非常な手段を用いて、非常な豪胆を示して、「文三は
男児だ、虫も胆氣もこの通り有る、今まで何と言われても笑ツて
済ましていたのはな、全く恢量^{かいりょう}大度だからだぞ、無氣力だから
では無いぞ」ト口で言わんでも行為^{ぎようい}で見付^{みせつ}けて、昇^たの胆^{たん}を褫^{うば}ツ
て、叔母^{ねふり}の睡^ねを覚^さまして、若し愛想を尽かしているならばお勢
の信用をも買戻して、そして……そして……自分も実に胆氣が
有ると……確信して見たいが、どうしたもので有ろう。

思うさま言ツて言ツて言いまくツて、そして断然絶交する……

イヤイヤ昇も仲々口強馬、舌戦は文三の得策でない。と云ツてまさか腕力に訴える事も出来ず、

「ハテどうしてくれよう」

ト殆んど口へ出して云いながら、文三がまた旧の腰掛に尻餅を搗いて熟々と考込んだまま、一時間ばかりと云うものは静まり返ッていて身動きをもしなかつた。

「オイ内海君」

ト云う声が頭上に響いて、誰だか肩を叩く者が有る。吃驚し

て文三がフツと貌を振揚げて見ると、手摺れて垢光りに光ツた

洋服、しかも二三カ所手癢を負うた奴を着た壮年の男が、余程

酩酊していると見えて、鼻持のならぬ程の熟柿臭い香をさせな

がら、何時の間にか目前に突立ッていた。これは旧と同僚で有ツ

た山口某という男で、第一回にチョイト噂をして置いたアノ山

口と同人で、やはり踏外し連の一人。

「や誰かと思ッたら一別以来だネ」

「ハハハ一別以来か」

「大分御機嫌ごきげんのようだネ」

「然り御機嫌だ。シカシ酒でも飲まんじやー堪たまらん。アレ以来今日で五日になるが、毎日酒浸しだ」

ト云ッてその証拠立の爲めにか、胸で妙な間投詞を發して聞かせた。

「何故なぜまたそう Despairデスペヤを起したもんだネ」

「Despair じやー無いが、シカシ君面白く無いじやーないか。何等の不都合が有ッて我々共を追出したんだろう、また何等の取得が有ッてあんな庸劣やくぜうな奴ばかりを撰えらんで残したのだらう、その理由が聞いて見たいネ」

ト真黒に成ツてまくし立てた。その貌を見て、傍そばを通りすがつた黒衣の園丁らしい男が冷笑した。文三は些すこし気まりが悪くなり出した。

「君もそうだが、僕だツても事務にかけちゃー……」

「些はなし小さいな声で咄たまし給え、人に聞える」

ト気を附けられて俄にわかに声を低めて、

「事務に懸あえけちやこう云やア可笑おかしいけれども、跡に残ツた奴等あえに敢て多くは譲らん積りだ。そうじゃないか」

「そうとも」

「そうだろう」

ト乗地のりじに成ツて、

「然るに唯ただ一種事務外の事務を勉強しないと云ツて我々共を追出した、面白く無いじゃないか」

「面白く無いけれども、シカシ幾程いくら云ツても仕様が無いサ」

「仕様が無いけれども面白く無いじゃないか」

「トキニ、本田の云事だから宛にはならんが、復職する者が二人出来るだろうと云う事だが、君はそんな評判を聞いたか」

「イヤ聞かない。へー復職する者が二三人」

「二三人」

山口は俄に口を鉗つぐんで何か黙考していたが、やがてスコシ絶望やけぎみ気味で、

「復職する者が有ツても僕じゃ無い、僕はいかん、課長に憎まれているからもう駄目だ」

ト云ツてまた暫らく黙考して、

「本田は一等上ツたと云うじゃないか」

「そうだそうだ」

「どうしても事務外の事務の巧たくみなものは違ちがったものだネ、僕のような愚直なものにはとてもアノ真似は出来ない」

「誰にも出来ない」

「奴の事だからさぞ得意でいるだろうネ」

「得意も宜いけれども、人に対むかッて失敬な事を云うから腹が立つ」

ト云ッてしまッてからアア悪い事を云ッたと気が附いたが、モウ取返しは附かない。

「エ失敬な事を、どんな事をどんな事を」

「エ、ナニ些し……」

「どんな事を」

「ナニネ、本田が今日僕に或人の所へ往ッてお髯ひげの塵ちりを払はわな
いかと云ッたから、失敬な事を云うと思ッてピツタリ跳はね付つけて

やッたら、瘦我慢と云わんばかりに云やアがッた」

「それで君、黙ッていたか」

ト山口は憤然として眼睛ひとみを据えて、文三の貌を凝視みつめた。

「余程よっぽどやッつけて遣ろうかと思ッたけれども、シカシあんな奴

の云う事を取上げるも大人気おとなげないト思ッて、赦ゆるして置いてやッた」

「そ、そ、それだから不可いかん、そう君は内気だから不可」

ト苦々しそうに冷笑あざわらツたかと思うと、忽ちまた憤然として文

三の貌を疾視にらんで、

「僕なら直ぐその場でブン打なぐッてしまふ」

「打なぐろうと思えば訳は無いけれども、シカシそんな疎暴そぼうな事

も出来ない」

「疎暴だッて関かまわんサ、あんな奴やつは時々打なぐッてやらんと癖に

なッていかん。君だから何だけれども、僕なら直ぐブン打ッて

しまう」

文三は黙してしまつてもはや弁駁べんぱくをしなかつたが、暫らくして、

「トキニ君は、何だと云つて此方こつちの方へ来たのだ」

山口は俄かに何か思い出したような面相かおづきをして、

「アそうだッけ……一番町に親類が有るから、この勢でこれから其処へ往つて金を借りて来ようと云うのだ。それじゃこれで別れよう、些ちと遊びに遣つて来給え。失敬」

ト自己おのが云う事だけを饒舌しゃべり立てて、人の挨拶あいさつは耳にも懸けず急歩あしばやに通用門の方へと行く。その後姿みおくを送りて文三が肚の裏うちで、

「彼奴あいつまで我われの事を、意久地なしと云わんばかりに云やアがる」

第十回 負るが勝

知己を番町の家に訪えば主人は不在、留守居の者より翻訳物を受取ッて、文三が旧もと来た路を引返して俎橋まないたばしまで来た頃はモウ点火ひともし頃で、町家では皆店頭洋燈を点している。「免職に成ッて懐淋ふところさみしいから、今頃帰るに食事をもせずに来た」ト思われるも残念と、つまらぬ所に力瘤ちからこぶを入れて、文三はトある牛店へ立寄ッた。

この牛店は開店してまだ間もないと見えて見掛けは至極よかつたが、裏なかへ這入はいッて見ると大違い、尤も客も相応にあつたが、給事おんなの婢が不慣れなので迷惑まじつく程には手が廻わらず、帳場でも間違えれば出し物おくも後れる。酒を命じ肉を命じて、文三が待てど暮らせど持て来ない、催促をしても持て来ない、また催促をし

てもまた持て来ない、偶々たまたま持て来れば後から来た客の所へ置いて行く。さすがの文三も遂ついには肝癰かんしやくを起して、厳しく談じ付けて、不愉快不平な思いをして漸ようやくの事で食事を済まして、勘定を済まして、「毎度難有御座い」ありがとうの声を聞流して戸外へ出た時には、厄落やくおとしでもしたような心地がした。

両側の夜見世よみせを窺のぞきながら、文三がブラブラと神保町じんぼうちようの通りを通行した頃には、胸のモヤクヤも漸く絶え絶えに成つて、どうやら酒を飲んだらしく思われて、昇はすかしに辱められた事も忘れ、お勢の高笑いをした事をも忘れ、山口の言葉の氣に障つたのも忘れ、牛店の不快をも忘れて、唯醜顔ただかおに当る夜風の涼味をのみ感じたが、シカシ長持はしなかつた。

宿所へ来た。何心なく文三が格子戸こうしどを開けて裏へ這入ると、奥坐舗おくざしきの方でワツワツと云う高笑いの声がする。耳を聳そばだてて能よ

く聞けば、昇の声もその中に聞える……まだ居ると見える。文三は覚え立止った。「若^もしまた無礼を加えたら、モウその時は破れかぶれ」ト思えば荐^{しき}りに胸が浪^{なみ}だつ。暫^{しば}らく鵠^{たかずん}立^たでいて、度胸を据^すえて、戦争が初まる前の軍人の如くに思切^{かんしよく}った顔色をして、文三は縁側へ廻^{めぐ}り出た。

奥坐舗を窺^はいて見ると、杯盤狼藉^{はいばんろうぜき}と取散^はらしてある中に、昇が背なかに円^{まる}く切抜いた白紙^{しろかみ}を張られてウロウロとして立ている、その傍^{そば}にお勢とお鍋が腹を抱えて絶倒している、が、お政の姿はカイモク見えない。顔を見合^あわしても「帰^かったか」ト云う者もなく、「叔母^{ふりふり}さんは」ト尋ねても返答をする者もないので、文三が憤^{ふりふり}々しながらそのままにして行過^あぎてしまうと、忽^{たちま}ち後^{うしろ}の方で、

(昇)「オヤこんな悪戯^{いたずら}をしたネ」

〔勢〕「アラ私じや有りませんよ、アラ鍋ですよ、オホホホホ」

〔鍋〕「アラお嬢さまですよ、オホホホホ」

〔昇〕「誰も彼も無い、二人共敵手だ。あいてドレまずこの肥満奴から」

〔鍋〕「アラ私じや有りませんよ、オホホホホ。アラ厭いやですよ……

アラ御新造ごしんぞさあん引七」

ト大声を揚げさせての騒動、ドタバタと云う足音も聞えた、

オホホホと云う笑声も聞えた、お勢しきの荐ひっかいりに「引搔やてお遣りよ、

引搔さわぎて」ト叫喚わめく声もまた聞えた。

騒動さわぎに氣を取られて、文三が覚えず立止りて後方うしろを振向く途

端あしおとに、バタバタと蹠音あしおとがして、避ける間もなく誰だかトンと文

三つぎあたに衝突あわてッた。狼狽あわてた声でお政の声で、

「オー危ない……誰だネーこんな所ところに黙ッて突立ッてて」

「や、コリヤ失敬……文三です……何処どこぞ痛めはしませんでし

たか」

お政は何とも言わずにツイと奥坐舗へ這入りて跡ピツシヤリ。恨めしそうに跡をみおく目送ツて文三は暫らく立在たたずんでいたが、やがて二階へ上ツて来て、まず手探りで洋燈ランプを点じて机辺つくえのほとりに蹲踞そんこしてから、さて、

「実に淫哇みだらだ。叔母や本田は論ずるに足らんが、お勢が、品格々と口癖に云ツているお勢が、あんな猥褻わいせつな席つらなに連ツている……しかも一所に成ツて巫山戯ふざけている……平生の持論は何処へ遣ツた、何の為ために学問をした、まずみずからあなどるしこうしてのちひとこれをあなどる先自侮而後人侮之レ、その位の事は承知しているだろう、それでいてあんな真似を……実に淫哇みだらだ。叔父の留守ふとりしまりに不取締ふとくしりが有ツちや我われが済まん、明日あした厳しく叔母に……」

トまでは調子に連れて黙想したが、ここに至ツてフト今の我

身を省みてグンニヤリと萎しおれてしまい、暫らくしてから「まずともかくも」ト気を替えて、懷中して来た翻訳物を取り出して読み初めた。

The ever difficult task of defining the distinctive characters and aims of English political parties threatens to become more formidable with the increasing influence of what has hitherto been called the Radical party. For over fifty years the party……

ドツと下坐舗つぽでする高笑いの声に流読の腰を折られて、文三はフト口を鉗つづんで、

「チョッ失敬極まる。我われの帰かへったのを知しっていないながら、何奴どいつも此奴こいつも本田一人の相手に成なつてチャホヤいしていて、飯を喰くつて来たかと云う者も無い……アまた笑わつた、アリヤお勢いきなりだ……弥々いよいよ

心變りがしたならしたと云うが宜、切れてやらんとは云わん。
 何の糞、我だッて男児だ、心變のした者に……」
 ハツと心附て、また一越調子高に、

The ever difficult task of defining the distinctive characters and aims of English political……

フト格子戸の開く音がして笑い声がピッタリ止った。文三は耳を聳てた。匆わしく縁側を通る人の足音がして、暫らくすると梯子段の下で洋燈をどうかこうとか云うお鍋の音がしたが、それから後は肅然として音沙汰をしなくなつた。何となく来客でもある容子。

高笑いの声がする内は何をしている位は大抵想像が附たからまず宜かつたが、こう静ツて見るとサア容子が解らない。文三些し不安心に成ッて来た。「客の相手に叔母は坐舗へ出ている。

お鍋も用がなければ可^よし、有れば傍に附てはいない。シテ見る
と……」文三は起ッたり居たり。

キツト思付いた、イヤ憶^{おも}出した事が有る。今初まツた事では
無いが、先刻から酔醒めの気味で咽喉^{のど}が渴く。水を飲めば渴^{かわ}が
歇^とまるが、シカシ水は台所より外には無い。しこうして台所は
二階には附いていない。故^{ゆゑ}に若し水を飲まんと欲せば、是非と
も下坐舗へ降りざるを得ず。「折が悪いから何となく何だけれ
ども、シカシ我慢しているも馬鹿氣ている」ト種々^{さまざま}に分疏^{いいわけ}をし
て、文三は遂^{つい}に二階を降りた。

台所へ来て見ると、小洋燈^{こランプ}が点^{とぼ}しては有るがお鍋は居ない。
皿小鉢^{こぼち}の洗ひ懸けたままで打捨てて有るところを見れば、急に
用が出来て遣^{つか}にでも往たものか。「奥坐舗は」と聞耳を引立てれ
ば、ヒソヒソと私語^{ひそひそ}く声が聞える。全身の注意を耳一ツに集め

て見たが、どうも聞取れない。ソコで竊むが如くに水を飲んで、
 拔足をして台所を出ようとすると、忽ち奥坐舗の障子がサツと
 開いた。文三は振反ッて見て覚え立止った。お勢が開懸けた
 障子に掴まッて、出るでも無く出ないでもなく、唯此方へ背を
 向けて立在んだままで坐舗の裏を窺き込んでゐる。
 「チヨイと茲処へお出で」
 ト云うは慥に昇の声。お勢はだらしもなく頭振りを振りなが
 ら、

「厭サ、あんな事をなさるから」

「モウ悪戯しないからお出でと云えば」

「厭」

「ヨ一シ厭と云ツたネ」

「真個か、其処へ往きましようか」

ト、チヨイと首を傾^{かし}げた。

「ア、お出で、サア……サア……」

「何方^{どっち}の眼で」

「コイツメ」

ト確^{たちあが}に起上る真似。

オホホホと笑いを溢^{こぼ}しながら、お勢は狼狽^{あわ}てて駈出して来て
危^{あやう}く文三に衝当ろうとして立止った。

「オヤ誰……文さん……何時^{いつ}帰ったの」

文三は何にも言わず、ツンとして二階へ上ッてしまッた。

その後^{あと}からお勢も続いて上ッて来て、遠慮会釈も無く文三の
傍^{そば}にベツタリ坐ッて、常よりは馴^{なれ}々しく、しかも顔を皺^{しか}めて可笑^{おか}
しく身体^{からだ}を揺りながら、

「本田さんが巫山戯^{ふざけ}て巫山戯^{ふざけ}て仕様がなないんだもの」

ト鼻を鳴らした。

文三は恐ろしい顔色がんしよくをしてお勢りゆうびの柳眉ひそを顰ひそめた嬌面かおを疾視にらみ付けたが、恋は曲物くせもの、こう疾視付けた時でも尚なお「美は美だ」と思わない訳にはいかなかった。折角そうじょうの相好あうごうもどうやら崩れそうに成った……が、はッと心附わいて、故意わざと苦々しそうに冷笑あざわらいながら率方そつぽうを向いてしまつた。

おりから折柄梯子段を踏轟ふみとどろかして昇が上ツて来た。ジロリと兩人ふたりの光景ようすを見るや否やいな、忽ちウツと身を反らして、さも業山ぎようさんそうに、

「これだもの……大切なお客様を置去りにしておいて」

「だッて貴君あなたがあんな事をなさるもの」

「どんな事を」

ト言いながら昇は坐ツた。

「どんな事ツて、あんな事を」

「ハハハ、此奴こいつア宜い。それじゃーあんな事ッてどんな事を、ソ
ラいいたちこッこだ」

「そんなら云ッてもよう御座んすか」

「宜しいとも」

「ヨーシ宜しいと仰おッしやツたネ、そんなら云ッてしまふから宜
い。アノネ文さん、今ネ、本田さんが……」

ト言懸けて昇の顔を凝視みつめて、

「オホホホ、マアかにして上げましょう」

「ハハハ言えないのか、それじゃー我輩わなが代ッて嘸はなそう。『今ネ
本田さんがネ……』」

「本田さん」

「私の……」

「アラ本田さん、仰しやりやー承知しないから宜い」

「ハハハ、自分から言出して置きながら、そうも亭主と云うものは恐こわいものかネ」

「恐かア無いけれども私の不名誉になりますもの」

「何故なぜ」

「何故と云ツて、貴君に凌辱りようじよくされたんだもの」

「やこれは飛でも無いことを云いなさる、唯チヨイと……」

「チヨイとチヨイと本田さん、敢て一問を呈す、オホホホ。貴方は何ですネ、口には同権論者だ同権論者だと仰しやるけれども、虚言うそですネ」

「同権論者でなければ何だと云うんでゲス」

「非同権論者でしょう」

「非同権論者なら」

「絶交してしまいます」

「エ、絶交してしまう、アラ恐ろしの決心じやないか、アハハハ。どうしてどうして我輩程熱心な同権論者は恐らくは有るまいと思う」

「うそ虚言仰しやい。譬たとえばネ熱心でも、貴君のような同権論者は私だいぎらア大嫌い」

「これは御挨拶。ごあいさつ大嫌いとは情ない事を仰しやるネ。そんならどういう同権論者がお好き」

「どう云うツてアノー、僕の好きな同権論者はネ、アノー……」
ト横眼で天井を眺ながめた。

昇が小声で、

「文さんのような」

お勢も小声で、

「イエスYes……」

ト微かに云ツて、可笑しな身振りをして、両手を貌に宛てて笑ひ出した。文三は愕然としてお勢を凝視めていたが、見る間に顔色を変えてしまつた。

「イヨー妬ます引羨 ましいぞ引。どうだ内海、エ、今の御託宣は。『文さんのような人が好きッ』アッ堪らぬ堪らぬ、モウ今夜家にや寝られん」

「オホホホそんな事仰しやるけれども、文さんのような同権論者が好きと云つたばかりで、文さんが好きと云わないから宜いじや有りませんか」

「その分疏闇い闇い。文さんのような人が好きも文さんが好きも同じ事で御座います」

「オホホホそんならばネ……アこうですこうです。私はネ文さんが好きだけでも、文さんは私が嫌いだから宜じや有りま

せんか。ネー文さん、そうですネー」

「ヘン嫌いどころか好きも好き、足駄あしだ穿はいて首ッ丈と云う念の入おっった落おこちようだ。些すこし水層みずかさが増そうものならブクブク往生しようと言いうんだ。ナア内海」

文三はムツとしていて莞爾にっこりともしない。その貌をお勢はチョイと横眼で視て、

「あんまり貴君ききみが戯談じやうだん仰うしやるものだから、文さん憤おこッてしまいなすうツたよ」

「ナニまさか嬉しいとも云えないもんだから、それであんな貌うをしてゐるのサ。シカシ、アア澄あましたところは内海も仲々好男子だネ、苦味くみばしつていて。モウ些あしああの願あがつまると申分あがないんだけれども、アハハハハ」

「オホホホ」

ト笑いながらお勢はまた文三の貌を横眼で視た。

「シカシそうは云うものの内海は果報者だよ。まずお勢さんのようなこんな」

ト、チヨイとお勢の膝ひざを叩たたいて、

「頗すこぶる付きの別品、しかも実の有るのに想おもい附かれて、叔母さんに油を取られたと云ッては保護ほうごして貰もらい、ヤ何だと云ッては保護して貰う、実に羨ましいネ。明治年代の丹治たんじと云うのはこの男の事だ。焼やいて粉こにして飲のんでしまおうか、そうしたら些ちつと
はあやかるかも知れん、アハハハハ」

「オホホホ」

「オイ好男子、そう苦虫を喰潰くいつぶしていずと、些ちつと此方こつちを向いてのろけ給たまえ。コレサ丹治君。これはしたり、御返答が無い」

「オホホホホ」

トお勢はまた作笑いをして、また横眼でムツとしている文三の貌を視て、

「アー可笑しいこと。あんま余り笑ったもんだから咽喉が渴いて来た。本田さん、下へ往ッてお茶を入れましょう」

「マアもう些と御亭主さんの傍そばに居て顔を視せてお上げなさい」
「厭いやだネー御亭主さんなんぞッて。そんなら入れて茲ここ処へ持ッて来ましょうか」

「茶を入れて持て来る実が有るなら寧いづそ水を持ッて来て貰いた
いネ」

「水を、お砂糖入れて」

「イヤ砂糖の無い方が宜い」

「そんならレモン入れて来ましょうか」

「レモンが這はい入るなら砂糖氣けがチョッピリ有ッても宜いネ」

「何だネーいろんな事云ツて」

ト云いながらお勢は起上^{たちあが}ツて、二階を降りてしまツた。跡に
ふたりは兩人の者が、暫^{しば}らく手持無沙汰と云う気味で黙然^{もくぜん}としていた
が、やがて文三は厭に落着いた声で、

「本田」

「エ」

「君は酒に酔ッているか」

「イイヤ」

「それじゃア些^{すこ}し聞く事が有るが、朋友^{ほうゆう}の交^{まじわり}と云うものは互に
尊敬していなければ出来るものじゃ有るまいネ」

「何だ、可笑しな事を言出したな。さよう、尊敬していなければ
出来ない」

「それじゃア……」

ト云懸けて黙していたが、思切ツて些し声を震わせて、

「君とは暫らく交際していたが、モウ今夜ぎりで……絶交して貰いたい」

「ナニ絶交して貰いたいと……何だ、唐突千万な。何だと云ツて絶交しようと云うんだ」

「その理由は君の胸に聞て貰おう」

「可笑しく云うな、我輩少しも絶交しられる覚えは無い」

「フン覚えは無い、あれ程人を侮辱して置きながら」

「人を侮辱して置きながら。誰が、何時、何と云ツて」

「フン仕様が無いな」

「君がか」

文三は默然もくねんとして暫らく昇の顔を凝視みつめていたが、やがて些

し声高こわだかに、

「何にもそうとぼけなくツたツて宜いじや無いか。君みたようなものでも人間と思うからして、すなわ即ち廉耻れんちを知ッている動物と思うからして、人間らしく美しく絶交してしまおうとすれば、君は一度ならず二度までも人を侮辱して置きながら……」

「オイオイオイ、人に物を云うならモウ些ちつと解るように云つて貰いたいネ。君一人位友人を失ツたと云ツてそんなに悲しくも無いから、絶交するならしても宜しいが、シカシその理由も説明せずして唯無暗ただむやみに人を侮辱した侮辱したと云うばかりじや、ハアそうかとは云ツておられんじやないか」

「それじゃ何故先刻さつき叔母やお勢カズンのいる前で、僕に『瘦我慢やせなら大抵にしろ』と云ツた」

「それがそんなに気に障ツたのか」

「あたりまえ当前サ……何故今また僕の事を明治年代の丹治即ち意久地な

しと云ツた」

「アハハハ弥々腹筋だ。いよいよはらすじそれから」

「事に大小は有ツても理に巨細こさいは無い。瘦我慢と云ツて侮辱したも丹治と云ツて侮辱したも、帰するところは唯一ただの輕蔑けいべつからだ。既に輕蔑心がある以上は朋友の交際は出来ないものと認めたからして絶交を申出したのだ。解ッているじゃないか」

「それから」

「但しただこうは云うようなものの、園田の家と絶交してくれとは云わん。からして今までのように毎日遊びに来て、叔母と骨牌かるたを取ろうが」

ト云ツて文三冷笑した。

「お勢カズンを芸娼妓げいしやうぎの如く弄もてあそぼうが」

ト云ツてまた冷笑した。

「僕の關係した事でないから、僕は何とも云うまい。だから君もそう落胆ろうぱいイヤ狼狽とうばいして遁辞とんじを設ける必要も有るまい」

「フフウ嫉妬しつとの原素も雜まざツている。それから」

「モウこれより外に言う事も無い。また君も何にも言う必要も有るまいから、このまま下へ降りて貰いたい」

「イヤ言う必要が有る。冤罪えんざいを被こうぶツてはこれを弁解する必要が有る。だからこのまま下へ降りる事は出来ない。何故瘦我慢なら大抵にしろと『忠告』したのが侮辱になる。成程親友でないものにそう直言したならば侮辱したと云われても仕様が無いが、シカシ君と我輩とは親友の関繫かんけいじゃ無いか」

「親友の間にも礼義は有る。然しかるに君は面と向ツて僕に『瘦我慢なら大抵にしろ』と云ツた。無礼じゃないか」

「何が無礼だ。『瘦我慢なら大抵にしろ』と云ツたツけか、『大

抵にした方がよからうぜ』と云ったツけか、何方どっちだったかモウ忘れてしまつたが、シカシ何方どっちにしろ忠告だ。凡そ忠告およと云う者は——君にかぶれて哲学者振るのじゃアないが——忠告と云う者は、人の所行を非と認めるから云うもので、是ぜと認めて忠告を試みる者は無い。故ゆゑに若し非を非と直言したのが侮辱になれば、總すべての忠告と云う者は皆君の所謂無礼いわゆるなものだ。若しそれで君が我輩の忠告を怒いかるのならば、我輩一言もない、謹つつしんで罪を謝そう。がそうか」

「忠告なら僕は却かえつて聞く事を好む。シカシ君の言つた事は忠告じゃない、侮辱だ」

「何故」

「若し忠告なら何故人のいる前で言つた」

「叔母さんやお勢さんは内輪の人じゃないか」

「そりや内輪の者サ……内輪の者サ……けれども……しかしながら……」

文三は狼狽した。昇はその光景を見て私ひそかに冷笑した。

「内輪な者だけれども、シカシ何にもアア口汚く言わなくツても好じやないか」

「どうも種々に論鋒ろんぽうが変化するから君の趣意が解りかねるが、

それじゃア何か、我輩の言方即ち忠告の Mannerマンナー が気に喰くわんと云うのか」

「勿論 Manner も気に喰くわんサ」

「Manner が気に喰わないのなら改めてお断り申そう。君には侮辱と聞えたかも知れんが我輩は忠告の積りで言ツたのだ、それで宜かろう。それならモウ絶交する必要も有るまい、アハハハ」

文三は何と駁^{ばく}して宜いか解らなくなつた、唯ムシヤクシヤと腹が立つ。風が宜ければさほどにも思うまいが、風が悪いので尚お一層腹が立つ。油汗を鼻頭^{はななき}ににじませて、下唇^{したくちびる}を喰締めながら、暫らくの間口^{くち}惜しそうに昇の馬鹿笑いをする顔を疾視^{にら}んで黙然としていた。

お勢が溢^{こぼ}れるばかりに水を盛ツた「コップ」を盆に載せて持つて参ツた。

「ハイ本田さん」

「これはお待遠うさま」

「何ですと」

「エ」

「アノとぼけた顔」

「アハハハハ、シカシ余り遅かつたじゃないか」

「だッて用が有ッたんですもの」

「浮気でもしていやアしなかつたか」

「あなた貴君じゃ有るまいシ」

「我輩がそんなに浮気に見えるかネ……ドツコイ『課長さんの令妹』と云いたそうな口付をする。云えば此方こっちにも『文さん』ト云う武器が有るから直ぐ返討だ」

「厭な人だネー、人が何にも言わないのに邪推を廻わして」
「邪推を廻わしてと云えば」

ト文三の方を向いて、

「どうだ隊長、まだ胸に落んか」

「君の云う事は皆遁辞とんじだ」

「何故」

「そりや説明するに及ばん、セルフエヴィデントSelf-evident truthだ」

「アハハハ、とうとう Self-evident truth にまで達したか」

「どうしたの」

「マア聞いて御覧なさい、余程面白い議論が有るから」

ト云ツてまた文三の方を向いて、

「それじゃその方の口はまず片が附たと。それからしても一口の方は何だッけ……そうそう丹治丹治、アハハハ何故丹治と云ツたのが侮辱になるネ、それもやはり Self-evident truth かね」

「どうしたの」

「ナニネ、先刻^{さつき}我輩が明治年代の丹治と云ツたのが御気色^{みけしき}に障ツたと云ツて、この通り顔色まで変えて御立腹だ。貴嬢^{あなた}の情夫^{いろ}にしちやア些^ちと野暮天すぎるネ」

「本田」

昇は飲かけた「コップ」を下に置いて、

「何でゲス」

「人を侮辱して置きながら、咎められたと云って遁辞を設けて逃るような破廉耻はれんちの人間と舌戦は無益と認める。からしてモウ僕は何にも言うまいが、シカシ最初の『プロポーズ』（申出）より一步も引く事は出来んから、モウ降りてくれ給え」

「まだそんな事を云ッてるのか、やどうも君も驚く可べき負けし
みだな」

「何だと」

「負けしみじゃないか、君にももう自分の悪かつた事は解ッて
いるだろう」

「失敬な事を云うな、降りろと云ッたら降りたが宜よじゃないか」
「モウお罷よしなさいよ」

「ハハハお勢さんが心配し出した。シカシ真しんにそうだね、モウ罷やした方が宜い。オイ内海、笑ッてしまおう。マア考えて見給え、馬鹿氣切ッているじゃないか。忠告の仕方が氣に喰くわないの、丹治と云ツたが癩しやくに障るのと云ツて絶交する、全まるで子供の喧嘩けんかのようで、人に対して嘸はなしも出来ないじゃないか。ネ、オイ笑ッてしまおう」

文三は黙ッている。

「不承知か、困ツたもんだネ。それじゃ宜ろしい、こうしよう、我輩が謝まろう。全くそうした深かんい考がえが有ッて云ツた訳じゃないから、お氣に障ツたら真平御免まっぴら下さい。それでよかろう」

文三はモウ堪え切れない憤いりの声を振上げて、

「降りろと云ツたら降りないか」

「それでもまだ承知が出来ないのか。それじゃ仕様がな、降

りよう。今何を言ッても解らない、のぼせあが逆上ッているから」

「何だと」

「イヤ此方の事だ。ドレ」

たちあがト起上る。

「馬鹿」

昇も些しムツとした趣きで、立止ッて暫らく文三を疾視にらみつ付けていたが、やがてニヤリと冷笑あざわらッて、

「フン、前後忘却ていの体か」

ト云いながら二階を降りてしまッた。お勢も続いて起上ッて、不思議そうに文三の容子ようすを振反ッて観ながら、これも二階を降りてしまッた。

跡で文三は悔しそうに齒を喰切くいしばッて、拳こぶしを振揚げて机を撃ッて、

「畜生ッ」

梯子段はしごだんの下あたりで昇とお勢のドツと笑う声が聞えた。

第十一回 取付く島

翌朝朝飯の時、家内の者が顔を合わせた。お政は始終顔を顰しかめていて口も碌々ろくろく聞かず、文三もその通り。独りお勢而已のみはソワソワしていて更らに沈着おちつかず、端手はしたなく嘖さえずツて他愛たわいもなく笑う。かと思うとフト口を鉗つぐんで真面目まじめに成ツて、憶出おもいだしたように額越ひたえこしに文三の顔を眺ながめて、笑うでも無く笑わぬでもなく、不思議ふしぎそうな剣呑けんおんそうな奇々妙々がんしよくな顔色がんしよくをする。

食事が済む。お勢がまず起上たちあがツて坐舗ざしきを出て、縁側でお鍋に戯たわぶれて高笑をしたかと思う間も無く、忽ちたちま部屋の方で低声ていせいに詩

吟をする声が聞えた。

益々顔を皺めながら文三が続いて起上ろうとして、叔母に呼

留められて又坐直すわりなおして、不思議そうに恐々叔母の顔色を窺うかがッて

見てウンザリした。思做おもいなしかして叔母の顔は尖とがッている。

人を呼留めながら叔母は悠々ゆうゆうとしたもので、まず煙草たばこを環わに

吹くこと五六ぷく、お鍋の膳ぜんを引終るを見済ましてきて漸ようやくに、

「他の事でも有りませんがネ、昨日私がマア傍そばで聞てれば――

また余計なお世話だッて叱しかられるかも知れないけれども――本

田さんがアアヤッて信切に言ておくんなさるものを、お前さん

はキツパリ断ッておしまいなすツたが、ソリヤモウお前さんの

事ことたから、いずれ先に何とか確乎たしかな見当みあてが無くッてあんな事を

お言いなさりやアすまいネ」

「イヤ何にも見当みあてが有ッてのどののと云う訳じゃ有りませんが、

唯^{ただ}……」

「へー、見当も有りもしないのに無暗^{むやみ}に辞^{ことわ}ッておしまいなすツたの」

「目的なしに断わると云ッては或^{あるい}は無考^{むかんがえ}のように聞えるかも知れませんが、シカシ本田の言ッた事でもホンノ風評と云うだけで、ナニモ確に……」

縁側を通る人の蹠^{あしおと}音がした。多分お勢が英語の稽古^{けいこ}に出懸^{でかけ}るので。改ッて外出をする時を除くの外は、お勢は大抵母親に挨拶^{あいさつ}をせずして出懸る、それが習慣で。

「確にそうとも……」

「それじゃ何ですか、弥々^{いよいよ}となりや御布告にでもなりますか」

「イヤそんな、布告なんぞになる気遣いは有りませんが」

「それじゃマア人の噂^{うわさ}を宛^{あて}にするほか仕様が無いと云ッたよう

なもんですネ」

「デスガ、それはそうですが、シカシ……本田なぞの言事は……」

「宛にならない」

「イヤそ、そ、そう云う訳でも有りませんが……ウー……シカシ……幾程いくら苦しいと云ツて……課長の所へ……」

「何ですとえ、幾程いくら苦しいと云ツて課長さんの所へは往もどけな
とえ。まだお前さんはそんな気楽な事を言てお出いでなさるのか
え」

トお政が層かさに懸かツて極付きめつけかけたので、文三は狼狽あわてて、

「そ、そ、そればかりじゃ有りません……仮令たとえ今課長に依頼し
て復職が出来たと云ツても、とても私わたくしのような者は永くは続き
ませんから、寧ろむじ官員はモウ思切ろうかと思ひます」

「官員はモウ思切る、フン何が何だか理由わけが解りやしない。この

間お前さん何とお言いだ。私がこれからどうして行く積だと聞いたら、また官員の口でも探そうかと思ツてますとお言ひじやなかつたか。それを今と成ツて、モウ官員は思切る……左様サ、親の口は干上ツてもかま関わないから、モウ官員はお罷やめなさるが宜いのサ」

「イヤ親の口が干上ツても関わないと云う訳じや有りませんが、シカシ官員ばかりが職業でも有りませんから、教師に成ツても親一人位は養えますから……」

「だから誰もそうはならないとは申しませんよ。そりやお前さんの勝手だから、教師になとくるまひき車夫になと何になとお成なんなさるが宜いのサ」

「デスガそう御立腹なすツちやわたくし私も実に……」

「誰が腹たつを立てると云いました。ナニお前さんがどうしよう」と

此方こつちに閥繋くわいあいの無い事だから誰も腹も背も立ちやしないけれども、唯本田さんがアアやッて信切に言ッておくンなさるもんだから、とりもつ周旋もうて貰ッて課長さんに入いッて置きやア、よし仮令よんば今度の復職とやらは出来ないでも、また先へよッて何ぞれ角かぞれお世話アして下さるまいものでも無いトネー、そうすりや、お前さんばかしおっかか慈母おさんも御安心なさる事こつたシ、それに……何だから『三方四方』円こく納まる事こたから（この時文三はフツト顔を振揚げて、不思議そうに叔母を凝視みつめた）ト思ッて、チヨイとお聞りき申したばかりさ。けれども、ナニお前さんがそうした了り簡方ようけんかたならそれまでの事サ」

両人共暫しばらく無言。

「鍋」

「ハイ」

トお鍋が襖ふすまを開けて顔のみを出した。見れば口をモゴ付かせている。

「まだ御膳ごぜんを仕舞わないのかえ」

「ハイ、まだ」

「それじゃ仕舞ッてからで宜いいからネ、何時いつもの車屋へ往ッて一人乗一挺いっちょようあつ詔めいらえて来ておくれ、浜町はまちようまで上下じようげ」

「ハイ、それでは只今直ただいまに」

ト云ッてお鍋が襖を閉切たてきるを待兼ねていた文三が、また改めて叔母に向つて、

「段々と承ッて見ますと、叔母さんの仰おつしやる事は一々御尤ごいづとものようでも有るシ、かつ私わたくしひとり一個の強情から、母親おふくろは勿論もちろん叔母さんいろういろうにまで種々御心配を懸けまして甚はなはだ恐入りますから、今一応篤とくと考えて見まして」

「今一応も二応も無いじゃ有りませんか、お前さんがモウ官員にやならないと決めてお出でなさるんだから」

「そ、それはそうですが、シカシ……事に寄ツたら……思い直おすかも知れませんから……」

お政は冷笑しながら、

「そんならマア考えて御覧なさい。だがナニモ何ですよ、お前さんが官員に成ッておくんなさるなきやア私どもが立往かないと云うんじや無いから、無理に何ですよ、勧めはしませんよ」

「ハイ」

「それから序だから言ツときますがネ、聞けば昨夕^{ゆうべ}本田さんと何だか入組みなすつたそうだけれども、そんな事が有ツちや誠に迷惑しますネ。本田さんはお前さんのお朋友^{ともだち}とは云いじよう、今じやア家^{うち}のお客も同前の方だから」

「ハイ」

トは云ツたが、文三実は叔母が何を言ツたのだかよくは解らなかつた、些^{すこ}し考え事が有るので。

「そりやアア云う胸の広い方だから、そんな事が有ツたと云ツてそれを根葉に有^もツて周旋^{とりもち}をしないとはお言いなさりやすまいけれども、全体なら……マアそれは今言ツても無駄^{むだ}だ、お前さんが腹を極^きめてからの事にしよう」

ト自家撲滅^{ぼくめつ}、文三はフト首を振揚げて、

「ハイ」

「イエネ、またの事にしましょう、と云う事サ」

「ハイ」

何だかトンチンカンで。

叔母に一礼して文三が起上ツて、そこそこに部屋へ戻ツて、

室の中央に突立つたッたままで坐りもせず、良暫ややくの間と云うものは造付けつくりつの木偶にんぎようの如くに默然としていたが、やがて溜息ためいきと共に、

「どうしたものだろう」

ト云ッて、宛然さながら雪達磨だるまが日の眼に逢あッて解けるように、グズ

グズと崩れながらに坐に着いた。

何故なぜ「どうしたものだろう」かとその理由ことわけを繹たずねて見ると、

概略あらましはまず箇様こうようで。

先頃免職が種で油を取られた時は、文三は一途いちずに叔母を薄情な婦人と思詰めて恨みもし立腹りつぷくもした事では有るが、その後沈着おちついて考えて見るとどうやら叔母の心意氣が飲込めなくなり出した。

成程叔母は賢婦でも無い、烈女でもない、文三の感情、思想をそんたく付度し得ないのも勿論の事では有るが、シカシ菽麦しゆくばくを弁ぜぬ程の

痴女子ちじよしでもなければ自家独得の識見をも保着ほうちやくしている、論事矩ロジックをも保着している、処世の法をも保着している。それでいて何故ア何の道理も無く何の理由もなく、唯文三が免職に成つたと云うばかりで、自身も恐らくは無理と知り宛無理つづを陳ならべて一人で立腹して、また一人で立腹したとてまた一人で立腹して、罪とがも咎とがも無い文三に手を杖つかして謝罪わびしたので有ろう。お勢を嫁かするのが厭いやになつてと或時あのとぎは思ひはしたようなものの、考えて見ればそれも可笑おかしい。二三分時前ふんじまでは文三は我女わがむすめの夫、我女は文三の妻と思詰めていた者が、免職と聞くより早くガラリ氣かが滃かわつて、俄にわかに配合めあわせるのが厭いやに成つて、急拵きゅうごしらえの愛想あいそづ尽づかしを陳立ならべたてて、故意に文三に立腹さしてそして娘と手を切らせようとした……どうも可笑しい。

こうした疑念が起つたので、文三がまた叔母の言草、悔しそ

うな言様、ジレッタそうな顔色を一々漏らさず憶起おもいおこして、さらに出直おして思惟しゆいして見て、文三は遂ついに昨日きのうの非さとを覚さとツた。

叔母の心事を察するに、叔母はお勢の身の固まるのを樂みにしていたに相違ない。来年の春を心待ひそかに待っていたに相違ない。アノ帶をアアしてコノ衣服をこうしてと私ひそかに胸算用をしていたに相違ない。それが文三が免職に成なったばかりでガラリト宛あてが外れたので、それで失望したに相違ない。凡およそ失望は落胆を生み落胆は愚痴を生む。「叔母の言艸いいぐさを愛想尽あいそづかしと聞取きツたのは全く此方こちらの僻耳ひがみみで、或は愚痴で有あったかも知れん」ト云う所に文三氣が附ついた。

こう氣が附つて見ると文三は幾分うらみか恨が晴れた。叔母がそう憎くはなくなつた、イヤ寧ろむし叔母に対して氣の毒に成なつて來た。文三の今我こんがは故吾こごでない、シカシお政の故吾も今我でない。

もんぢやく

悶着以来まだ五日にもならぬに、お政はガラリその容子ようすを一

変した。勿論以前とてもナニモ非常に文三を親愛していた、手車に乗せて下へも措かぬようにしていたト云うでは無いが、ともかくも以前は、チヨイと顔を見る眼元、チヨイと物を云う口元に、真似て真似のならぬ一種の和気を帯びていたが、この頃は眼中には雲を懸けて口元には苦笑にがわらいを含んでいる。以前は言事がさらさらとしていて厭味いやみけ気が無かつたが、この頃は言葉に針を含めば聞て耳が痛くなる。以前は人我にんがの隔歴が無かつたが、この頃は全く他人にする。霽顔せいがんを見せた事も無い、温語をきいた事も無い。物を言懸ければ聞えぬ風ふうをする事も有り、気に喰わぬ事が有れば目を側そばだてて疾視にらみ付ける事も有り、要するに可笑しな処置振りをして見せる。免職が種の悶着はここに至ッて、洩いててかじけて凝結し出した。

文三は篤実温厚な男、仮令その人と為りはどう有ろうとも叔
 母は叔母、有恩うおんの人に相違ないから、尊尚親愛して水乳すいにゅうの如く
 シックリと和合したいとこそ願え、決して乖背かいはいし睽離きりしたいと
 は願わないようなものの、心は境に随したがつてその相を顕げんずるとか
 で、叔母にこう仕向けられて見ると万更好的心地もしない。好
 い心地もしなければツイ不吉な顔もしたくなる。が其処そこは篤実
 温厚だけに、何時も思返してジツと辛抱している。蓋し文三の
 身が極まらなければお勢の身も極まらぬ道理、親の事ならそれ
 も苦勞になろう。人世の困難すづれものに遭遇であつて、独りで苦悩して独りで
 切抜けると云うは俊傑すずめものの為る事、並や通途なみの者ならばそうはい
 かぬがち。自心に苦悩が有る時は、必ずその由来する所を自身
 に求めずして他人に求める。求めて得なければ天命に帰してし
 まい、求めて得れば則ちすなわその人を媚嫉ばうしつする。そうでもしなけれ

ば自ら慰める事が出来ない。「叔母もそれでこう辛く当るのだな」トその心を汲分けて、どんな可笑しな処置振りをされても文三は眼を閉ツて黙ッている。

「が若し叔母が慈母のように我の心を噛分けてくれたら、若し叔母が心を和けて共に困厄に安んずる事が出来たら、我ほど世に幸福な者は有るまいに」ト思ッて文三屢々嘆息した。依て至誠は天をも感ずるとか云う古賢の格言を力にして、折さえ有れば力めて叔母の機嫌を取ツて見るが、お政は油紙に水を注ぐように、跳付けて而已いてさらに取合わず、そして独りでジレている。文三は針の筵に坐ツたような心地。

シカシまだまだこれしきの事なら忍んで忍ばれぬ事も無いが、茲処に尤も心配で心配で耐られぬ事が一ツ有る。他でも無い、この頃叔母がお勢と文三との間を関ような容子が徐々見え出し

た一事^じで。尤も、今の内は唯お勢を戒めて今までのように文三と親しくさせないのみで、さして思切^{しき}った処置^{しよ}もしないからま^どず差迫^{さし}った事では無いが、シカシこのままにして捨置^{すて}けば将来^{しやうらい}何等^{どう}な傷心^{かなしい}恨事^{しゅつたい}が出来^{しゅつたい}するかも測^{はか}られぬ。一念^{いっぴん}ここに至^{いた}る毎^{ごと}に、文三は我^がも折れ氣も挫^くじけてそして胸膈^{むね}も塞^{ふさ}がる。

こう云^いう矢端^{やさき}には得^えて疑心^{ぎしん}も起^おりたがる。縄麻^{じようま}に蛇相^{じやそう}も生^うじ^またがる、株杭^{しゅこう}に人想^{にんそう}の起^おりたがる。實在^{じつじやう}の苦境^{くきやう}の外^{ぐわい}に文三が別^{べつ}に妄念^{もうねん}から一苦界^{いくがい}を産^うみ出^でして、求^{もと}めてその中^{うち}に沈淪^{ちんりん}して、あせッて蹴^もいて極大^{ごくだい}苦惱^{くなう}を嘗^なめている今日^{けふ}この頃^{ころ}、我慢勝^{しやうた}他^{もちまえ}が性質^{しやうしやう}の叔母^{しよぼ}のお政^{せい}が、よくせきの事^{こと}なればこそ我^がから折^おれて出^でて、「お前^{まへ}さんさえ我^がを折^おれば、三方^{さんぱう}四方^{しほう}円^{えん}く納^なまる」ト穩便^{えんべん}をおもつて言^いッてくれる。それを無面目^{むめいもく}にも言破^{げんぱ}ッて立腹^{りつぷく}をさせて、我^がから我^が他^た彼此^{びつし}の種子^{たね}を蒔^まく……文三^{ぶんさん}そ^うは為^したく無^ない。成^なろう

事なら叔母の言状を立ててその心を慰めて、お勢の縁をも繋つなぎ留めて、老母の心をも安めて、そして自分も安心したい。それで文三は先刻も言葉を濁して来たので、それで文三は今又屈くつ托たくの人と為なっているので。

「どうしたものだろう」

ト文三再び我と我に相談を懸けた。

「寧いづそ叔母の意見に就いて、廉耻も良心も棄ててしまつて、課長の所へ往つて見ようかしらん。依頼さえして置けば、仮令たとえば今が今どうならんと云つても、叔母の氣が安まる。そうすれば、お勢さえ心變りがしなければまず大丈夫と云うものだ。かつ慈母おツかさんもこの頃じやア茶断ちやだちして心配してお出でなさるところだから、こればかりで犠牲に成つたと云つても敢て小胆とは言われまい。コリヤ寧いづそ叔母の意見に……」

が猛然として省思すれば、叔母の意見に就こうとすれば厭でも昇に親まなければならぬ。昇とあのままにして置いて独り課長に而^{のみ}已取入ろうとすれば、渠奴^{きやつ}必ず邪魔を入れるに相違ない。からして厭でも昇に親まなければならぬ。老母の為お勢^{うが}の為めなら、或は良心を傷^{きず}けて自重の氣を拉^{とり}いで課長の鼻息を窺^{うか}い得るかも知れぬが、如何^{いか}に窮したればと云ツて苦しいと云ツて、昇に、面と向ツて図大柄^{ずおおへい}に「瘦我慢なら大抵にしろ」ト云ツた昇に、昨夜も昨夜とて小児の如くに人を愚弄^{あつらわ}して、陽に負けて陰^{ひそか}に復^{かえ}り討に逢わした昇に、不俱戴天^{ふぐたいてん}の讎敵^{あだ}、生ながらその肉を啖^{くら}わなければこの熱腸が冷されぬと怨みに思ツている昇に、今更手を杖^ついて一着^{ちやく}を輸^ゆする事は、文三には死しても出来ぬ。課長に取入るも昇に上手を遣^{つか}うも、その趣きは同じかろうが同じく有るまいが、そんな事に頓着^{とんじやく}はない。唯是もなく非もなく、

利もなく害もなく、昇に一着を輸する事は文三には死しても出来ぬ。

ト決心して見れば叔母の意見に負そむかなければならず、叔母の意見に負くまいとすれば昇に一着を輸さなければならぬ。それも厭なりこれも厭なりで、二時間ばかりと云うものは黙坐して腕を拱くんで、沈吟して嘆息して、千思万考、審念熟慮して屈托して見たが、詮せんずる所は旧もとの木阿弥もくあみ。

「ハテどうしたものだろう」

物皆終あれば古筵ふるむしろも鳶とびにはなりけり。久しく苦しんでいる内に文三の屈托も遂にその極度に達して、忽ち一ツの思案を形作いわざるつた。所謂思案とは、お勢に相談して見ようと云う思案で。

蓋し文三が叔母の意見に負もつともきたくないと思うも、叔母の心を汲分けて見れば道理な所もあるからと云い、叔母の苦にがり切った

顔を見るも心苦しいからと云うは少分しょうぶんで、その多分は、全くそれが原因もとでお勢おもいきの事を断念おもいきらねばならぬように成行きはすまいかと危ぶむからで。故ゆえに若しお勢さえ、天は荒れても地は老ても、海は枯かれても石は爛ただれても、文三がこの上どんなに零落しても、母親がこの後ことどんな言を云い出しても、決してその初はじめの志を倅あらためないと定きまつていれば、叔母が面つらを脹ふくらしても眼を剥むぎだ出しても、それしきの事なら忍びもなる。文三は叔母の意見に背そむく事が出来る。既に叔母の意見に背く事が出来れば、モウ昇すに一着を輸する必要もない。「かつ窮して乱するは大丈夫の為するを愧はずる所だ」

そうだそうだ、文三の病原はお勢の心に在る。お勢の心一ツで進退去就を決しさえすればイサクサは無い。何故最初から其処に心附かなかつたか、今と成つて考えて見ると文三我ながら

我が怪しまれる。

お勢に相談する、極めて上策。恐らくはこれに越す思案もあるまい。若しお勢が、小挫折に逢ったと云ってその節を移さずして、尚お未だに文三の智識で考えて、文三の感情で感じて、文三の息気で呼吸して、文三を愛しているならば、文三に厭な事はお勢にもまた厭に相違は有るまい。文三が昇に一着を輸する事を屑いぢぎやうしと思わぬなら、お勢もまた文三に、昇に一着を輸せたくは有るまい。相談を懸けたら飛だ手軽ろく「母が何と云おうと関かまやアしませんやアネ、本田なんぞに頼む事はお罷よしなさいよ」ト云ってくれるかも知れぬ。またこの後の所を念を押したら、恨めしそうに、「貴君あなたは私をそんな浮薄なものだと思ってお出でなさるの」ト云ってくれるかも知れぬ。お勢がそうさえ云ってくれば、モウ文三天下に懼おそるる者はない。火にも這入はい

れる、水にも飛込める。況いわんや叔母の意見に負く位の事は朝飯前の仕事、お茶の子さいさいとも思わない。

「そうだ、それが宜い」

ト云ツて文三起上たちあがツたが、また立止ツて、

「がこの頃の挙動そぶりと云い容子ようすと云い、ヒョツとしたら本田に……

何してはいないかしらん……チョツ関かんわん、若しそうならばモ

ウそれまでの事だ。ナニ我われだツて男子だ、心渝こころがわりのした者に未練

は残らん。断然手を切ツてしまツて、今度こそは思い切ツて非

常な事をして、非常な豪胆を示して、本田を拉とりひしいで、そして

お勢にも……お勢にも後悔さして、そして……そして……そし

て……」

ト思おもいながら二階を降りた。

が此処こゝが妙で、観菊行きくみゆきの時同感せぬお勢の心を疑ツたにも拘かかわ

らず、その夜帰宅してからのお勢の挙動そぶりを怪んだのにも拘らず、また昨日きのうの高笑い昨夜ゆうべのしだらを今もつ以て面白からず思ッているにも拘らず、文三は内心の内心では尚おまだお勢に於て心変りするなどと云うそんな水臭い事は無いと信じていた。尚おまだ相談を懸ければ文三の思う通りな事を云つて、文三を励ますに相違ないと信じていた。こう信ずる理由が有るからこう信じていたのでは無くて、こう信じたいからこう信じていたので。

第十二回 いすかの嘴はし

文三が二階を降りて、ソットお勢の部屋の障子を開けるその途端とたんに、今まで机に頼杖ほおづえをついて何事か物思いをしていたお勢が、吃驚びっくりした面相かおつきをして些すこし飛上いずまいッて居住居を直おした。顔に

手の痕あとの赤く残っている所を観ると、久しく頬杖をついていたものと見える。

「お邪魔じゃ有りませんか」

「イイエ」

「それじゃア」

ト云いながら文三は部屋へ這入はいッて坐に着いて

「昨夜は太さくやに失敬おおきしました」

「わたくし
私こそ」

「実に面目が無い、貴嬢あなたの前をも憚はばらずして……今朝その事で
慈母おつかさんに小言を聞きました。アハハハハ」

「そう、オホホホ」

ト無理に押出したような笑い。何となく冷淡つめたい、今朝のお勢
とは全で他人のようで。

「トキニ些し貴嬢に御相談が有る。他の事でも無いが、今朝慈母さんの仰おつしやるには……シカシもうお聞きなすったか」

「イイエ」

「成程そうだ、御存知ない筈はずだ……慈母さんの仰しやるには、本田がアア信切に云ッてくれるものだから、橋渡しをして貰もらッて課長の所へ往いッたらばどうだと仰しやるのです。そりや成程慈母さんの仰しやる通り今茲ここ処で私さえ我がを折れば私の身も極まるシ、老母も安心するシ、『三方四方』（ト言葉に力瘤ちからこぶを入れ）円く納まる事だから、私も出来る事ならそうしたいが、シカシそう為しようとするには良心を締殺しめころさなければならん。課長の鼻息びそくを窺うかがわなければならん。そんな事は我々には出来んじや有りませんか」

「出来なければそれまでじや有りませんか」

「サ其処そこです。私には出来ないが、シカシそうしなければ慈母さんがまた悪い顔をなさるかも知れん」

「母が悪い顔をしたッてそんな事は何だけれども……」

「エ、関かまわんと仰しやるのですか」

ト文三はニコニコと笑いながら問懸けた。

「だッてそうじゃ有りません。貴君あなたが貴君の考どおりに進退して良心に対して毫すこしも耻はずる所が無ければ、人がどんな貌かおをしたッて宜いいじゃ有りませんか」

文三は笑いを停とどめて、

「デスガ唯慈母たださんが悪い顔をなさるばかりならまだ宜いが、或あるはそれが原因と成ッて……貴嬢にはどうかはしらんが……私の為ためには尤も忌むいべき尤も哀かなむ可べき結果が生じはしないかと危ぶまれるから、それで私も困まるのです……尤もそんな結果

が生ずると生じないとは貴嬢の……貴嬢の……」

ト云懸けて黙してしまつたが、やがて聞えるか聞えぬ程の小
声で、

「心一ツに在る事だけでも……」

ト云ツて差俯向いた、文三の懸けた謎々が解けても解けない
風ふりをするのか、それともどうか其所そこは判然しないが、ともか
くもお勢は頗すこぶる無頓着な容子ようすで、

「私にはまだ貴君の仰しやる事がよく解りませんよ。何故なぜそう
課長さんの所へ往ゆくのがお厭いやだろう。石田さんの所へ往てお頼み
なさるも課長さんの所へ往てお頼みなさるも、その趣は同一じや
有りませんか」

「イヤ違います」

ト云ツて文三は首を振揚げた。

「非常な差が有る、石田は私を知っているけれど課長は私を知らないから……」

「そりやどうか解りやしませんやアネ、往て見ない内は」

「イヤそりや今までの経験で解ります、そりや掩おおう可べからざる事

実だから何だけれども……それに課長の所へ往こうとすれば、是非とも先まず本田に依頼をしなければなりません、勿論課長は私も知らない人じゃないけれども……」

「宜いじゃ有りませんか、本田さんに依頼したッて」

「エ、本田に依頼をしろと」

ト云ツた時は文三はモウ今までの文三でない、顔色がんしよくが些し変ツていた。

「命令するのじゃ有りませんがネ、唯依頼したッて宜いじゃ有りませんか、と云うの」

「本田に」

ト文三はあたかも我耳を信じないように再び尋ねた。

「ハア」

「あんな卑屈な奴に……課長の腰巾着こしぎんちやく……奴隸どれい……」

「そんな……」

「奴隸と云われても耻とも思わんような、犬……犬……犬猫同前な奴に手を杖ついて頼めと仰しやるのですか」

ト云ツてジツとお勢の顔を凝視みつめた。

「昨夜ゆうべの事が有るからそれで貴君はそんなに仰しやるんだろうけれども、本田さんだツてそんなに卑屈な人じゃ有りませんワ」

「フン卑屈でない、本田を卑屈でない」

ト云ツてさも苦々しそうに冷笑あざわらいながら顔を背けたが、忽ちたちま

またキツとお勢の方を振向いて、

「何時か貴嬢何と仰しやツた、本田が貴嬢に對ツて失敬な情談を言ツた時に……」

「そりやあの時には厭な感じも起ツたけれども、能く交際して見ればそんなに貴君のお言いなさるように破廉耻はれんちの人じや有りませんワ」

文三は默然もくねんとしてお勢の顔を凝視めていた、但し宜よろしくない徴候で。

「昨夜ゆうべもアレから下へ降りて、本田さんがアノー『慈母おつかさんが聞きくと必きつと喧やかましく言出すに違いない、そうすると僕は何だけれどもアノ内海が困るだろうから黙ツていてくれる』と口止めしたから、私は何とも言わなかつたけれども鍋がツイ饒舌しゃべツて……」

「古狸奴ふるだぬぎめ、そんな事を言やアがツたか」

「またあんな事を云ツて……そりや文さん、貴君が悪いよ。あれ

程貴君に罵詈ばりされても腹も立てずにやつぱり貴君の利益を思ッ
て云う者を、それをそんな古狸かつぱつなんぞッて……そりや貴君は温
順だのに本田さんは活潑だから気が合わないかも知れないけれ
ども、貴君と気の合わないものは皆破廉耻みんなと極きまッてもいないか
ら……それを無暗むやみに罵詈して……そんな失敬な事ッて……」
ト些し顔を赧あかめて口早に云ツた。文三は益々腹立しそうな面相かおつき
をして、

「それでは何ですか、本田は貴嬢の氣に入ツたと云うんですか」
「氣に入るも入らないも無いけれども、貴君の云うようなそん
な破廉耻な人じゃ有りませんワ……それを古狸なんぞッて無暗
に人を罵詈して……」

「イヤ、まず私の聞く事に返答して下さい。弥々いよいよ本田が氣に入ッ
たと云うんですか」

言様が些し烈はげしかつた。お勢はムツとして暫しばらく文三の容子をジロリジロリと視みていたが、やがて、

「そんな事を聞いて何になさる。本田さんが私の氣に入ろうと入るまいと、貴君の關係した事は無いじゃ有りませんか」

「有るから聞くのです」

「そんならどんな關係が有ります」

「どんな關係でもよろしい、それを今説明する必要は無い」

「そんなら私も貴君の問に答える必要は有りません」

「それじゃア宜ろしい、聞かなくツても」

ト云ツて文三はまた顔を背けて、さも苦々しそうに独語ひとりごとのよう

「人に問詰められて逃るなんぞと云ツて、実にひ、ひ、卑劣極まる」

「何ですと、卑劣極まると……宜う御座んす、そんな事お言いなさるなら匿かくしたッて仕様がな、言てしまします……言てしましますとも……」

ト云ツてスコシ胸を突立つきだして、儼然ぎっとして、

「ハイ本田さんは私の氣に入りました……それがどうしました」
ト聞くと文三は慄然ふるふると震えた、真蒼まっさおに成ツた……暫らくの間

は言葉はなくて、唯恨めしそうにジツとお勢の澄ました顔を凝視みつめていた、その眼縁まぶちが見る見るうるみ出した……が忽ちはツと氣を取直おして、儼然ぎっと容を改めて、震声ふるえごえで、

「それじゃ……それじゃこうしましょう、今までの事は全然すっかり……水に……」

言切れない、胸が一杯に成て。暫らく杜絶とぎれていたが思い切ツて、

「水に流してしまいましょ……」

「何です、今までの事とは」

「この場に成てそうとぼけなくツても宜いじゃ有りませんか。
寧^{いッ}そ別れるものなら……綺麗^{きれい}に……別れようじゃ……有りませ
んか……」

「誰がとぼけています、誰が誰に別れようと云うのです」

文三はムラムラとした。些^{こわだか}し声高に成ツて、

「とぼけるのも好加減になさい、誰が誰に別れるのだとは何の事
です。今までさんざ人の感情を弄^{もてあそ}んで置きながら、今と成て……
本田なぞに見返えるさえ有るに、人が穩かに出れば附^{つけ}上^{あが}ツて、
誰が誰に別れるのだとは何の事です」

「何ですと、人の感情を弄んで置きながら……誰が人の感情を
弄びました……誰が人の感情を弄びましたよ」

ト云つた時はお勢もうるみ眼に成つていた。文三はグツとお勢の顔を疾視にらみつ付けている而已のみで、一語をも発しなかった。

「余あんまりだから宜いい……人の感情を弄んだの本田に見返つたのといろんな事を云つて讒謗ざんぼうして……自分の己惚うぬぼれでどんな夢を見ていたつて、人の知た事こッちや有りやしない……」

トまだ言終らぬ内に文三はスックと起上たちあがつて、お勢を疾視にらみつ付けて、

「モウ言う事も無い聞く事も無い。モウこれが口のきき納めだからそう思つてお出いでなさい」

「そう思いますとも」

「沢山……浮気をなさい」

「何ですと」

ト云つた時にはモウ文三は部屋には居なかった。

「畜生……馬鹿……口なんぞ聞いてくれなくツたツて些ちとも困りやしないぞ……馬鹿……」

ト跡でお勢が敵手あいても無いに独りで熱氣やツきとなつて悪口あつこうを並べ立てているところへ、何時の間に帰宅したかフと母親が這入つて来た。

「どうしたんだえ」

「畜生……」

「どうしたんだと云えば」

「文三と喧嘩けんかしたんだよ……文三の畜生と……」

「どうして」

さつきいきなり

「先刻突然這入ッて来て、今朝慈母おツかさんがこうこう言ツたがどうしようかと相談するから、それから昨夜慈母ゆうべさんが言た通りに……」

「コレサ、静かにお願い」

「慈母さんの言た通りに云て勧めたら腹を立てやアがッて、人の事をいろんな事を云ッて」

ト手短かに勿論自分に不利な所はしっかい取除いて次第を咄して、

「慈母さん、私ア口惜しくッて口惜しくッてならないよ」

ト云ッて襦袢じゆばんの袖口そでぐちで泪なみだを拭ふいた。

「フウそうかえ、そんな事を云ツたかえ。それじゃもうそれまでの事だ。あんな者もんでも家大人おとっさんの血統ちすじだから今と成てかれこれ言出しちや面倒臭めんどくさいと思ッて、此方こっちから折れて出て遣やれば附上わがままッて、そんな我儘勝手を云う……モウ勘弁がならない」

ト云ッて些し考えていたが、やがてまた娘の方を向いて一段声を低めて、

「実はネ、お前にはまだ内々でいたけれども、家大人はネ、行々はお前を文三に配合めあわせる積りでお出でなさるんだが、お前は……厭いやだろウネ」

「厭サ厭サ、誰があんな奴に……」

「必きつとそうかえ」

「誰があんな奴やつに……乞食こじきしたッてあんな奴のお嫁に成るもんか」

「その一言いちごんをお忘れでないよ。お前が弥々いよいよその気なら慈母さんも了簡りょうかんが有るから」

「慈母さん、今日から私を下宿さしておくんなさいな」

「なんだネこの娘こは、藪やぶから棒に」

「だッて私ア、モウ文さんの顔を見るのも厭だもの」

「そんな事言ッたッて仕様が無いやアネ。マアもう些と辛抱し

てお出で、その内にや慈母さんが宜いようにして上るから」

この時はお勢は黙していた、何か考えているようで。

「これからは真個ほんとうに慈母さんの言事を聴いて、モウ余り文三と口なんぞお聞きでないよ」

「誰が聞てやるもんか」

「文三ばかりじゃ無い、本田さんにだッてもそうだよ。あんなに昨夜ゆうべのように遠慮の無い事をお言いでないよ。ソリヤお前の事だからまさかそんな……不埒ふらちなんぞはお為しじゃ有るまいけれども、今が嫁入前で一番大事な時だから」

「慈母さんまでそんな事を云ッて……そんならモウこれから本田さんが来たッて口もきかないから宜い」

「口を聞くなじゃ無いが、唯昨夜ゆうべのように……」

「イイエイエ、モウ口も聞かない聞かない」

「そうじゃ無いと云えばネ」

「イイエ、モウ口も聞かない聞かない」

ト頭^{かぶ}振りを振る娘の顔を視て、母親は、

「^{まる}全^{きちがい}で狂気だ。チヨイと人が一言いえば直^{すぐ}に腹^{たつ}を立てしまッて、

手も附けられやアしない」

ト云い捨てて起上^{たちあが}ッて、部屋を出てしまッた。

第三編

浮雲第三篇ハ都合に依ッて此雜誌へ載せる
事にしました。

固もと此小説ハつまらぬ事を種に作ツたもの
ゆえ、人物も事実も皆つまらぬもののみでし
うが、それは作者も承知の事です。

只々ただ作者にハつまらぬ事にハつまらぬとい
う面白味が有るように思われたからそれで筆
を執ッてみた計りです。

第十三回

心理の上から観^みれば、智愚の別なく人咸^{ことごと}く面白味は有る。内海文三の心状を観れば、それは解^とろう。

前回参看※文三は既にお勢に窘^{たしな}められて、憤然として部屋へ駈^{かけもど}戻^{もど}った。さてそれから独り演劇^{しばい}、泡^{あわ}を嚙^かんだり、拳^{こぶし}を握^{にぎ}った。どう考えて見ても心外でたまらぬ。「本田さんが氣に入りました」それは一時の激語、も承知しているでもなく、又いなくても無い。から、強^{あなが}ちそればかりを怒^{おこ}った訳でもないが、只腹^{ただ}が立つ、まだ何か他^たの事で、おそろしくお勢に欺^{あざむ}かれたような心地がして、訳もなく腹が立つ。

腹の立つまま、遂に下宿と決心して宿所を出た。ではお勢の事は既にすっぱり思切ッているか、というに、そうではない、思切ッてはいない。思切ッてはいないが、思切らぬ訳にもゆかぬから、そこで悶々する。利害得喪、今はそのような事に頓着無い。只己れに逆らッてみたい、己れの望まない事をして見たい。鳩毒ちんどく？ 持ッて来い。嘗めてこの一生をむちやくちやにして見せよう！……

そこで宿所を出た。同じ下宿するなら、遠方がよいというので、本郷辺へ往ッて尋ねてみたが、どうも無かつた。から、彼地あれから小石川へ下りて、其処そこ此処ここと尋廻たずねまわるうちに、ふと水道町すいどうちようで一軒見当てた。宿料も廉れん、その割には坐舗ざしきも清潔、下宿をするなら、まず此所等ここらと定めなければならぬ……となると文三急に考え出した。「いずれ考えてから、またそのうちに……」言葉を

濁してその家を出た。うち

「お勢と諍論いひあツて家を出た——叔父が聞いたたら、さぞ心持を悪くするだろうなア……」と歩きながら徐々畏縮そろそろいじけだした。「と云ツて、どうもこのままには済まされん……思切ツて今の家に下宿しようか?……」

今更心が動く、どうしてよいか訳がわからない。時計を見れば、まだ漸ようやく三時半すこし廻まわつたばかり。今から帰るも何となく気が進まぬ。から、彼所あれから牛込見附うしごめみつけへ懸ツて、腹の屈托くつたくを口へ出して、折々往来の人を驚かしながら、いつ来るともななく番町へ来て、例の教師の家を訪問おとずれてみた。

折善くもう学校から帰ツていたので、すぐ面会した。が、授業の模様、旧生徒の噂うわさ、留学ロンドン、竜動、「たいむす」、はッばアと、すぺんさあ——相変らぬ嘶はなしで、おもしろくも何ともない。「私……」

事に寄ると……この頃に下宿するかも知れません」唐突に宛も
ない事を云ツてみたが、先生少しも驚かず、何故かふむと鼻を
鳴らして、只「羨ましいな。もう一度そんな身になつてみたい」
とばかり。とんと方角が違ふ。面白くないから、また辞して教
師の宅をも出てしまつた。

出た時の勢に引替えて、すぐすぐ帰宅したのは八時ごろの事で
有つたろう。まず眼を配ツてお勢を探す。見えない、お勢が……
棄てた者に用も何もないが、それでも、文三に云わせると、人
情というものは妙なもので、何となく氣に懸るから、火を持ツ
て上ツて来たお鍋にこツそり聞いてみると、お嬢さまは氣分が
悪いと仰しやツて、御膳も碌ごぜん ろくに召上らずに、モウお休みなさい
ました、という。

「御膳も碌に？……」

「御膳も碌に召しやがらずに」

確められて文三急に萎しおれかけた……が、ふと気をかえて、「へ、へ、へ、御膳も召上らずに……今に鍋焼なべやき餛飩うどんでも喰くたくなるだろう」

おかしな事をいうとは思ツたが、使に出ていて今朝の騒動を知らないから、お鍋はそのまま降りてしまう。

と、独りになる。「へ、へ、へ」とまた思出して冷笑あざわらツた……

が、ふと心附いてみれば、今はそんな、つまらぬ、くだらぬ、葉袋やくたいも無い事に拘かかツている時ではない。「叔父の手前何と云ツ

て出たものだろう？」と改めて首を捻ひねツて見たが、もう何となく馬鹿氣ま鹿いていて、真面目まじめになつて考えられない。「何と云ツて出たものだろう？」と強しいて考えてみても、心奴めがいう事を聴かず、それとは全く関かん繋けいもない余所事よそごとを何時いつからともなく思ツて

しまう。いろいろに紛れようとしてみても、どうも紛れられない、意地悪くもその余所事が氣に懸ッて、氣に懸ッて、どうもならない。忪こらえに、忪えに、忪えて見たが、とうとう忪え切れなくなッて、「して見ると、同じように苦しんでいるかしらん」、はッと云ッても追付かず、こう思うと、急におそろしく氣の毒になッて来て、文三は狼狽あわてて後悔をしてしまッた。

叱しかるよりは謝罪あやまる方が文三には似合うと誰やらが云ッたが、そうかも知れない。

第十四回

「氣の毒氣の毒」と思い寐ねにうとうととして眼を覚まして見れば、鳥からすの啼声なきごえ、雨戸を躁る音、裏の井戸で釣瓶つるべを軋きしらせる響ひびき。少

し眠^ね足りないが、無理に起きて下坐^{した}舗へ降りてみれば、只お鍋が睡^{かま}むそうな顔をして釜の下を焚^{たき}付けているばかり。誰も起きていない。

朝寐^{あそ}が持前のお勢、まだ臥^ねているは当然の事、とは思いなが
らも、何となく物足らぬ心地がする。

早く顔が視^みたい、如何^ど様な顔をしているか。顔を視れば、どうせ好い心地がしないは知れていれど、それでいて只早く顔が視^みたい。

三十分たち、一時間たつ。今に起きて来るか、と思えば、肉癢^{こそば}
ゆい。髪^{あお}の寐乱れた、顔の蒼^{あお}ざめた、腫^{はれまぶち}瞼^{まぶち}の美人が始終^{めさき}眼前に
ちらつく。

「昨日^{きのう}下宿しようと騒^{さわ}いだは誰で有^あったろう」と云^いつたような
顔^{かお}色^{しき}……

朝飯あさはんがすむ。文三は奥坐舗を出ようとする、お勢はその頃になつて漸々ようよう起きて来て、入ろうとする、——縁側でぴつたり出会つた……はつと狼狽うろたえた文三は、予て期かねした事ながら、それに引替えて、お勢の澄ましようは、じろりと文三を尻眼しりめに懸けたまま、奥坐舗へツイとも云わず入つてしまつた。只それだけの事で有つた。

が、それだけで十分。そのじろりと視た眼付が眼の底に染付しみついて忘れようとしても忘れられない。胸は痞つかえた。氣は結ばれる。搗かてて加えて、朝の薄曇りが昼少し下る頃より雨となつて、びしよびしよと降り出したので、氣も消えるばかり。

お勢は氣分の悪いを口実いいだてにして英語の稽古けいこにも往かず、只一間に籠こもつたぎり、音沙汰おとさたなし。昼飯ひるはんの時、顔を合あわしたが、お勢は成りたけ文三の顔を見ぬようにしている。偶々たまたま眼を視合あわせ

れば、すぐ首を据^すえて可笑^{おか}しく澄^{にらみつ}ます。それが睨^{にら}付^{みつ}られるより文三には辛^{つら}い。雨は歇^やまず、お勢は済まぬ顔、家内も湿り切^きつて誰とて口を聞く者も無し。文三果は泣出したくな^なつた。

心苦しいその日も暮れてやや雨はあがる。昇が遊びに來たか、門口で華やかな声。お鍋のけたたましく笑う声が聞える。お勢はその時奥坐舖に居たが、それを聞くと、狼狽^{うろた}えて起上ろうとしたが間に合^あわず、——氣輕^{きがろ}に入^いつて來る昇に視^みられて、さも余義なさそうに又坐^まつた。

何も知らぬから、昇、例の如く、好もしそうな眼付をしてお勢の顔を視^みて、挨拶^{あいさつ}よりまず戯言^{ざれごと}をいう、お勢は莞爾^{にっこり}ともせず、真面目な挨拶をする、——かれこれ齟齬^{そご}う。から、昇も怪訝^{けげん}な顔^{かお}色^{つぎ}をして何か云おうとしたが、突然お政が、三日も物を云わ^{はぐ}ずにいたように、たてつけて饒舌^{しゃべ}り懸^かけたので、つい紛^{まぎ}らされ

てその方を向く。その間まにお勢はこッそり起上ッて坐舗を滑り出ようとして……見附まけられた。

「何処どこへ、勢ちゃん？」

けれども、聞えませんかから返答を致しませんが云わぬばかりで、お勢は坐舗を出てしまった。

部屋は真の闇やみ。手探りで摺附木マツチだけは探り当てたが、洋燈ランプが

見附らない。大方お鍋が忘れてまだ持ッて来ないので有ろう。

「鍋や」と呼んで少し待ッてみて又「鍋や……」、返答をしない。

「鍋、鍋、鍋」たてつけて呼んでも返答をしない。焦燥じれきッていると、気の抜けたところに、間の抜けた声で、

「お呼びなさいましたか？」

「知らないよ……そんな……呼んでも呼んでも、返答もしないンだものを」

「だッてお奥で御用をしていたンですものを」

「用をしていると返答は出来なくッて？」

「御免遊ばせ……何か御用？」

「用が無くッて呼びはしないよ……そんな……人を……くらみ（暗黒）でるのがわかッ（分ら）なッかえッ？」

二三度聞直して漸く分ッて洋燈ランブは持ッて来たが、心無し奴めが跡をも閉めずして出て往ッた。

「ばか」

顔に似合ほとりわぬ悪体を吐つきながら、起上たちあがッて邪慳じゃけんに障子をしめ切り、再び机の辺ほとりに坐る間もなく、折角おのメた障子をまた開けて……己おのれ、やれ、もう堪忍かんにんが……と振り反ッてみれば、案外な母親。お勢は急よそに他所よそを向く。

「お勢」と小声ながらに力瘤ちからこぶを込めて、お政は呼ぶ。此方こちらはな

に返答をするものと力身りきんだ面相かおつき。

「何だと云ツて、あんなおかしな処置振しりをお為だ？ 本田さんが何とか思いなさらアね。彼方あつちへお出でよ」

と暫しばらく待ツていてみたが、動きそうにも無いので、又声を励まして、

「よ、お出でと云ツたら、お出でよ」

「その位ならあんな事云われないがいい……」

と差俯さしうつむ向く、その顔を窺のぞけば、おやおや泪なみだぐんで……

「ま呆あきれけえッちまわア！」と母親はあきれけエッちまツた。

「たンとお脹ふくれ」

とは云ツたが、又折れて、

「世話ア焼かせずと、お出でよ」

返答なし。

「ええ、も、じれッたい！ 勝手にするがいい！」

そのまま母親は奥坐舗へ還かえつてしまった。

これで坐舗へ還る綱も截きれた。求めて截ッて置きながら今更惜しいような、じれッたいような、おかしな顔をして暫く待ッていてみても、誰も呼びに来てもくれない。また呼びに来たて、おめおめ還られもしない。それに奥坐舗では想像おもひやりのない者共が打揃うちそろッて、嘶はなすやら、笑うやら……肝癪かんしゃく紛れにお勢は色鉛筆を執とッて、まだ真新しなすういんとんの文典の表紙をこすし擦り初めた。不運なはすういんとんの文典！

表紙が大方真青になッたころ、ふと縁側に足音……耳そばだを聳さかて、お勢ははッうろたと狼狽うろたえた……手ばしこく文典を開けて、倒さかしまになッているとも心附かで、ぴッたり眼で喰込んだ、とんと先刻から書見していたような面相かおつきをして。

すらりと障子が開く。文典を凝視めたままで、お勢は少し震

えた。遠慮気もなく無造作に入ッて来た者は云わでと知れた昇。

華美な、軽い調子で、「遁げたね、好男子が来たと思ッて」

と云わして置いて、お勢は漸く重そうに首を矯げて、世にも落着いた声で、さもにべなく、

「あの失礼ですが、まだ明日の支度をしませんから……」

けれども、敵手が敵手だから、一向利かない。

「明日の支度？ 明日の支度なぞはどうでも宜いさ」

と昇はお勢の傍に陣を取った。

「本統にまだ……」

「何をそう拗振たんだろう？ 令慈に叱られたね？ え、そう

でない。はてな」

と首を傾けるより早く横手を拍ッて、

「あ、ああわかつた。成な、成な、それで……それならそうと早く一言云えばいいのに……なんだろう大方かく申す拙者め奴に……ウ……ウと云ツたような訳なんだろう？ 大蛤おおはまぐりの前じゃア口が開あきかねる、——これやア尤もつともだ。そこで釣つり寄よせて置いて……ほんありがた山の蜀魂ほととぎす、一声漏らそうとは嬉うれしいぞえ嬉うれしいぞえ」と妙な身振りをして、

「それなら、実は此方こつちも疾とうからその気ありだから、それ白痴こけが出来合靴ぐつをかうのじゃないが、しっくり嵌はまるというもんだ。嵌はまると云えば、邪魔の入らない内だ。ちょっくり抱だツこのぐい極ぎめと往きやしよう」

と白らけた声を出して、手を出しながら、摺寄すりよツて来る。

「明日の支度が……」

とお勢は泣声を出して身を縮ませた。

「ほい間違ッたか。失敗、々々」

何を云ツても敵手あいてにならぬのみか、この上手を附けたら雨になりそうなので、さすがの本田も少し持あぐねたところへ、お鍋が呼びに来たから、それを幸いにして奥坐舗へ還ッてしまつた。

文三は昇が来たから安心を失くなして、起ッて見たり坐ッて見たり。我他彼此がたびしするのが薄々分るので、弥以堪いよいよもつてたまらず、無い用を拵こしらえて、この時二階を降りてお勢の部屋の前を通りかけたが、ふと耳を聳うつて、拔足をして障子の間隙ひずみから内を窺のぞいてはツと顔※お勢が伏臥うつぶしになツて泣…………い…………て…………

「エキスプラネーションはなしあい Explanation (示談)」と一時に胸で破裂した……

第十五回

エクスプレナーション（示談）はなしあい、と肚はらを極めてみると、大きに胸が透いた。己れの打解けた心で推測おしはかするゆえ、さほどに難事とも思えない。もウ些すこしの辛抱、と、哀かなむ可べし、文三は眠らでとも知らず夢を見ていた。

機会おりを窺みている二日目の朝、見知り越しの金貸が来てお政を連出して行く。時機到来……今日こそは、と領えりを延ばしていると知らずして帰ッて来たか、下女部屋の入口で「慈母おツかさんは？」と優しい声。

その声を聞くと均ひとしく、文三起上たちあがりは起上あったが、据すえた胸も率いざとなれば躍る。前へ一歩ひとあし、後へ一歩うしろ、躊躇ひとあしながら二階を降りて、ふいと縁を廻まわッて見れば、部屋にとばかり思ッていた

お勢が入口に柱にもた靠着れて、空を向上みあげて物思い顔……はツと思ッて、文三立ち止まッた。お勢も何心なく振り反ッてみて、急に顔を曇らせる……ツと部屋へ入ッて跡ぴッしやり。障子は柱と額はちあ合わせをして、二三寸跳ね返ッた。

跳ね返ッた障子を文三は恨めしみそうに凝視みつめていたが、やがて思い切りわるく二步ふたあし三步みあし。わななく手頭てさぎを引手へ懸けて、胸と共に障子を躍はらしながら開けてみれば、お勢は机の前に端坐かしこまッて、一心に壁と睨にらめ競くら。

「お勢さん」

と瀬せ蹈ふみをしてみれば、愛度あいど気けなく返答をしない。危あきに慣れなて縮めた胆きもを少し太くして、また、

「お勢さん」

また返答をしない。

この分なら、と文三は取越して安心をして、莞爾にこにこ々々しなから部屋へ入り、好き程の所に坐を占めて、

「少しお嘸はなしが……」

この時になつてお勢は初めて、首の筋でも蹙つまつたように、徐々そろそろ顔を此方こちらへ向け、可愛らしい眼に角を立てて、文三の様子を見ながら、何か云いたそうな口付をした。

今打とうと振上げた拳こぶしの下に立つたように、文三はひやりとして、思わず一生懸命にお勢の顔を凝視みつめた。けれども、お勢は何とも云わず、また向うを向いてしまつたので、やや顔を霽はらして、極きまりわるそうに莞爾にこにこ々々しながら、

「この間は誠にどう……」

もと云い切らぬうち、つと起き上つたお勢の体が……不意を打たれて、ぎよツとする、女帯が、友禅染ゆうぜんの、眼前めさきにちらちら……

はッと心附く……我を忘れて、しッかり捉とらえたお勢たもとの袂たもとを……

「何をなさるンです？」

と慳けん貪どんに云う。

「少しお嘸し……お……」

「今用が有ります」

邪慳じゃけんに袂を振払ッて、ついと部屋を出でてしまった。

その跡を眺ながめて文三は呆あきれた顔……「この期ごを外はずしては……」

と心附いて起ち上りてはみたが、まさか跡を慕ッて往いかれもせず、萎しおれて二階へ狐鼠こそこそ々と帰かえった。

「失敗しまった」と口へ出して後悔して後おくれ馳ばせに赤面。「今にお袋ふくろが帰ッて来る。『慈母さんこれこれの次第……』失敗しまった、失策しくじった」

千悔、万悔、臍ほぞを噬かんでいる胸元を貫くような午砲ごほうの響ひびき。それ

と同時に「御膳ごぜんで御座いますよ」。けれど、ほいきたと云ッて降りられもしない。二三度呼ばれて抛よんどころ無く、薄気味とりぜんわるわる降りてみれば、お政はもう帰ッていて、娘と取膳とりぜんで今食事最中。文三は黙礼をして膳に向ッた。「もう咄はなしたか、まだ咄はなさぬか」と思えば胸も落着かず、臆病おくびょうで好事ものずきな眼を額越ひたえごしにそッと親子へ注いでみればお勢は澄ました顔、お政は意味の無い顔、……咄はなしたとも付かず、咄はなさぬとも付かぬ。

寿命を縮めながら、食事をしていた。

「そらそら、気をお付けなね。小供じゃア有るまいし」

ふと轟とどろいたお政の声に、怖気おじけの附いた文三ゆえ、吃驚びっくりして首を矯あげてみて、安心した※お勢が誤まちまつて茶を膝ひざに滴こぼしたので有ッた。

氣を附けられたからと云うえこじな顔をして、お勢は澄ましている。拭き^ふもしない。「早くお拭きなね」と母親は叱^{しか}った。「膝の上へ茶を滴^{こぼ}して、ぽかんと見てえる奴が有るもんか。三歳児じゃア有るまいし、意久地の無いにも方図^{ほうず}が有ったもんだ」もはやこう成^なつては穩^{おだやか}に収まりそうもない。黙^{もく}つても視^みていられなくなつたから、お鍋は一とかたけ煩張^{ほおば}つた飯を鵜^う呑^{のみ}にして、「はッ、はッ」と笑^{わら}つた。同じ心に文三も「へ、へ」と笑^{わら}つた。

するとお勢は佶^{きつ}と振向いて、可畏^{こわ}らしい眼付をして文三を睨^ねめ出した。その容子^{ようす}が常で無いから、お鍋はふと笑い罷^やんでもツけな顔をする。文三は色を失^うつた……

「どうせ私は意久地が有りませんのさ」とお勢はじぶくりだし、誰に向^{むか}つて云うともなく。

「笑いたきやア沢山^{たん}お笑いなさい……失敬な。人の叱られるのが何処^{どこ}が可笑^{おか}しいンだろう？ げたげたげたげた」

「何だよ、やかましい！ 言艸^{いぐさ}云わずと、早々^{さつさ}と拭いておしま
い」

と母親は火鉢の布巾^{ふきん}を放^なげ出す。けれども、お勢は手にだも
触れず、

「意久地^{もうろく}がなくなッたッて、まだ自分が云ッたことを忘れるほど
盲録^{もうろく}はしません。余計なお世話だ。人の事よりか自分の事を考
えてみるがいい。男の口からも口も開^きかないなンぞッて云ッ
て置きながら……」

「お勢！」

と一句に力を籠^こめて制する母親、その声ももうこう成ッては
耳には入らない。文三を尻眼^{しりめ}に懸けながらお勢は切齒^{はぎし}りをして、

「まだ三日も経^たたないうちに、人の部屋へ……」

「これ、どうしたもんだ」

「だって私ア腹が立つものを。人の事を浮気者^{うわきもん}だなンぞツて罵^{ののし}ツて置きながら、三日も経^たたないうちに、人の部屋へつかつか入ツて来て……人の袂^{つかま}なンぞ捉^{つかま}えて、咄^{はなし}が有るだの、何だの、種々^{いろいろ}な事を云ツて……なんぼ何だツて余^{あんま}り人を軽蔑^{けいべつ}した……云う事が有るなら、茲^{ここ}処^こでいうがいい、慈母^{ちぼ}さんの前で云えるなら、云ツてみるがいい……」

留めれば留めるほど、尚^なお喚^{わめ}く。散々喚^{わめ}かして置いて、もう好い時分と成ツてから、お政^{あつち}が「彼方^{あつち}へ」と願^{あこ}でしやくる。しゃくられて、安心して人の顔ばかり視^みていたお鍋^{なべ}は初めて心附^{しづ}き、倉皇^{あわてはし}箸^しを棄^すててお勢^{せう}の傍^{そば}へ飛^とんで来て、いろいろに賺^すかして連れて行^いこうとするが、仲々素直^すに連れて行^いかれない。

「いいえ、放擲うつつちやツといとくれ。何だか云う事が有あるツていうンだから、それを……聞かないうちは……いいえ、私わたししや……あんまり人を輕蔑けいべつした……いいえ、其処そこお放しよ……お放しツてツたら、お放しよツ……」

けれども、お鍋の腕力には敵かなわない。無理無体に引立られ、がやがや喚きながらも坐舖ざしきを連れ出されて、稍々やや部屋へ収まツたようす。

となツて、文三始めて人心地が付いた。

いずれ宛擦あてこすりぐらいは有ろうとは思ツていたが、こうまでと

は思い掛けなかつた。晴天の霹靂へきれき、思いの外なのに度肝どぎもを抜かれて、腹を立てる違いさまも無い。脳は乱れ、神経は荒れ、心神錯乱しんじんして是非の分別も付かない。只たださしあつた面目なさに消えも入りたく思ふばかり。叔母を觀れば、薄気味わるくにやりとし

ている。このままにも置かれない、……から、余義なく叔母の方へ膝を押向け、おろおろしながら、

「実に……どうもす、す、済まんことをしました……まだお咄はいたしませんでしたが……一昨日阿勢おせいさんに……」

と云いかねる。

「その事なら、ちらと聞きました」と叔母が受取ってくれた。

「それはああした我儘者ですから、定めしお氣に障るような事もいいましたろうから……」

「いや、決してお勢さんが……」

「それやアもう」と一越いちおつ調子高に云ツて、文三を云い消してしまい、また声を並に落して、「お叱お叱んなさるも、あれの身の為めだから、いいけれども、只まだ婚嫁前よめいりまえの事ですから、あんな者もんでもね、余あんまり身体からだに疵きずの……」

「いや、私は決して……そんな……」

「だからさ、お云いなすツたとは云わないけれども、これからも有る事ことだから、おねがい申して置くですよ。わるくお聞きなすツちやアいけないよ」

ぴツたり釘くぎを打たれて、ぐツとも云えず、文三は只口惜くちおしそうに叔母の顔を視詰めるばかり。

「子を持つてみなければ、分らない事ことだけれども、女の子というものかたづは嫁けるまでが心配なものさ。それやア、人さまにやアあんな者もんをどうなツてもよさそうに思われるだろうけれども、親馬鹿とは旨うまく云ツたもンで、あんな者もんでも子だと思えば、有りもしねえ悪名あくみょうつけられて、ひよツと縁遠くでもなると、厭いやなものさ。それに誰にしろ、踏付られれやア、あンまり好い心持もしないものさ、ねえ、文さん」

もウ文三^{たま}堪りかねた。

「す、す、それじゃ何ですか……私が……私がお勢さんを踏付たと仰ッしやるンですかッ？」

「可^こ畏^わい事をお云いなさるねえ」とお政はおそろしい顔になつた。「お前さんがお勢を踏付たと誰が云いました？ 私ア自分にも覚えが有るから、只の世間咄に踏付られたと思うと厭なもンだと云ツたばかりだよ。それをそんな云いもしない事をいつて……ああ、なんだね、お前さん云い掛りをいうンだね？ 女だと思ツて、そんな事を云ツて、人を困らせる気だね？」

と層^{かさ}に懸ツて極^{きめつけ}付る。

「ああわるう御座ンした……」と文三は狼^あ狽^わてて謝^{あやま}罪ツたが、口^{くち}惜^おし涙が承知をせず、両眼に一杯溜^{たま}るので、顔を揚げていられない。差^{さし}俯^{うつむ}向いて「私が……わるう御座ンした……」

「そうお云いなさると、さも私が難題でもいいだしたように聞こゆるけれども、なにもそう遁^にげなくツてもいいじゃないか？ そんな事を云い出すからにやア、お前さんだツて、何か訳が無く^{なく}ちやア、お云いなさりもすまい？」

「私がわるう御座ンした……」と差俯向いたままで重ねて謝罪^{あやまつ}た。「全くそんな気で申した訳じやア有りませんが……お、お、思違^{おも}いをして……つい……失礼を申しました……」

こう云われては、さすがのお政ももう噛^か付きようが無いと見えて、無言で少選文^{しばらく}三を睨^ねめるように視ていたが、やがて、「ああ厭^{あいつ}だ厭^{かげ}だ」と顔を皺^{しか}めて、「こんな厭^{あいつ}な思^かいをするも皆^{みんな}彼奴^{あいつ}のお蔭^{かげ}だ。どれ」と起ち上ツて、「往ツて土性骨^{どしようぼね}を打挫^{ぶつくじ}いてやりましよう」

お政は坐舗を出てしまツた。

お政が坐舗を出るや否や、文三は今までの溜涙を一時にはらはらと落した。ただそのまま、さしうつむいたままで、良久らくの間、起ちも上がらず、身動きもせず、黙念として坐つていた。が、そのうちにお鍋が帰つて来たので、文三も、余義なく、うつむいたままで、力無さそうに起ち上り、悄悄我部屋へ戻ろうとして梯子段の下まで来ると、お勢の部屋で、さも意地張つた声で、

「私やアもう家に居るのは厭だ厭だ」

第十六回

あれほどまでにお勢母子の者に辱められても、文三はまだ園田の家を去る気になれない。但だ、そのかわり、火の消えたよ

うに、鎮^{しず}まッてしまい、いとど無口が一層口を開^きかなくなッて、呼んでも拂^は々しく返答をもしない。用事が無ければ下へも降りて来ず、只^{ただ}一間^まにのみ垂れ籠^こめてゐる。余り静かなので、つい居ることを忘れて、お鍋が洋燈^{ランプ}の油を注がずに置いてても、それをい^いつ吩咐^{ふんぷ}けて注がせるでもなく、油が無ければ無いで、真闇^{まつくら}な坐舗^{ざしき}に悄然^{しよんぼり}として、始終何事をか考^{かん}えてゐる。

けれど、こう静まッてゐるは表相^{うわべ}のみで、乞^ぎの胸臆^{きょうおく}の中へ立入ッてみれば、実^{じつ}に一方^{ひとかた}ならぬ變動。あたかも心が顛動^{てんどう}した如くに、昨日^{きのう}好^よいと思^{おも}つた事も今日は悪く、今日悪いと思^{おも}う事も昨日は好^よいとのみ思^{おも}つてゐた。情慾の曇^{くも}が取れて心の鏡が明かになり、睡入^{ねい}ッてゐた智慧^{ちえ}は俄^{にわか}に眼を覚まして決然として断案を下し出す。眼に見えぬ処^{ところ}、幽妙の処で、文三は——全くとは云^いわズ——稍^や々^や変生^{うまれかわ}ッた。

眼を改めてみれば、今まで^し為て来た事は夢か將^はた現^{うつ}か……と怪しまれる。

お政の浮薄、今更^{みあや}いうまでも無い。が、過^{あや}まつた文三は、——
 実に今まではお勢を見^み謬^{あや}まつていた。今となつて考えてみれば、
 お勢はさほど高潔でも無^{ない}。移氣、開^は豁^で、輕^{かる}躁^{はづみ}、それを高潔と取
 違えて、意味も無い外部の美、それを内部のと混同して、愧^{はず}か
 しいかな、文三はお勢に心を奪われていた。

我に心を動かしていると思つたが抑^{そもそ}も誤まりの緒^{いとぐち}。苟^{かりそ}
 めにも人を愛するといふからには、必ず先^まず互いに天性氣質を
 知りあわねばならぬ。けれども、お勢は初^{はじめ}より文三の人^なと為^なり
 を知つていねば、よし多少文三に心を動かした如^{けいせき}き形迹^{あり}が有^あば
 とて、それは真に心を動かしてゐたではなく、只ほんの一時感^か染^ぶ
 れていたので有つたろう。

感受の力の勝つ者は誰しも同じ事ながら、お勢は眼前に移り
 行く事や物やのうち少しでも新奇な物が有れば、眼早くそれを
 視て取ツて、直ちに心に思い染める。けれども、惜しいかな、
 殆ど見たままで、別に烹煉を加うるということとをせず、無造
 作にその物その事の見解を作ツてしまうから、自ら真相を看破
 めるといふには至らずして、動もすれば浅膚のみに陥る。そ
 れゆえ、その物に感染れて、眼色を変えて、狂い騒ぐ時を見れ
 ば、如何にも熱心そうに見えるものの、固より一時の浮想ゆえ、
 まだ真味を味わぬうちに、早くも熱が冷めて、厭氣になつて惜
 し気もなく打棄ててしまう。感染れる事の早い代りに、飽きる
 事も早く、得る事に熱心な代りに、既に得た物を失うことには
 無頓着。書物を買うにしても、そうで、買いたいとなると、矢
 も楯もなく買いたがるが、買ツてしまえば、余り読もしない。

英語の稽古けいこを初めた時も、またその通りで、初めるまでは一日じつをも争あつたが、初めてみれば、さほどに勉強べんきやうもしない。万事ばんじそうした氣風で有てみれば、お勢の文三に感染かぶれたも、また厭あいたも、その間まにからまる事情を棄てて、單にその心状をのみ繹たずねてみたら、恐らくはその様な事で有ろう。

かつお勢は開豁はくな氣質、文三は朴茂しふみな氣質。開豁が朴茂に感染おちつきれたから、何処どこか仮衣かりぎをしたように、恰そぐ当あわぬ所が有あつて、落着おちつきが悪かつたろう。悪ければ良くしようというが人の常情で有あつてみれば、仮令たとえ免職、窮愁、耻辱ちじよくなどという外部の激因が無いにしても、お勢の文三に対する感情は早晚一変せずにはいなかなつたろう。

お勢は實に輕躁かるはづみで有る。けれども、輕躁で無い者が輕躁な事を為しようとして為得ぬが如く、輕躁な者は輕躁な事を為しまいと思おもつ

たとて、なかなか為しずにはおられまい。軽躁みずかと自ら認めている者すら、尚おこうしたもので有ッてみれば、況ましてお勢おのれの如き、まだ我をも知らぬ、罪の無い処女が己おのれの氣質かに克かち得ぬとて、
 強あながちにそれを無理とも云えぬ。若もしお勢おのれを深く尤とがむ可べき者なら、
 較くらべて云えば、稍々やや学問あり智識ありながら、尚お軽躁けいそうを免が
 れぬ、譬たとえば、文三の如き者は（はれやれ、文三の如き者は？）
 何としたもので有ろう？

人事ひとごとで無い。お勢も悪るかつたが、文三もよろしく無かつた。

「人の頭の蠅はえを逐おうよりは先ず我頭わがこゝろのを逐え」——聞旧ききふるした諺ことわざも

今は耳新しく身に染しみて聞かれる。から、何事につけても、己おのれ
 一人いちにんをのみ責めて敢あえて叨みだりにお勢おのれを尤とがめなかつた。が、如何いかにに
 蟲負眼ひいきめにみても、文三の既に得た所謂いわゆる識認しにんというものをお勢が
 得ているとはどうしても見えない。軽躁けいそうと心附かねばこそ、身

を輕躁に持崩しながら、それを憂^うしとも思わぬ様子※醜穢^{ゆうかい}と認めねばこそ、身を不潔な境に処^おきながら、それを何とも思わぬ顔色^{かおつき}。これが文三の近来最も傷心な事、半夜夢覺めて燈^{とも}冷^ひかなる時、想^{おも}うてこの事に到れば、毎^{つね}に悵然^{ちようぜん}として太息^{たいそく}せられる。して見ると、文三は、ああ、まだ苦^なしみが嘗^なめ足りぬそうな！

第十七回

お勢のあくたれた時、お政は娘の部屋で、凡^{およ}そ二時間ばかりも、何か諄々^{くどくど}と教誨^{いゐ}せていたが、爾後^{それから}は、どうしたものか、急に母子^{おやこ}の折合^{よく}が好^{よく}なッて来た。取分けてお勢が母親に孝順^{やさしく}する、

折節には機嫌きげんを取るのかと思われるほどの事をも云う。親も子も睨ねめる敵かたきは同じ文三ゆえ、こう比周したしみあうもその筈はずながら、動静ようすを窺みるに、只ただそればかりでも無さそうで。

昇はその後ふつり遊びに来ない。顔を視みれば鬨いみ合う事にしていた母子ゆえ、折合はなが付いてみれば、咄はなしも無く、文三の影口も今は道尽いす、——家内いが何時いつからと無く湿しッて来た。

「ああ辛氣しんきなこと！」と一夜あるよお勢あきが欠なびまじりに云なッて泪なみだぐんだ。

新聞ひろいよみを拾読ひろしていたお政は眼鏡越こしに娘みを見遣やッて、「欠なびをして徒然つくねとしてゐることは無ないやアね。本でも出して来てお復習さらいなさい」

「復習さらえッて」とお勢は鼻声まゆになッて眉ひそを顰ひそめた。

「明日あしたの支度したくはもう済あしてしまあったものを」

「済ましッちまッたッて」

お政は復新聞またに取掛おっかッた。

「慈母さん」とお勢は何をか憶出して事有り氣に云ッた。「本田さんは何故なぜ来ないンだろう？」

「何故だか」

「憤おこッているのじゃないのだろうか？」

「そうかも知れない」

何を云ッても取合わぬゆえ、お勢も仕方なく口を箝つぐんで、少しばく物思わし氣に洋燈ランプを凝視みつめていたが、それでもまだ氣に懸ると見えて、「慈母さん」

「何だよ？」と蒼蠅うるさそうにお政は起直ッた。

「真個ほんとうに本田さんは憤ッて来ないのだろうか？」

「何を？」

「何をツて」と少し氣を得て、「そら、この間來た時、私が構わなかつたから……」

と母の顔を凝視た。

「なに人^{ひと}」とお政は莞爾^{にっこり}した、何と云ツてもまだおぼだなと云いたそうで。「お前に構ツて貰^{もら}いたいンで來なさるンじや有るまいシ」

「あら、そうじゃ無いンだけれどもさ……」

と愧^{はづ}かしそうに自分も莞爾^{にっこり}。

おほんという罪を作ツているとは知らぬから、昇が、例の通り、平氣な顔をしてふいと遣ツて來た。

「おや、ま、噂^{うわさ}をすれば影とやらだよ」とお政が顔を見るより饒舌^{しゃべ}り付けた。「今貴君^{あなた}の噂^{うわさ}をしていた所^{ところ}さ。え？ 勿論^{もちろん}さ、義理にも善くは云えないツさ……ははははは。それは情談だが、

きついお見限りですね。何処どこか穴でも出来たンじゃないかね？
出来たとえ？ そらそら、それだもの、だから鰻男うなぎおとしだというこ
とさ。ええ鰻どじょうで無くッてお仕合せ？ 鰻とはえ？ ……あ、ほ
ンに鰻と云えば、向う横町に出来た鰻屋ね、ちよいと異おつですッ
さ。久し振りだッて、奢おごらなくッてもいいよ。はははは」
鰻延しわのばしの太平楽、聞くに堪えぬというは平日の事、今宵こよいは
ちと情実わけが有るから、お勢は顔を鰻しかめるはさて置き、昇の顔を
横眼こぼでみながら、追蒐おつかけ引蒐ひつかけて高笑い。てれ隠かくしか、嬉うれしさ
の溢こぼれか当人に聞いてみねば、とんと分からず。

「今夜は大分御機嫌だが」と昇も心附いたか、お勢を調戯なぶりだす。
「この間はこうしたもんだッた？ 何を云ッても、『まだ明日あしたの
支度をしませんから』はッ、はッ、はッ、憶出すと可笑おかしくな
る」

「だッて、気分が悪かつたンですものを」と淫^{いや}哇^わしい、形容も出来ない身振り。

「何が何だか、訳が解りやアしません」

少ししらけた席の穴を填^{うめ}るためか、昇^にが俄^わかに問われもせぬ無沙汰^{ぶさた}の分疏^{いいわけ}をしだして、近ごろは頼まれて、一夜^よはざめに課長の所へ往^{いっ}て、細君と妹に英語の下稽古をしてやる、という。「いや、迷惑な」と言葉^{ことば}を足す。

と聞いて、お政にも似合わぬ、正直な、まうけに受けて、その不心得^{さど}を論^{ろん}す、これが立身の踏台になるかも知れぬと云ッて。けれども、御弟子が御弟子ゆえ、飛だ事まで教えはすまいかと思うと心配だと高く笑う。

お勢は昇が課長の所へ英語を教えに往くと聞くより、どうしたもののか、俄^{しお}かに萎^{しお}れだしたが、この時母親に釣^つられて淋^{さび}しい

顔で莞爾にっこりして、「令妹の名は何というの？」

「花とか耳とか云ツたッけ」

「余程出来るの？」

「英語かね？ なアに、から駄目だ。Thank you for your kind
だから、まだまだ」

お勢は冷笑の気味で、「それじゃアア……」

「アイイルアスクツュー I will ask to you」と云ツて今日教師に叱しかられた、それはこの
時忘れていたのだから、仕方が無い。

「ときに、これは」と昇はお政の方を向いて親指を出してみせ
て、「どうしました、その後？」

「居ますよまだ」とお政は思い切りて顔を皺しかめた。

「ずうずうしいと思ツてねえ！」

「それも宜いいが、また何かお勢に云いましたッさ」

「お勢さんに？」

「はア」

「どんな事を？」

おツとまかせと饒舌^{しやべ}り出した、文三のお勢の部屋へ忍び込むから段々と順を逐^おツて、剩^{あま}さず漏さず、おまけまでつけて。昇は顚^{あじ}を撫^なでてそれを聴いていたが、お勢が悪たれた一段となると、不意に声を放ツて、大笑に笑ツて、「そいつア痛かつたろう」

「なにソン時こそ些^{ちつと}ばかり可怪^{おかし}な顔をしたツけが、半日も経^たてば、また平気なものさ。なんと、本田さん、ずうずうしいじやア有りませんか！」

「そうしてね、まだ私の事を浮気者だなンぞツて」

「ほんとにそんな事も云たそうですがね、なにも、そんなに腹がたつなら、此^こ所^この家^こに居ないが宜じや有りませんか。私ならす

ぐ下宿か何かしてしまいまさア。それを、そんな事を云ツて置
 きながら、ずうずうしく、のべんくらりと、大飯を食らツて……
 ているとは何所どこまで押おしが重おもたいんだか数すうが知れないと思ツて」
 昇は苦笑いをしていた。暫時しばらくして返答とはなく、ただ、「何し
 ても困こッたもンだね」

「ほんとに困こッちまいますよ」

困こッている所へ勝手口で、「梅本でござい」。梅本というは近
 処の料理屋。「おや家うちでは……」とお政は怪しむ、その顔も忽たちまち
 莞爾にこにこ々々となツた、昇の吩咐いいつけとわかツて。

「それだからこの息子は可愛かわいいよ」。片腹痛い言ことまで云ツてやが
 て下女が持込む岡持の蓋ふたを取ツて見るよりまた意地の汚ことい言を
 いう。それを、今夜に限かぎて、平気で聞いているお勢どのの心持
 が解らない、と怪しんでいる間も有ればこそ、それツと炭を繼つ

ぐ、吹く、起こす、爛かんをつけるやら、鍋なべを懸けるやら、瞬またたく間に酒となつた。

あいのおさえのという蒼蠅うるさい事の無代り、洒落しやれ、担かつぎ合い、大口、高笑、都々逸どどいつの素すじぶくり、替歌なごの伝受等、いろいろの事が有つたが、蒼蠅うるさいからそれは略す。

刺身は調味つまのみになつて噎おくびで応答うけこたえをするころになつて、お政は、例の所へでも往きたくなつたか、ふと起たつて坐ざ蒲しきを出た。

と両人ふたり差向いになつた。顔を視合わせるとも無く視合みあわして、お勢はくすくすと吹出したが、急に真面目になつてちんと澄すます。

「これアおかしい。何がくすくすだろう？」

「何でも無いの」

「のぼる源氏のお顔を拝んで嬉しいか？」

「呆あきれてしまわア、ひよツとこ面の癖づらに」

「何だと？」

「綺麗きれいなお顔で御座いますということ」

昇は例の黙ッてお勢を睨ねめ出す。

「綺麗なお顔だというンだから、ほほほ」と用心しながら退却あとすざりをして、「いいじゃア……おッ……」

ツと寄ッた昇がお勢の傍そばへ……空くうで手と手が閃ひらめく、からまる……と鎮しずまッた所をみれば、お勢は何時いつか手を握られていた。

「これがどうしたの？」と平気な顔。

「どうもしないが、こうまず俘虜いけどりにしておいてどッこい……」と振放そうとする手を握りしめる。

「あちちち」と顔を皺しかめて、「痛い事をなさるねえ！」

「ちツとは痛いのださ」

「放^{ちようだい}して頂戴よ。よう。放さないとこの手に喰^{くい}付^{つき}ますよ」

「喰付たいほど思えども……」と平気で鼻歌。

お勢はおそろしく顔を皺^{しか}めて、甘たるい声で、「よう、放して頂戴と云えばねえ……声を立てますよ」

「お立てなさいとも」

と云われて一段声を低めて、「あら引^{一〇}。本田さんが引^二手なん

ぞ握^{二三}ツて引^{二三} ほほほ、いけません、ほほほ」

「それはさぞ引^{二三} お困りで御座いましょう引^{一四}」

「本統に放して頂戴よ」

「何故^{なげ}? 内海に知れると悪いか?」

「なにあんな奴に知れたツて……」

「じゃ、ちツとこうしてい給^{たま}え。大丈夫だよ、淫褻^{いたずら}なぞする本

田にあらずだ……が、ちよツと……」と何やら小声で云ツて、

「……位ぐらいは宜よろかろう？」

するとお勢は、どうしてか、急に心から真面目になつて、「あたしやア知らないからいい……私わたししやア……そんな失敬な事ツて……」

昇は面白そうにお勢の真面目くさつた顔を眺ながめて莞爾にこにこ々々しながら、「いいじゃないか？　ただちよいと……」

「厭いやですよ、そんな……よッ、放して頂戴と云えばねえッ」

一生懸命に振放そうとする、放させまいとする、暫時争ツていると、縁側に足音がする、それを聞くと、昇は我からお勢の手を放はなして大笑に笑い出した。

ずッとお政が入ッて来た。

「叔母さん叔母さん、お勢さんを放飼はなはいけないよ。今も人をつかま捉つかえて口説くどいて口説いて困らせ抜いた」

「あらあらあんな虚言を吐いて……非道い人だこと！……」
昇は天井を仰向いて、「はッ、はッ、はッ、はッ」

第十八回

一週間と経ち、二週間と経つ。昇は、相かわらず、繁々遊びに来る。そこで、お勢も益々親しくなる。

けれど、その親しみ方が、文三の時とは、大きに違う。かの時は華美から野暮へと感染れたが、この度は、その反対で、野暮の上塗が次第に剥げて漸く木地の華美に戻る。兩人とも顔を合わせれば、只戯ぶれるばかり、落着いて談話などした事更に無し。それも、お勢に云わせれば、昇が宜しく無いので、此方で真面目にしているものを、とぼけた顔をし、剽軽な事を云い、

軽く、氣無しに、調子を浮かせてあやなしかける。それ故、念に掛けて笑うまいとはしながら、おかしくて、おかしくて、どうも堪らず、唇を嚙締め、眉を釣上げ、真赤になつても耐え切れず、つい吹出して大事の大事の品格を落してしまう。果は、何を云われんでも、顔さえ見れば、可笑しくなる。「本当に本田さんはいけないよ、人を笑わしてばかりいて」。お勢は絶えず昇を憎がった。

こうお勢に對うと、昇は戯れ散らすがお政には無遠慮といううちにも、何処かしつとりした所が有つて、戯言を云わせれば、云いもするが、また落着く時には落着いて、随分真面目な談話もする。勿論、真面目な談話と云つたところで、金利公債の話、家屋敷の売買の噂、さもなくば、借家人が更らに家賃を納れぬ苦情——皆つまらぬ事ばかり。一つとしてお勢の耳には

面白くも聞こえないが、それでいて、ふたり両人の話している所を聞けば、何か、はなし談話の筋の外に、男女交際、きようふう婦人矯風の議論よりは、はるか遙に優りて面白い所が有ッて、それをめかお眼顔で話合ッてたの娛しんでゐるらしいが、お勢にはさっぱり解らん。が、余程面白いと見えて、その様な談話はなしが始まると、お政は勿論、昇までが平生の愛嬌あいぎようは何処へやら遣ッて、お勢の方は見向もせず、一心になッて、あるい或は公債を書替える極簡略な法、或は誰も知ッてゐる銀行の内幕、またはお得意はこの課長の生計の大した事を喋々と話す。お勢は退屈で退屈で、あく欠びばかり出る。起上ッて部屋へ帰ろうとは思ひながら、つい起そそくたちれて潮合を失い、まじりまじり思慮の無い顔をして面白おもしろくもない談話を聞いているうちに、いつしか眼が曇りふたり両人の顔がかすんで話声もやや遠く籠ッて聞こえる……「なに、十円さ」と突然鼓膜こまくを破る昇の声に駭かさ

れ、震え上る拍子に眼を看開いて、忙わしく兩人の顔を窺えば、
 心附かぬ様子、まずよかつたと安心し、何喰わぬ顔をしてまた
 兩人の話を聞出すと、また眼の皮がたるみ、引入れられるよう
 な、快い心地になつて、睡るともなく、つい正体を失う……誰か
 に手暴く揺ぶられてまた愕然として眼を覚ませば、耳元にどつ
 と高笑の声。お勢もさすがに莞爾して、「それでも睡いんだもの
 を」と睡そうに分疏をいう。またこういう事も有る※前のよう
 に慾張った談話で兩人は夢中になつてゐる※お勢は退屈やら、
 手持無沙汰やら、いびつに坐りてみたり、危坐ツてみたり。耳
 を借してゐては際限もなし、そのうちにはまた睡氣がさしそう
 になる、から、ちと談話の仲間入りをしてみようとは思ふが、一

人が口を箝めば、一人が舌を揮い、喋々として両つの口が結ば
 るという事が無ければ、嘴しを容れたいにも、更にその間隙が
 見附からない。その見附からない間隙を漸やく見附けて、此処
 ぞと思えば、さて肝心のいうことが見附からず迷つくうちには
 や人に取られてしまう。経験が知識を生んで、今度はいふべき
 事も予て用意して、じれッたそうに挿頭で髪を掻きながら、漸
 くの思で間隙を見附け、「公債は今幾何なの？」と嘴を挿さんで
 みれば、さて我ながら唐突千万！無理では無いが、昇も、母
 親も、胆を潰して顔を視合わせて、大笑に笑い出す。——今の
 は半襟の間違いだろう。——なに、人形の首だッさ。——違え
 ねえ。またしても口を揃えて高笑い。——あんまりだから、い
 い！とお勢は膨れる。けれど、膨れたとて、機嫌を取られれ
 ば、それだけ畢竟安目にされる道理。どうしても、こうしても、

敵^{かな}わない。

お勢はこの事を不平に思ッて、或は口を聞かぬと云い、或は絶交すると云ッて、恐喝^{おど}してみたが、昇は一向平気なもの、なかなかそんな甘手ではいかん。圧制家^{デスポット}、利己論者^{イゴイスト}と口では呪^{のろ}いながら、お勢もついその不屈者と親しんで、玩ばれると知りつつ、玩ばれ、調戯^{なぶ}られると知りつつ、調戯^{なぶ}られている。けれど、そうはいうものの、戯^{ふざ}けるも満更でも無いと見えて、偶々^{たまたま}昇が、お勢の望む通り、真面目にしていれば、さてどうも物足りぬ様子で、此方^{こちら}から、遠方から、危うがりながら、ちょっかいを出してみろ。相手にならねば、甚^{はなはだ}機嫌^{きげん}がわるい※¹²から、余義なくその手を押さえそうにすれば、忽^{たちま}ちきやツきやツと軽忽^{きようこつ}な声を発し、高く笑い、遠方^にへ逃げ、例の睚^{まぶち}の裏を返して、べべべー

という。総すべてなぶられても厭いやだが、なぶられぬも厭、どうしましよう、といいたそうな様子。

母親は見ぬ風ふうをして見落しなく見ておくから、齒癢はがゆくてたまらん。老功の者の眼から覩れば、年若の者のする事は、総てしだらなく、手緩てぬるくて更に埒うちが明かん。そこで耐え兼て、娘に向い、嚴おびそかに云い聞かせる、娘の時の心掛を。どのような事かと云えば、皆多年の実験から出た交際の規則で、男、取分け若い男という者はこういう性質のもので有るから、若し情談をいいかけられたら、こう、花を持たせられたら、こう、弄なぶられたら、こう待遇あしらうものだ、など、いう事であるが、親の心子知らずで、こう利益ためを思つて、云い聞かせるものを、それをお勢は、生意気な、まだ世の態さまも見知らぬ癖に、明治生れの婦人は芸娼妓げいしやうぎで無いから、男子に接するにそんな手管てくだはいらない

とて、鼻の頭さきで待遇あしらッていて、更に用いようもしない。手管では無い、これが娘の時の心掛というものだと言ひ聞かせても、その様な深遠な道理はまだ青いお勢には解らない。そんな事は女大学にだッて書いて無いと強情を張る。勝手にしなと肝癪かんしゃくを起こせば、勝手にしなくッてと口答くちがたえをする。どうにも、こうにも、なッた奴じゃない！

けれど、母親が氣を揉もむまでも無く、幾程いくほどもなくお勢は我から自然に様子を変えた。まずその初はじめを云えば、こうで。

この物語の首はじめにちよいと噂をした事の有るお政の知己しりびと「須賀町のお浜」という婦人が、近頃ふいふに娘をさる商家へ縁付るとて、それを風聴ふういちようかたがたその娘を伴つれて、或日お政を尋ねて来た。娘というはお勢に一ツ年下で、姿色きりようは少し劣る代り、遊芸は一通り出来て、それでいて、おとなしく、愛想あいそがよくて、お政に云

わせれば、如才の無い娘で、お勢に云わせれば、旧弊な娘、お
 勢は大嫌い、母親が臍負にするだけに、尚お一層この娘を嫌う
 ※但しこれは普通の勝心のさせる業ばかりではなく、この娘の
 蔭で、おりおり高い鼻を擦られる事も有るからで。縁付ると聞
 いて、お政は羨ましいと思う心を、少しも匿さず、顔はおろか、
 口へまで出して、事々しく慶びを陳べる。娘の親も親で、慶び
 を陳べられて、一層得意になり、さも誇貌に媚の財産を数え、
 または支度に費った金額の総計から内訳まで細々と計算をして
 聞かせれば、聞く事毎にお政はかつ驚き、かつ羨やんで、果は、
 どうしてか、婚姻の原因を娘の行状に見出して、これというも
 平生の心掛がいいからだ、口を極めて賞める、嫁る事が何故
 そんなに手柄であろうか、お勢は猫が鼠を捕った程にも思ッて

いないのに！ それをその娘は、耻はづかしそうに俯うつむ向きは俯向き
 ながら、己れも仕合と思ひ顔で高慢は自ら小鼻おのずかに現われている。
 見ていられぬ程に醜態を極める！ お勢は固もとより羨ましくも、
 妬ねたましくも有るまいが、ただ己れ一人でそう思ッているばかり
 では満足が出来んと見えて、おりおりさも苦々しそうに冷笑あざわらッ
 てみせるが、生憎あやにく誰も心附かん。そのうちに母親が人の身の上
 を羨やむにつけて、我身の薄命を歎かこち、「何処いづかの人」が親を蔑ないがし
 ろにしてさらにいうことを用いず、何時いつ身を極きめるといふ考も
 無いとて、苦情をならべ出すと、娘の親は失礼な、なにこの娘こ
 の姿色さきようなら、ゆくゆくは「立派な官員さん」でも夫に持ッて親
 に安樂をさせることで有ろうと云ッて、嘲あざけるように高く笑う。
 見よう見真似に娘までが、お勢の方を顧みて、これもまた嘲け
 るようにほほと笑う。お勢はおそろしく赤面してさも面目なげ

に俯向いたが、十分も経たぬうちに座ざ舗しきを出てしまった。我部屋へ戻りてから、始めて、後馳おくればせに憤然やつきとなつて「一生お嫁になんぞ行くもんか」と奮激した。

客は一日打くつろいで話して夜よに入いつてから帰った。帰った後に、お政はまた人の幸福しあわせをいいだして羨やむので、お勢はもはや勘弁がならず、胸に積る昼間からの鬱憤うつぶんを一時に霽はらそうという意気込で、言葉鋭く云いまくつてみると、母の方にも存外な道理が有つて、ついにはお勢も成程と思つたか、少し受う大け刀だちになつた。が、負けじ魂から、滅多には屈服せず、尚おかれこれと諍論いらいツている。そのうちにお政は、何か妙案を思い浮べたように、俄にわかに顔色がんしよくを和げ、今にも笑い出しそうな眼付をして、「そんな事をお云いだけでも、本田さんなら、どうだえ？ 本田さんでも、お嫁に行くのは厭かえ？」という。「厭なこつた、」

と云ツて、お勢は今まで顔へ出していた思慮を^{ことごと}尽く内へ引込ましてしまふ。「おや、何故だろう。本田さんなら、いいじゃないか、ちよいと気が利^きいていて、小金も少^{ちつ}とは持つていなさりそうだし、それに第一男が好くツて」「厭なこツた」「でも、若し本田さんがくれると云ツたら、何と云おう?」、と云われて、お勢は少し躊躇^{たゆた}ツたが、狼狽^{うろた}えて、「い……いやなこツた」。お政はじろりとその様子をみて、何を思ツてか、高く笑ツたばかりで、再び娘を詰^{なじ}らなかつた。その後は^{のち}お勢は故^{こと}らに何喰わぬ顔を作ツてみて、どうも旨^{うま}くいかぬようすで、動^やもすれば沈^{しづ}んで、眼を細くして何処か遠方を凝視^{みつ}め、恍惚^{うつとり}として、夢現^{ゆめうつ}の境に迷うように見えたことも有ツた。「十一時になるよ」と母親に気を附けられたときは、夢の覚めたような顔をして溜息^{ためいき}さえ吐^ついた。

部屋へ戻つても、尚お氣が確かにならず、何心なく寐衣ねまぎに着代えて、力無さそうにベツたり、床の上へ坐はつたまま、身動みどうもしない。何を思おもっているのか？ 母の端はしなく云いつた一言ひとことの答を求めて求め得えんのか？ 夢のように、過ぎこした昔へ心を引戻して、これまで文三如かき者に拘かつて、良縁りやうゑんをも求めず、徒いたずらに歲月としつきを送おくつたを惜めしい事に思おもっているのか？ 或は母の言葉の放はなつた光りに我身を縈める暗黒やみを破やぶられ、始めて今が浮沈しおぞかいの潮界しうかい、一生の運の定まる時と心附おもいたのか？ 抑そもそもまた狂きやうい出す妄想ぼうそうにつれられて、我知らず心を華はなやかな、娯たのしい未来へ走はしらし、望のぞみを事實じじつにし、現うつに夢を見て、嬉うれしく、畏おそろしい思おもをしていのか？ 恍惚うつとりとした顔に映うつる内の想おもいが無いから、何を思おもっていることかすこしも解と解とらないが、とにかく良久やうしばらくの間は身動みどうをもしなかつた、そのまま十分ばかり経へつたころ、忽然こつぜんとして眼

が嬉しそうに光り出すかと思ふ間に、見る見る耐えようにも耐
 え切れなさそうな微笑が口頭くちもとに浮び出て、頬ほおさえいつしか紅べにを
 潮さす。閉じた胸の一時に開けた為め、天成の美も一段の光を添
 えて、艶えんなうちにも、何処か豁然からりと晴やかに快さそうな所も有
 りて、宛然蓮の花の開くを観るように、見る眼も覚めるばかり
 で有った。突然お勢は跳ね起きて、嬉しさがこみあげて、徒ただは
 坐まッていられぬように、そして柱に懸けた薄暗い姿見むかに對い、
 模糊ぼんやり写る己おのが笑顔を覗のぞき込んで、あやすような真似をして、片
 足浮かせて床の上でぐるりと回り、舞踏でもするような運歩あしどりで
 部屋うちの中を跳ね廻うッて、また床の上へ来るとそのまま、其処そこへ
 臥倒ねたおれる拍子に手ばしこく、枕まくらを取かッて頭かしらに宛あてがい、渾身みうちを揺
 りながら、締殺きろしたような声を漏らして笑い出して。

この狂氣きちがいじみた事の有った当坐は、昇が来ると、お勢は臆おくす

るでもなく耻はじらうでもなく只何となく落着が悪いようで有った。
 何か心に持つているそれを悟られまいため、やはり今までどお
 り、おさなく、愛度あどけ気なく待遇あしらおうと、影では思うが、いざ昇と
 顔を合せると、どうももうそうはいかないと云いそうな調子で。
 いう事にさしたる変りも無いが、それをいう調子に何処か今ま
 でに無いところが有って、濁って、厭味を含む。用も無いに坐
 舗を出たり、はいッたり、おかしくも無いことに高く笑ッたり、
 誰やらに顔を見られてゐるなと心附きながら、それを故意わざと心
 附かぬ風ふうをして、磊落らいらくに母親に物をいッたりするはまだな事、
 昇と眼を見合わして、狼狽うろたえて横へ外らしたことさえ度々有たびたびった。
 総すべて今までとは様子が違う、それを昇の居る前で母親に怪しま
 れた時はお勢もぱつと顔を赧あかめて、如何いかにも極きまりが悪そうに見
 えた。が、その極り悪そうなものつしか失うせて、その後は、昇

に飽いたのか、珍らしくなくなつたのか、それとも何か争いさかいでもしたのか、どうしたのか解らないが、とにかく昇が来ないとしても、もう心配もせず、来たとして、一向構わなくなつた。以前は鬱々としてゐる時でも、昇が来れば、すぐ冴さえたものを、今は、その反対で、冴さえてゐる時でも、昇の顔を見れば、すぐ顔を曇らして、冷淡になつて、余り口数もきかず、総て仲のわるい従兄妹同士いとこのように、遠慮気なく余所々よそよそしく待遇もてなす。昇はさして変らず、尚お折節には戯言ざれごとなど云い掛けてみるが、云ツても、もうお勢が相手にならず、勿論嬉しそうにも無く、ただ「知りませんよ」と彼方あちら向くばかり。それ故ゆゑに、昇の戯ざればみも鋒尖ほこぎが鈍ツて、大抵は、泣眠なきねい入るように、眠入ねいッてしまふ。こゝまで昇を冷遇する。その代り、昇の来ていない時は、おそろしい冴さえようで、誰彼の見さかいなく戯たわぶれかかつて、詩吟する

やら、唱歌するやら、いやがる下女をとらえて舞踏の真似をするやら、飛んだり、跳ねたり、高笑をしたり、さまざまに騒ぎ散らす。が、こう冴えてゐる時でも、昇の顔さえ見れば、不意にまた眼の中を曇らして、落着いて、冷淡になつて、しまふ。

けれど、母親には大層やさしくなつて、騒いで叱られたとて、鎮まりもしないが、悪まれ口もきかず、却つて憎気なく母親にまでだれかかるので、母親も初のうちには苦い顔を作つていたものの、竟には、どうかこうか釣込まれて、叱る声を崩して笑つてしまふ。但し朝起される時だけはそれは例外で、その時ばかりは少し頬を脹らせる※¹⁴が、それもその程が過ぎれば、我から機嫌を直して、華やいで、時には母親に媚びるのかと思うほどの事をもいう。初の程はお政も不審顔をしていたが、慣れれば、

それも常となつてか、後には何とも思わぬ様子で有つた。

そのうちにお勢が編物の夜稽古よげいこに通いたいといいだす。編物

よりか、心易やすい者やに日本の裁縫を教える者が有るから、昼間其所そこ

へ通えと、母親のいうを押反して、幾度いくたびか幾度か、掌てを合せぬ

ばかりにして是非に編物をと頼む。西洋の処女なら、今にも母

の首にしがみ付いて頬の辺あたりに接吻せつぶんしそうに、あまえた強請ねだるよ

うな眼付で顔をのぞかれ、やいやいとせがまれて、母親は意久

地なく、「ええ、うるさい！　どうなと勝手におし」と賺すかされて

しまつた。

編物の稽古は、英語よりも、面白いとみえて、隔晩の稽古を

楽しみにして通う。お勢は、全体、本化粧が嫌いで、これまで、

外出そとでするにも、薄化粧ばかりしていたが、編物の稽古を初めて

からは、「皆みんなが大層作ツて来るから、私一人なにしない……」と

咎^{とが}める者も無いに、我から分^い疏^{いわけ}をいいいい、こつてりと、人^{じん}品^{びん}を落^おすほどに粧^{つく}ッて、衣服^{いふく}も成^{なり}たけ美^よいのを撰^{えら}んで着^きて行く。夜だから、此^こ方^ちので宜^いいじやないかと、美^{うつく}しくない衣服^{いふく}を出^でされれば、それを厭^{いと}とは拒^きみはしないが、何^{なん}となく機^き嫌^{けん}がわるい。

お政はそわそわして出^でて行く娘^{むすめ}の後^{あと}姿^{すがた}を何^{なん}時^{とき}も請^う難^げくそうに目^め送^{おく}る……

昇^{のぼ}は何時^{なんじ}からともなく足^{あし}を遠^{とほ}くしてしま^{しま}った。

第十九回

お勢^{せい}は一旦^{いったん}は文^{ぶん}三^{さん}を仿^はた^{した}なく辱^はず^{かし}めはしたものの、心^{こころ}にはさほどにも思^{おも}わんか、その後^{のち}はただ冷^{ひや}淡^{たん}なばかりで、さして辛^{つら}くも当^{あた}

らん※総すべが、それに引替えて、お政はますます文三を憎んで、
 始終出て行けがしに待遇もてなす。何か用事が有りて下座敷へ降りれ
 ば、家内中寄集りて、口を解よりこそいて面白ほどそうに雑談ぞうだんなどしている
 時でも、皆云い合したように、ふと口を箝つぐんで顔を曇らせる、と
 いううちにも取分けてお政は不機嫌ふきげんな体ていで、少し文三の出よう
 が遅ければ、何を愚頭ぐずぐず々々していると云わぬばかりに、此方こちらを
 睨ねめつけ、時には氣を焦いらッて、聞えよがしに舌鼓したつづみなど鳴らして
 聞かせる事も有る。文三とても、白痴でもなく、瘋癲ふうてんでもなけ
 れば、それほどにされんでも、今ここで身を退ひけば眉まゆを伸べて
 喜ぶ者がそこらに沢山あることに心附かんでも無いから、心苦
 しいことは口に云えぬほどで有る、けれど、尚なお園田の家を辞

し去ろうとは思わん。何故なにゆえにそれほどまでに園田の家を去りたくないのか、因循な心から、あれほどにされても、尚おそのよ
うな角立つた事は出来んか、それほどになつても、まだお勢に
心が残るか、抑そもそもまた、文三の位置では陥り易やすい謬あやまり、お勢との
関かんけい繋けいがこのままになつてしまつたとは情談らしくてそうは思え
んのか？ てこれ等の事は多少は文三の差はじを忍んで尚お園田の
家に居る原因となつたに相違ないが、しかし、重な原因ではな
い。重な原因というは即すなわち人情の二字、この二字に羈しば絆はられて文
三は心ならずも尚お園田の家に顔を皺しかめながら留とどままつてゐる。
心を留とどめて視みなくとも、今の家内の調子がむかしとは大に相
違ちがはるは文三にも解る。以前まだ文三がこの調子を成す一つの
要素で有つて、人々が眼を見合しては微笑し、幸福といわずし
て幸福を楽たのんでいたころは家内全体に生温なまぬるい春風が吹渡つたよ

うに、総て穩おだやかに、和いで、沈着おちついて、見る事聞く事が尽く自然に
 適かなッていたように思われた。そのころの幸福は現在の幸福では
 なくて、未来の幸福の影を楽しむ幸福で、我も人も皆何か不足
 を感じながら、強あながちにそれを足そうともせず、却かえつて今は足ら
 ぬが当然と思つていたように、急せかず、騒がず、優游ゆうゆうとして時
 機の熟するを俟まつていた、その心の長閑のどかさ、寛ゆるやかさ、今憶い出し
 ても、閉じた眉が開くばかりな……そのころは人々の心が期せ
 ずして自ら一致し、同じ事を念おもい、同じ事を楽しんで、強あながちそれ
 を匿かくそうともせず、また匿くすまいともせず※胸16に城郭を設
 けぬからとて、言つて花の散るような事は云わず、また聞こう
 ともせず、まだ妻でない妻、夫でない夫、親で無い親、——も、
 こう三人集つたところに、誰が作り出すともなく、自らに清く、

穏な、優しい調子を作り出して、それに随つれて物を言い、事をし
 たから、人々があたかも平生の我よりは優まさつたようで、お政の
 ような婦人でさえ、尚お何処どこか頼もし気な所が有つたのみなら
 ず、却つてこれが間に介はさまらねば、余り両人ふたりの間が接近しすぎ
 て穏さを欠くので、お政は文三等の幸福を成すに無なく叶かなわぬ人
 物とさえ思われた。が、その温あたかな愛念も、幸福な境界きょうがいも、優し
 い調子も、嬉うれしそうに笑う眼元も口元も、文三が免職になつて
 から、取分けて昇が全く家内へ立入つたから、皆突然に色さが褪
 め、気が抜けだして、遂ついに今日この頃のこの有様となつた……
 今の家内の有様を見れば、もはや以前のような和ないだ所も無
 ければ、沈おち着いた所もなく、放なげ心に見渡せば、総はなて華なかに、賑にぎか
 で、心配もなく、気あつかいも無く、浮う々として面白そうに見
 えるものの、熟つら々視れば、それは皆衣物きもので、裸はだ体にすれば、見

るも汚けがらわしい私欲、貪婪どんらん、淫褻いんせつ、不義、無情の塊かたまりで有る。以前人々の心を一致おのれした同情も無ければ、私心の垢あかを洗った愛念もなく、人々己一個の私をのみ思わたくしつて、己が自恣おのに物を言い、己が自恣たちよるまに挙動あざむう※欺あざむいたり、欺かれたり、戯言ぎげんに託たくして人の意を測はかつてみたり、二つ意味の有る言ことを云つてみたり、疑うたがつてみたり、信じてみたり、——いろいろさまざまに不徳を尽す。

お政は、いうまでもなく、死灰しかいの再び燃えぬうちに、早く娘を昇に合せて多年の胸の塊を一時におろしてしまいたい、娘が、思うように、如才はがゆなくたちまわらんで、それで齒癢はがゆがつて氣を揉もみ散らす。昇はそれを承知うかつしているゆえ、後の面倒のちを慮おもつて迂濶うかつに手は出さんが、毘わなのと知りつつ、油鼠あぶらねずみの側そばを去られん老狐ふるぎつねの如ごとくに、遲疑ちぎしながらも、尚おお勢の身边そばを廻まわつて、

横眼で睨にらんでは舌舐したねふりをする（文三は何故か昇の妻となる者は必ず愚おろかで醜い代り、権貴な人を親に持った、身柄みがらの善い婦人とのみ思いこんでいる）。お政は昇の意こころを見抜いてい、昇もまたお政の意を見抜いている※¹⁸しかも互に見抜れていると略ほぼ心附いている。それゆえに、故ことらに無心な顔を作り、思慮の無い言ことを云い、互に瞞まんぢやく着しようと力つとめあうものの、しかし、双方共力は牛角ごかくのしたたかものゆえ、優まさりもせず、劣おとしもせず、挑いどみ疲れて今はすこし睨にらみあい合の姿となった。総てこれ等の動静ようすは文三も略ほぼ察している。それを察しているから、お勢がこのような危い境に身を処おきながら、それには少しも心附かず、私欲と淫欲とが爍れきして出来で来た、軽く、浮いた、汚けがらわしい家内の調子に乘せられて、何心なく物を言つては高笑たかわらいをする、その様子を見ると、手

を束ねて安座していられなくなる。

お勢は今甚だしく迷っている、豕を抱いて臭きを知らずとかで、境界の臭みに居ても、おそらくは、その臭味がわかるまい。今の心の状を察するに、譬えば酒に酔った如くで、気は暴ていても、心は妙に味んでいるゆえ、見る程の物聞く程の事が眼や耳やへ入っても底の認識までは届かず、皆中途で立消をしてしまふであらう※また徒だ外界と縁遠くなつたのみならず、我内界とも疎くなつたようで、我心ながら我心の心地はせず、始終何か本体の得知れぬ、一種不思議な力に誘われて言動作息するか、我にも我が判然とは分るまい、今のお勢の眼には宇宙は鮮いで見え、万物は美しく見え、人は皆我一人を愛して我一人の

ために働いているように見えよう※若²⁰し顔を皺^{しか}めて溜息^{ためいき}を吐く
 者が有れば、この世はこれほど住みよいに、何故人はそう住み
 憂^うく思ふか、殆^{ほとん}どその意^{こころ}を解し得まい※²¹また人の老やすく、色
 の衰え易いことを忘れて、今の若さ、美しさは永劫^{えいごう}続くように
 心得て未来の事などは全く思ふまい、よし思つたところで、華
 かな、耀^{かがや}いた未来の外は夢にも想像に浮ぶまい。昇に狎^なれ親
 でから、お勢は故^{もと}の吾^なを亡くした、が、それには自分も心附く
 まい※²²お勢は昇を愛しているようで、実は愛してはいず、只昇
 に限らず、総て男子に、取分けて、若い、美しい男子に慕われ
 るのが何^{なに}となく快いので有ろうが、それにもまた自分は心附い

20 白ゴマ点、 211-9

21 白ゴマ点、 211-10

22 白ゴマ点、 211-13

ていまい。これを要するに、お勢の病は外から来たばかりではなく、内からも発したので、文三に感染かぶれて少し畏縮いじけた血氣が今外界の刺激を受けて一時に暴あれだし、理性の口をも閉じ、認識の眼を眩くらませて、おそろしい力を以て、さまざまの醜態に奮見するので有ろう。若しそうなれば、今がお勢の一生中もつとで尤も大切な時※能23く今の境界を渡り課おせれば、この一時ひとときにさまざまの経験を得て、己の人と為なりをも知り、所謂いわゆる放心を求め得て始めて心でこの世を渡るようになろうが、若し躓つまずけばもうそれまで、倒たおれたままで、再び起上る事も出来まい。物のうちの人となるもひとときこの一時、人の中の物となるもまたこの一時※今24が浮沈の潮界しおぞかい、尤も大切な時で有るに、お勢はこの危い境を放心うっかりして渡ッてい

23 白ゴマ点、212-2

24 白ゴマ点、212-5

て何時^{いつ}眼が覚めようとも見えん。

このままにしては置けん。早く、手遅れにならんうちに、お勢の眠^{ねぶ}った本心を覚まさなければならん、が、しかし誰がお勢のためにこの事に当ろう？

見渡したところ、孫兵衛は留守、仮^た令居^{とい}たとて役にも立たず、お政は、あの如く、娘を愛する心は有りても、その道^{みち}を知らんから、娘の道心を縊^{しめころ}殺そうとしていながら、しかも得意顔^{したりがお}でいるほどゆえ、固^{もと}よりこれは妨^{さまたげ}になるばかり、ただ文三のみは、愚昧^{ぐまい}ながらも、まだお勢よりは少しは智識も有り、経験も有れば、若しお勢の眼を覚ます者が必要なら、文三を措^{たれ}いて誰がなろう？

と、こうお勢を見棄^{みすて}たくなばかりでなく、見棄^{むし}ては寧ろ義理^{そむ}に背^{こり}くと思えば、凝性^{こりしょう}の文三ゆえ、もう余事は思ッていられ

ん、朝夕只この事ばかりに心を苦めて悶^{もたえくるし}苦んでゐるから、あたかも感覚が鈍くなつたようで、お政が顔を皺^{しか}めたとて、舌鼓を鳴らしたとて、その時ばかり少し居辛^{いづら}くおもうのみで、久しくそれに拘^{かかずら}つてはいられん。それでこゝう邪魔にされると知りつつ、園田の家を去る気にもなれず、いまに六畳の小座蒲^{こざしき}に気を詰らして始終壁に對^{むか}つて歎息^{たんそく}のみしているのだ。

歎息のみしているのだ、何故なればお勢を救おうという志は有つても、その道を求めかねるから。「どうしたものだろう？」という問は日に幾度^{いくたび}となく胸に浮ぶが、いつも浮ぶばかりで、答を得ずして消えてしまい、その跡に残るものは只不満足の三字。その不満足之苦^のを脱^{のが}れようと気をあせるから、健康^{すこやか}な智識は縮んで、出過^{ぼうそう}た妄想^{あれだ}が我から荒出^{あれだ}し、抑えても抑え切れなくなつて、遂にはまだどうしてという手順をも思附き得ぬうちに、

早くもお勢を救い得た後の楽しい光景が眼前に隠現き、払つても去らん事が度々有る。

しかし、始終空想ばかりに耽ふけつているでも無い※多く考へるうちには少しは稍々行われそうな工夫を付ける、そのうちでまず上策というは、この頃の家内の動静を詳く叔父の耳へ入れて父親の口から篤とくとお勢に云い聞かせる、という一策で有る。そうしたら、或はお勢も眼が覚めようかと思われる。が、また思い返せば、他人の身の上なればともかくも、我と入組んだ関係の有るお勢の身の上をかれこれ心配してその親の叔父に告げると何となく後めだくてそうも出来ん。仮使たとい思い切つてそうしたところで、叔父はお勢を諭さとし得ても、我儘わがままなお政は説き伏せるをさて置き、却かえつて反対にいいくるめられるも知れん、と思えば、な

るべくは叔父に告げずして事を収めたい。叔父に告げずして事を収めようと思えば、今一度お勢の袖そでを扣ひかえて打附うちつけに搔口説かきくどく外、他に仕方もないが、しかし、今の如くに、こう齟齬そごッていては言つたとて聴きもすまいし、また毛を吹いて疵きずを求めるようではと思えば、こうと思ひ定めぬうちに、まず氣が畏縮いじけて、どうもその氣にもなれん。から、また思ひ詰めた心を解ほこして、更に他にさまざまの手段を思ひ浮べ、いろいろに考え散してみるのが、一つとして行われそうなのも見当らず、回り回めぐッてまた旧の思案もとに戻つて苦しみ悶もだえるうちに、ふと又例の妄想もうそうが働きたして無益な事を思わせられる。時としては妙な氣になつて、総てこの頃の事は皆一時じの戯たわぶれで、お勢は心から文三に背そむいたのでは無くて、只背いた風ふうをして文三を試ているので、その証拠には今にお勢が上つて来て、例の華かな高笑で今までの葛藤もだくだ

を笑い消してしまおうと思われる事が有る※²⁶が、固より永くは
 続かん※²⁷無慈悲な記憶が働きだしてこの頃あくたれた時のお勢
 の顔を憶い出させ、瞬息の間に^まその快い夢を破つてしまふ。ま
 たこういう事も有る※²⁸ふと気が^{かわ}滲つて、今こう零落していなが
 ら、この様な^{やくたい}葉袋も無い事に^{かかずら}拘ッて徒に^{いたずら}日を送るを^{きわめ}極て愚のよ
 うに思われ、もうお勢の事は思うまいと、^{しばらく}少時思の道を絶ッて
 まじまじとしていてみるが、^{おちい}それではどうも大切な用事を仕懸
 けて^や罷めたように心が^{おちい}落居ず、^{うろたえ}狼狽てまたお勢の事に立戻つて
 悶え苦しむ。

人の心というものは同一の事を間断なく思っていると、遂に考

26 白ゴマ点、 214-8

27 白ゴマ点、 214-8

28 白ゴマ点、 214-10

え草臥くたびれて思弁力の弱るもので。文三もその通り、始終お勢の事を心配しているうちに、何時からともなく注意が散つて一事ひとことには集らぬようになり、おりおり互に何の關係をも持たぬ零々ちぎれちぎれ碎々の事を取締とりしめもなく思う事も有つた。曾かつて両手を頭かしらに敷き、仰向けに臥ふしながら天井を凝視みつめて初は例の如くお勢の事をかれこれと思つていたが、その中うちにふと天井の木目もくめが眼に入つて突然妙な事を思つた※²⁹「こう見たところは水の流れた痕あとのようだな、こう思うと同時にお勢の事は全く忘れてしまった、そして尚お熟々つくづくとその木目に視入つて、「心の取り方に依つては高低たかびくが有るようにも見えるな。ふふん、『おぷちかる、いるりゆうじょん』か」。ふと文三等に物理を教えた外国教師の立派な髯ひげの生えた顔を憶い出すと、それと同時にまた木目の事は忘れてしまつ

た。続いて眼前めさきに七八人の学生が現われて来たと視れば、皆同学の生徒等で、或は鉛筆を耳に挿はさんでいる者も有れば、或は書物を抱えている者も有り又は開いて視ている者も有る。能く視れば、どうか文三うちもその中に雑まじっているように思われる。今越歴エレキの講義が終ッて試験に掛る所で、皆「えれくとりある、ましん」の周圍まわりに集つて、何事とも解らんが、何か頻しきりに云い争いながら騒いでいるかと思うと、忽ちその「ましん」も生徒も烟けぶりの如く痕迹あともなく消え失うせて、ふとまた木目が眼に入つた。「ふん、『おふちかる、いろりゆうじょん』か」と云つて、何故なにゆえともなく莞爾にっこりした。『いろりゆうじょん』と云えば、今まで読だ書物の中でさるれえの「いろりゆうじょんす」ほど面白く思つたものは無いな。二日一晩に読切つてしまつたつけ。あれほどの頭にはどうしたらなるだろう。余程組織ちみつが緻密に違いない……」。

さるれえの脳髓とお勢とは何の關係も無さそうだが、この時突然お勢の事が、噴水の迸る如くに、胸を突いて騰る。と、文三は腫物にでも触られたように、あつと叫びながら、跳ね起きた。しかし、跳ね起きた時は、もうその事は忘れてしまつた、何のために跳ね起きたとも解らん。久く考えていて、「あ、お勢の事か」と辛くして憶い出しは憶い出しても、宛然世を隔てた事の如くで、面白くも可笑も無く、そのままに思い棄てた、暫くは惘然として氣の抜けた顔をしていた。

こう心の乱れるまでに心配するが、しかし只心配するばかりで、事實には少しも益が無いから、自然は己が為すべき事をさつさつとして行つてお勢は益々深味へ陥る。その様子を視て、さすがの文三も今は殆ど志を挫き、とても我力にも及ばんと投首をした。

が、その内にふと嬉しく思い惑う事に出遇であった。というは他の事でも無い、お勢おせが俄にわかに昇うとうとと疎々しくなった、その事で。それまではお勢の言動に一々目を注つけて、その狂う意の跟こころを随あといたながら、我こころも意を狂わしていた文三もここに至たちまつて忽ち道を失つて暫く思念の歩あゆみを留とどめた。あれ程までにからんだ兩人ふたりの関繋かんけいが故なくして解ほつれてしまう筈はずは無いから、早まつて安心はならん。けれど、喜ぶまいとしても、喜ばずにはいられんはお勢の文三に対する感情の変動で、その頃までは、お政程には無くとも、文三に対して一種の敵意を挟さしはさんでいたお勢が俄に様子を変えて、顔を赧あからめ合あつた事は全く忘れたようになり、眉まゆを皺しかめ眼うちの中を曇らせる事はさて置き、下女たわふと戯たわぶれて笑い興じている所へ行きがかりでもすれば、文三を顧こころよけみて快氣に笑う事さえ有る。この分なら、若し文三が物を言いかけたら、快く返答するかと思わ

れる。四辺あたりに人眼が無い折などには、文三も数々話しかけてみ

ようかとは思つたが、万一ばんいちに危む心から、暫く差控さくていた――

差控さくているは寧むしろ愚に近いとは思ひながら、尚お差控さくていた。

編物を始めた四五日後の事で有つた、或日の夕暮、何か用事が

有つて文三は奥座敷へ行ゆこうとて、二階を降りてと見ると、お

勢こちらが此方へ背を向けて縁端えんばなに佇立たたずんでいる。少しうなだれて何

か一心に為していたところ、編物かと思われる。珍らしいうちゆ

えと思ひながら、文三は何心なくお勢うしろの背後を通り抜けようと

すると、お勢あちらが彼方向いたままで、突然「まだかえ？」という。

勿論人違ひとたがえと見える。が、この数週すしゅうの間妄想ぼうそうでなければ言葉まじを交

えた事の無いお勢に今思ひ掛なくやさしく物を言いかけられた

ので、文三ははつと当惑して我にも無く立留る、お勢も返答の

無いを不思議に思つてか、ふと此方こちらを振向く途端に、文三と顔

を相視みあわしておツと云つて驚いた、しかし驚きは驚いても、狼狽うろたえはせず、徒莞爾ただにっこりしたばかりで、また彼方向あちらいて、そして編物に取掛とつた。文三は酒に酔つた心地、どう仕ようという方角もなく、只茫然ぼうぜんとして殆ど無想の境に彷徨さまよつているうちに、ふと心附いた、は今日お政が留守の事。またと無い上首尾。思い切つて物を言つてみようか……と思ひ掛けてまたそれと思ひ定めぬうちに、下女部屋の紙障しやうじがさらりと開く、その音を聞くと文三は我にも無く突つと奥座敷へ入つてしまった——我にも無く、殆ど見られては不可わるいとも思わずして。奥座敷へ入つて聞いていると、やがてお鍋がお勢の側そばまで来て、ちよいと立留たどつた光景けはいで「お待遠まちうさま」という声が聞えた。お勢は返答をせず、只何か口疾くちばやに囁ささやいた様子で、忍音しのびねに笑う声が漏れて聞えると、お鍋の調子外はずれの声で「ほんとに内海うち……」「しッ！……まだ其所そこに」と

小声ながら聞取れるほどに「居るんだよ」。お鍋も小声になりて「ほんとう?」「ほんとうだよ」

こう成て見ると、もう潜ひそまつているも何となく極きまりが悪くなつて来

たから、文三が素知らぬ顔をしてふツと奥座敷を出る、その顔

をお鍋は不思議そうに眺ながめながら、小腰を屈ひくめて「ちよいとお

湯へ」と云ツてから、ふと何か思い出して、肝きもを潰つぶした顔をし

て周章あわてて、「それから、あの、若し御新造ごしんぞうさまがお帰かえんなすつて

御膳ごぜんを召上めしやがると仰おつしやツたら、お膳立とだなをしてあの戸棚へ入れときま

したから、どうぞ……お嬢さま、もう直宜すぐようござんすか? そ

れじゃア行つてまいります」。お勢は笑い出しそんな眼元でじろ

り文三の顔を掠かすめながら、手ばしこく手で持っていた編物を奥

座敷へ投入れ、何やらお鍋に云つて笑いながら、面白そうに打

連れて出て行つた。主従とは云いながら、同程おなじほどの年頃ゆえ、双

方とも心持は朋友ほうゆうで、尤もこれは近頃こうなツたので、以前はお勢の心が高ぶっていたから、下女などには容易に言葉をもかけなかった。

出て行くお勢の後姿を目送みおくつて、文三は莞爾にっこりした。どうしてこう様子が渝かわつたのか、それを疑っているに違いなく、ただ何となく心嬉もたしくなつて、莞爾にっこりした。それから例の妄想もうそうが勃然ぼつぜんと首を擡もたげて抑えても抑え切れぬようになり、種々の取留さまたまも無い事が続々胸に浮んで、遂には総すべてこの頃の事は皆文三の疑心から出た暗鬼で、實際はさして心配する程の事でも無かつたかとまで思い込んだ。が、また心を取直して考えてみれば、故無くして文三を辱はずかしめたといい、母親に忤さからいながら、何時しかそのいうなりに成つたといい、それほどまで親かつた昇と俄に疏々うとうとしくなつたといい、——どうも常事ただしとでなくも思われる。と思えば、

後註

喜んで宜いものか、悲んで宜いものか、殆ど我にも胡乱うろんになつて来たので、あたかも遠方から撩こそぐる真似をされたように、思い切つては笑う事も出来ず、泣く事も出来ず、快と不快との間に心を迷せながら、暫く縁側を往きつ戻りつしていた。が、とにかく物を云つたら、聞いていそうゆえ、今にも歸つて来たら、今一度運を試して聴かれたらその通り、若し聴かれん時にはその時こそ断然叔父の家を辞し去ろうと、遂にこう決心して、そして一ひと先まず二階へ戻つた。

- 二 ここから割り注
- 三 ここで割り注終わり
- 四 「狼狙^{あわ}てて」は底本では「狼狙^{あわ}てて」
- 五 ここから割り注
- 六 ここで割り注終わり
- 七 「引」は小書き右寄せ
- 八 「引」は小書き右寄せ
- 九 「引」は小書き右寄せ
- 一〇 「引」は小書き右寄せ
- 一一 「引」は小書き右寄せ
- 一二 「引」は小書き右寄せ
- 一三 「引」は小書き右寄せ
- 一四 「引」は小書き右寄せ

底本：「浮雲」新潮文庫、新潮社

1951（昭和 26）年 12 月 15 日初版発行

1997（平成 9）年 4 月 10 日 81 刷

初出：「新編浮雲」金港堂

1887（明治 20）年 6 月発行

※「※〔#「勺く夕」、第 3 水準 1-14-76〕」と「匆」、「※〔#「者」の「日」に代えて「至」、第 4 水準 2-85-3〕」と「耄」、「搔頭」と「挿頭」、「座舗」と「坐舗」の混在は底本通りです。

入力：佐野暢之、任天堂

校正：門田裕志、小林繁雄

2008 年 12 月 1 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。